

印度五十六

225-Y49ウ



1200500730930

山澤種樹著



遠藤書店刊



始



225
Y49

印度五十年史

山澤種樹著

遠藤書店刊

1

954

57

印度五千年史目次

凡例(序にかへて) …………… 9

☆

第一章 古代印度 …………… 三

石器時代 原住民
トラヴィデアン族 インドス文化

第二章 吠陀時代 …………… 三

アリアン人の侵入 原住民との争闘 十王の亂 アリアン人の生活
吠陀の宗教 インドといふ名稱

第三章 史詩・哲學時代 …………… 三五

恒河の流域 マハーバーラタ その梗概 韋提訶のジャナカ王
ラーマーヤナ 四姓—カスト 吠陀集録 婆羅門書
ウパニシヤット

第四章 釋迦 …………… 七

十六王國 六師外道 悉達多太子 成道 根本佛教の精神
傳道 四太王國と佛陀時代 佛陀の隆昌 ダリウスの來寇

第五章 阿育王と摩伽陀帝國 …………… 一〇五

九難陀王朝 亞歴山の遠征 孔雀王朝 南印の諸國 阿育王
阿育王、人頭を賣る 三藏結集 シュンガ王朝

古

第六章 外寇 貴霜王朝 ……二五

大夏のメナンドル バルチアの侵入と塞種 カーンヴァア王朝
アンドラ王朝と南印の状勢 大月氏の來寇—貴霜王朝 迦膩色
迦王 佛教美術

第七章 笈多王朝とプラナ時代 ……四五

笈多紀元 サムドラ・グプタと超日王 文藝復興期 古代の
科學 後期婆羅門教—印度教 十八のプラナ 白匈奴との戦
ひ カナウジの戒日王 ラーシブト期 婆伽梵歌 印度六
派哲學

第八章 回 侵入時代 ……七

最初の侵入 ガズニ王朝 マームットの來寇 反撃と劫掠—

十七回の侵入 マームットの性格 その後のガズニ朝 グー
ルのムハマット

第九章 回教帝國の諸王朝 ……九七

奴隸王朝 女王ラジャット・ベガム キルジ王朝 ツグラク
王朝 帖木兒の嵐 サイイド及びロジ王朝 葡人ヴァスコ・
ダ・ガマ印度に着く

第十章 莫臥兒人の侵寇 ……二九

ガブールのバール 第一回バニバット戦役 バールの死
フマーニオン 蒙塵と再舉

第十一章 アクバール大帝 ……三三

中

ジャラール・ウッジン・ムハマッド・アクバール 第二回パニバ
ット戦役 老將星達の叛亂 南船北馬—全印統一への道 ア
クバールの政策 新國教「ジン・イラヒ」と國語の制定

第十二章 英國東印度會社と莫臥兒帝國の盛衰 ……二五

香料の魅惑 二三の航海に就て 世界の征服者 タジ・マハ
ール 宇宙の征服者 マドラス・ボンベイ・カルカッタ 山
鼠のシヴァジ アウラングゼブの死と王位繼承戦

第十三章 侵略者ロバート・クライヴ ……二六

印度に於ける英佛の衝突 カルナチツクの紛争 アルコットの
籠城 印度成金—ナボブ 「黒」^{ブラック・ホール} 筭」 ブラッシーの戦ひ
クライヴの采邑 デイワニー租税徵集權

第十四章 ヘースチングスとマールタ聯邦 ……三三

一七七〇年の饑饉 ワーレン・ヘースチングス ロヒラの役
最初の印度總督 マールタ聯邦とハイダル・アリ スラト條約
と第二マイソール戦役 ベナレスの掠奪と王妃ベガム事件 コ
ーンウオリス卿 第三マイソール戦役

第十五章 英領印度の建設 ……三九

第四マイソール戦役 マールタ聯邦の崩壊 外地侵略戦 サ
チーの禁止と英語教育 アフガン出兵 シークの役と第二次ビ
ルマ戦争 英國膨脹の年表

第十六章 印度獨立戦争（印度兵の大叛亂） ……三七

カニング卿 印度精神の昂揚 大叛亂の原因 その近因

一八五七年五月十日 雄圖つひに成らず 企圖の挫折とその檢討

第十七章 英帝直轄統治時代 ……三七三

歴史の中断 アフガニスタンへの觸手 國民會議派の誕生
第三次ビルマ戰役から日露戰爭まで 第二革命運動—チラッタの擡頭 第一次世界大戰 ローラット法案

第十八章 獨立運動と大東亞戰爭下の印度 ……三九一

マハトマ・ガンジー 彼の闘争 サイモン委員會 獨立宣言
と圓卓會議 第二次世界大戰 昭和十六年十二月八日 クリ
ツプスの訪印 ワルダ會議と全印度の騷起

凡 例 (序にかへて)

一、悠久五千年の印度歴史を約六百枚に要約しようといふのであるから、記述は勢ひ重點主義をとらざるを得なかつた。

一、年號はすべて西曆を用ひた。當初の計劃では巻尾に年表を添へて、日本歴史との對照を一覽する便宜をもつ筈であつたが、既に豫定の紙敷を遙かに超過したので、斷念せざるを得なかつた。これは索引に關しても同斷である。但し、重要な年號については校閱の際に、できるだけ日本紀元或ひは年號を入れることに努めた。

一、固有名詞の讀み方は、既に通俗化されたものは、ガンジー、ヒンヅー教などと用ひ、敢てガンディ、ヒンドゥ教の如き近似音を避けた。このことは、漢譯の場合にも、徒らに難解な文字を用してあるものは、例へば摩竭陀を去て、摩伽陀をとつた如く、著者はなるべく目に訴へる負擔を軽減しようと試みた。

一、古代の歴史に於て、前條と恰も背馳するが如き漢譯の使用は、本書の讀者諸氏が他の専門書を讀まれた時に、困惑を感じられぬやうに、との老婆心に過ぎない。従つて中世以後は固有名詞は殆んど片假名としてある。例へば、五河地方とパンジャブ地方の使ひわけ、乃至は古代と近世に於て呼び方が異つてゐるもの、例せば、恒河と恒河の如きはそれぞれの時代の背景に一致せしめて用ひてある。漢譯のルビは毎頁、新出の文字のみパラルビを附し、もつて讀者の負擔の適當

ならんことを期した。

一、人名の下にある数字は、王侯の場合には特に示さない限り、即位からその死までの年號である。

例 シャー・ジャハン（一六二七年—一六五八年、一六六六年死）

一、本書には一般の歴史書のやうに、太古、中世、近世史等の別を設けなかつた。それは五千年の歴史の流れを重視したからに外ならない。が、若し讀者にしてさういふ區別を求めらば、第七章までを古代史、第十一章までを中世史、以下近世ならびに現代史と見做されたら、大過なきものであらうと思ふ。

一、印度史に於て、宗教と哲學との受持つ役割は甚だしく大きい。従つて、特に文化史的要素を多くとり上げることが著者の念願であつた。にも拘らず、著者の冗漫な筆は遙かに豫定を突破し、そのため回教徒侵入以後の、即ち回教文化、莫臥兒文化以下は成稿を有しながら、これを割愛せざるを得なかつた。これらは、他日、上梓せらるゝであらう本書の姉妹篇「印度文化史」に譲ることになつたが、これは著者のもつとも遺憾とするところであつた。

一、しかし、印度精神の發祥、その國民性の基礎となるべき古代文化については、若干の頁を割き得たと思ふ。これは本書の他の部分が、よし單なる興亡史に終始しようとも、いさゝか自らなくさめるところがある。そして、著者は謙虛に懇請する。若し本書が契機をなして、讀者諸氏が更に印度問題に關心をもたれたならば、印度哲學入門書の一讀を約束されたい。いかにしても、かの尤大な印度哲學體系は、本書のよく容れるところでない。のみならず、印度哲學は西歐哲學的

な所謂「哲學」ではなくて、そこには明かに印度が大東亞に屬してゐることを證明する東洋人の思索の息吹がある。

一、一般に史書のもつ乾燥さと晦澁さ、そして一見主題を忘れたかに見える微細への穿鑿——さういふ點に慚らずして、著者は本書の執筆を志した。が、果してどれだけのことができたであらうか——省りみて忸怩たるものがある。若し本書の擱筆に當つての、著者の感想をこの場所に書き誌すことを許されるならば、歴史は生きてゐる——といふことであつた。この巨大な生物と取りくんで、著者はしばしば修辭を忘れ、表現に感つた。いかに通史といふ仕事が困難であるか、それは印度史上に頻出する歴史の中断を埋めるよすがでもないことである。そして、著者は修史の完璧を誇りうる日本人として生を享けた幸福をしみじみ感じたのであつた。

一、本書の成るや、もとより古今先進の諸書に負ふところ多大であるのは言ふまでもなく、著者は先づ前賢の業態に對して、敬意と謝意を表するに吝かでない。一括して参考書を記載し、もつて著者の裨益されたことを表明したい。

一、最後に、商機を逸するの虞れあるにも拘らず、よく著者の請をいれて、稿の成るを快く待たれた遠藤書店主の忍耐は、特に誌して、深く感謝の意を表したいと思ふ。このことなくば、唯ださへ遲筆の著者には、よし大東亞戦争が本書の出現を早めたものとはいへ、なほ中途にして筆を投じた誘惑に抗することは不可能であつたと信ずる。

昭和十七年初秋

相州鶴沼にて。

邦文文献——高楠順次郎譯「印度古聖歌」宇井伯壽著「印度哲學史」木村泰賢・高楠順次郎著「印度哲學宗教史」木村日記著「印度史」高桑駒吉譯「印度五千年史」外務省調査部編「印度民族史」東亞研究所編「印度民族運動概観」東亞經濟調査局編「印度統治機構の史的概観」世界經濟調査局編「インドの政治と經濟」岩波書店「岩波講座・東洋思潮」平凡社「東洋歴史辭典」改造社「ウベニシャット全書」大川周明著「近世歐羅巴植民史」伊東敬著「現代印度論」脇山康之助著「現代印度の諸問題」——このほか、多くの宗教書・文學書その他は引用の個所に書名をあげることによつて感謝の微意を表した。

歐文文献——R. C. Dutt “Ancient India” E. J. Rapson “Ancient India” Z. A. Ragozin
 “Vedic India” V. A. Smith “The Concise Oxford History of India” E. Thornton “The History of British Empire in India” P. E. Roberts “History of British India” H. S. Williams “The Historian's History of the world—vol 22” A. Yusuf Ali “The Making of India” Verney Lovette “India: The Nation of to-day” J. Cumming “Modern India”

印度五千年史

第一章 古代印度

(西暦前二千年以前)

石器時代

太古の人類には、その最初は纏ふべき着物もなく、住ふべく定められた場所もなく、まして用ふべき道具や武器もなかつた。彼等は見つかり次第に、草の根や木の皮や果物などを食べながら、熱帯林をさまよひ移つて行つた。時には他の生物に殺された鳥獣の屍を見出し、かくて肉の味を知つた。やがて、これが比較的危険でない動物を追はせ、石や樹の小枝などでこれを倒したこともあらう。だが、まだこの時には人は火を知らなかつた。

火の発見は人類の歡喜であつた。人はそれによつて、生の肉よりも炙つた肉の方がはるかに甘味いことを知つた。それよりも、毎日の移動する生活が停止する地點で——それは闇が訪れたところであるが、暗黒のさなかに森の巨獣の唳り狂ふ叫聲に對しても、前のやうに怯える必要がなくなつた。彼らは火を焚いて夜を安全にすごすことができた。

その次ぎに來たのは石器時代であつた。石の形を改良して、礮製の武器や火打石などから、追々に上等な精巧な石器を作りだすやうになつた。既に石器は道具であつた。それがやがて焼物の製法をうながし、後には轆轤を使ふことを知つた。石器時代が何萬年前からはじまつたものか、正確には知られてゐない。しかも、その時代は長く續いてゐた。

印度にも石器時代はあつた。それは、今日なほ多く遺されてある原始人類の石器が發掘されることによつて、明かに示されるのである。さういふ考古學的な研究に俟つまでもなく、印度各地方にまだ殘存してゐるゴンズ族の文化が、現代に於ても燧石製の器具を用ひ、狩獵には弓箭を用ひ、原始宗教を奉ずるといふ石器時代の佛を殘してゐることからでも、容易に理解することはできる。

長い石器時代のうちに、印度で最初に知られた金屬は銅であつた。純銅で作られたさまざまの道具が、それは實に奇異な形をしてゐるが——カウンポール附近の恒河の古地層部、ベンガルからシンドに亘る中央諸州などから發見された。このことは、食物をもとめて移動つねならざる原始人類の漸くにして定住したことを知らせるものである。

人類社會の歴史に於て、もつとも重要な要素の一を形成する民族移動の主な動機は食物の缺

乏であつた。この缺乏の主な原因は、中央亞細亞に於ける陸地の漸次乾燥することである。この乾燥は、わが地球の全體に感ずる物理的原因によるか、或ひは他の推進によつてか、或ひはまた地殼の收縮、乃至は他の地方から吹いて來る、雨を含んだ風を遮る峻嶺によつてか、幾分か歴史的にその迹を辿りうる進歩の現象である。

(ラブソン「古代印度」)

彼等の放浪は、かくて此處に止んだのである。やがて、印度に於ける原住民として、質朴なさうして原始的な生活がはじまつた。見亘す限りの大平原と、灼熱の太陽と、豐饒な果實と——それは満ち足りた平和な生活であつた。

原住民

原始文明の條件のもとに定住するためには、人は、絶えざる給水と溫暖と日光とを必要とした。印度の先住民として知られてゐるコリアアン種族の分布といへども、右の條件から離れるわけにはいかない。彼等は廣く印度半島の各地方で、水と食物とを求めうる地點に、やすらかな生活を送つ

てゐたものと思はれる。

いまの状態から見て、コラリアン種族の所在と偏つて考へることは慎まなければならぬ。今日ではベンガル地方やチオタ・ナグプール地方の偏僻な山あひ、ヒマラヤ山系やグインドヤ山脈地帯に住んでゐるムンラ、コル、サントル等の諸族も、遊牧のための移動や、次々に彼等の生活を脅かした侵入者に追はれた結果にほかならない。

だが、一口に石器時代といつても、舊石器時代の原住民の遺物は多く南印度で發掘されてゐるのに反して、新石器時代のコラリアン種族は、その末裔が明らかに現存してゐる地方を中心とした、即ち中部から北部へかけてその生活の本據をもつてゐたものと考へられる。

印度の西北方から移住して來たこの先住民は、原始民族のつねとして、やはり遊牧民であつた。しかし、今なほ断定し兼ねるが、舊石器時代に存在したと思はれる原住民からみれば、あきらかに進歩の段階を示してゐた。その石器はよく磨かれ、形状にも人の智慧が働いてゐた。また土器や土瓶を使用してゐたが、その表面には稚拙であるとしても模様が描かれてあつた。彼等はもはや「美」を意識したのである。

遊牧生活といつても、それは日々ひんち毎日の移動する生活ではない。一定期間の生活に耐へるだけの

豊沃の地を求めてゆるやかな移動を續けてゐたのである。夏季の遊牧地は必ずしも冬季の牧畜生活に適當ではなかつた。だが、その季節的な移動を行ふまでの間は、相當永い期間をある一定の場所で半定住生活を營んでゐた。それは、コラリアン種族が、既に家屋を建てることも、また家畜を飼ふことも、農耕の初歩の技術なども知つてゐたことから、いま遡つて論證できるのである。

しかし、彼等のもつと文化の高い種族の侵入によつて、だんだんに僻地へ追ひこまれて行つた。背の低い黒色の原住民にとつて、もはや従前のやうな獨占的な土地ではなくなつて來た。そして印度は、五千年の昔、いまの人々からは到底かんがへられない世界に冠絶した印度文化を建設した種族を迎へたのである。

印度文化といへば、直ちにアリアン文化であると、人は思ふ。われわれも過去に於ては、さういふやうに教へられて來た。今や、このやうな太古の時代から印度史は改訂されなければならないのである。誰もが言ふアリアン人の歴史的な侵入の前に、印度文化は燦然と開花してゐたのだつた。

ドラヴィデアン族

ドラヴィデアン族が、コラリアン族と同じやうに、印度の原住民であると説かれてゐたのは、僅

か數年過去に遡つただけの史書にも見られる通りであつた。しかも、現在のドラヴィデアン族が、南方印度に多く残存してゐることをもつて、彼等が南印度の原住民であると見做されてゐたのである。

だが、かういふ説が覆へされる日が來た。それは近年に於ける考古學の輝かしい勝利であつた。即ち、一九一八年から今もなほ續いて研究されてゐる發掘によつて、新石器時代から鐵器時代にかけて、いくたの貴重な遺物が、約六千年の長い歲月の後に、われわれの目の前に、整然とした偉容をうかべたのである。これらの遺物は、あきらかにアリヤン種族のものではない、より古代の豪華な文化の跡を物語つてゐた。

その發掘された場所は、シンド州ラルカナ地方のモヘンヂョドロ、ベルチスタンのニレ、パンジャブ州南部モンタゴメリ地方のハラッパ——の三箇所である。

印度といふ巨大な突出三角形の恰も底邊を作るかのやうに、常時雪をいたゞくヒマラヤ山系から東西へ流れる二大河——そのうちのインダス河の流域を思ひ泛べてみると、この發掘が何れも洋々と流れ下る大インダス河に沿つて點在してゐることが知られるであらう。この古代文化を、その流域にならつてインダス文化と呼ぶのは自然である。

ドラヴィデアン種族は、前に述べたコラリアン族のやうな他の印度民族に較べて、はるかに長軀であり、人種學的に言へば、黒色にして長頭廣鼻長前腕といふ特徴をもつてゐる。ドラヴィデアン族の遺跡として從來あげられてゐたのは、その根據地である南印度のアディチャール、コインパトール、ベルンバイル等であつた。いまインダス文化の遺跡をこれに加へれば、ドラヴィデアン族は、南北兩印度に定着してゐたものと斷じることが出来る。その文化のもつとも絢爛たる時代は西紀前三千年から、遅くも二千八百年より降らないものと考へられる。アリヤン人の侵入より先立つこと、約一千年——ドラヴィデアン族は泰平に繁榮し独自の文化圏を象づくつてゐたのであつた。

インダス文化

インダス文化がドラヴィデアン文化と同じものではなからうかと考へられて來たのは、埋葬した死體とそれに關する風習や、死體を容れる素焼の大瓶——それらが南印度の有史以前の遺物と全く一致することによつて、知られたのであつた。そのうへ、考古學はそれらが地中海文化とも密接な關係をもつことを知らせ、更に言語と人種學的な研究の結果は、ドラヴィデアン種族がスメリアン種族と同一系統にあることを教へてゐる。

インダス河流域地方の發掘によれば、その文化の在り方は、古來、世界文明發祥の地として知られてゐたメソポタミア文化や埃及文化と時を同じくした華麗な文化が、大きな規模と構想とをもつて存在してゐたことを示してゐる。

それは實に埋没して幾千年を闊みした太古の都市であつた。煉瓦で補装された街路。並び建つた煉瓦建築。どの家も井戸や浴場を備へ、排水工事も施されてゐる。ところどころに禮拜堂もある。寺院もある。勿論、墓も残つてゐる。

素焼の陶器が發見されたところから、もうその頃（といふのは西曆前約三千年であるが）、その文化都市の住民には輻輳の技術をもつてゐたことが解つて來た。土器ばかりでなく自然石の食器もいくつか出て來た。そのほかテラコッタや腕輪や武器もあつた。とくに彩色した陶器があつたことはこの文化の高さを現はしてゐるし、更にいくつかの古代の印章は、インダス文化がスメリア文明と同じ流れをもつてゐたことを證明してゐた。

スメリア文明——ユーフラテス河とチグリス河の中間地方に榮えた古代バビロン文化——では、早くから印章が使用され、王侯や貴族や商人は、きはめて藝術的に彫刻された印章を所藏してゐたと言はれてゐる。

インダス文化地域で發掘された印章には、多く家畜の繪が描かれてあつて、その上部にはぎこちない楔形文字が並んでゐる。この圖案から見て、その頃のドラヴィデアン族の家畜として牛や羊や山羊はあつたが、馬はまだ用ひられてゐなかつたことが解る。なほ次のやうなことも考へられる。まだ言ふまでもなく、紙は發見されてゐなかつた。そこで、文書や記録や計算などはもつばら粘土に書かれ、かつ捺印されたものであらう——といふこと。

交易と政治はこれらスメル人に、柔かい粘土の平板に、葦の尖端をもつて疏畫を刻んで記録をつくることを教へた。早く書くことは、やがてこの繪を略して楔形の符號の集圖とした。

（プレステッド「古代文化史」）

スメル民族が榮華の夢を謳つたバビロン文明とインダス文化とが、今こゝに明確な聯繫をもつたとしても、ドラヴィデアン族の印度への浸透路は、まだ確定した線を描き得ない憾みがある。或る人は言ふ、彼等はメソポタミアからベルチスタン、パンジャブを経てシンド地方を通り、インダス河流域に達した、と。また他の論者は、ベルシヤ灣に及んでゐたバビロニア帝國から海を越えて、

オマン灣を經、直接インダス河のそと海岸に達したのだ、と説く。

もう一つの疑問、それはドラヴィデアン族がまったくスメル文化の同一民族であるならば、スメル文字即ち楔形文字の記憶がいつ中絶されたものであらうか——といふことである。

この二つのことは、早急な結論を避けて、われわれはなほ姑くかすに時日をもつて考へなければならぬことである。

因みに、ドラヴィデアン族は母系社會から成り立つてゐることも、記憶に留めて置くことが、のちに役立つ場合があることを忘れてはならない。

さて、われわれは印度文化の第二の要素について知るべきときが來たやうに思ふ。それは雄大なドラヴィデアン文化の最盛期から約一世紀ほどのちに行はれた、西暦前二千年頃からの好戰的なアリヤン人の侵入である。

第二章 吠陀時代

(前二千年——千四百年)

アリヤン人の侵入

印度侵入史の第一頁を飾るアリヤン人は、巨大な三角形の西北部から侵入して來た。ヒンヅークシ高原に大規模な移動を見せた印歐民族は、やがてカラコルム山脈とヒンヅークシ山脈の僅かばかりの隙間である隘路を通つて、始めて印度侵入の第一歩を踏んだのであつた。なほその當時まだ大家族制を守つてゐたアリヤン民族は、茫洋たる印度河流域の大平原を眺めて、彼等の長途の移動もやつとその終りに達したことを知つた。遊牧から次第に農耕生活に入らうとしてゐたアリヤン民族は、豊饒な土地を見てやがてもたらされるであらうその無限の收穫を謳歌した。

印歐民族を生むに到つたところの父祖民族は、西暦前三〇〇〇年頃、恐らく裏海の東と東北の草地を占據しつゝあつたやうである。彼等がなほ一民族をなしてゐたときには、まったく同

一の言語を話してゐた筈であつて、近代ヨーロッパの文化民族の談話語は、すべてこの言語から派生したものである。この父祖民族は銅を用ゐはじめはゐたが、なほ大部分石器時代にあつた。それ故その年代は前二五〇〇年よりは遅くなかつたに相違ない。

(プレステッド「古代文化史」)

やがて、右の父祖民族と別れたアリヤン人種は裏海東部の大草原にその畜群を放牧しながら、徐に一そう東方へ移動して行き、さらに前二〇〇〇年頃、大きな分裂によつて、その東方の部族はさらに東南方へ針路をとつて、高原をさまよひつゝ遂に印度に到着したのであつた。

この分裂は宗教上の争ひから起つたといはれてゐる。さうして、二つに別れた一方は、再び西へ引返へしさらに南下してイラン高原から海へ下る平原に定住した。イラニアン民族がこれである。その國を波斯といひ、その宗教をゾロアスターと呼び、その聖典をアヴェスタとなへてゐる。

されば、印度へ侵入した民族も、波斯へ定着した民族も、ともにアリヤン人種であつたとすればこの二つの分派に屬する文化が互に同じ源から發してゐることは、容易に理解されるであらう。とはいへ、其處には分裂しただけの相違も残つてゐる。印度アリヤン族の聖典「吠陀」によると、雷

霆神因陀羅は國民保護の神となつてゐるが、「アヴェスタ」では惡神とされてゐるのである。

さて、われわれは印度へ侵入したもう一方のアリヤン人種の上に戻らなければならぬ。長い放浪を續けて、彼等が到着した地點には、五つの大河が洋々と流れそそぐ、廣漠たる五河地方の大平原であつた。五つの河の流れはやがて一つに合流して、それがインダス河の悠久の流れを作つたのである。

乾燥的なアジアから多濕的なアジアへ、オアシスの地域からモンソーンの、降雨の地域への移動がここに完成された。この時代を史家は吠陀時代あるひは特に梨俱吠陀時代と呼ぶのは、印度のみならず、恐らく世界最古の古典文學である四つの吠陀（あるひは特に梨俱吠陀）の書きしるすところに依存するからでもある。

北部高原から群れをなして南下して來たこの長軀白膚の民族は、しかし、なほ狩獵と牧畜をその主な生活としてゐた。農耕の術は知つても、安住する土地を定めかねて、牧草を追ふて五河地方を彷徨した。彼等は深い森林を踏みわけ、道なき高原を越えて來たとはいへ、この大平原はひとりアリヤン人種の獨占するところではなかつた。そこには短軀黒面の先住民がゐた。

アリヤン人種の印度侵入は、勢ひこれらの土民との争ひであつた。就中、既に述べたドラヴィデ

アン族との……。

原住民との争闘

その頃、原住民はどんな生活を営んでゐたであらうか。土蕃をダシユウ或ひはダサと蔑稱してゐる梨俱吠陀^{リグヴェダ}によれば、「その勇をふるひて、ダシユウの諸都市を破壊した」とあるから、既に數多の地點に城砦を築き、部族の集團生活が営まれてゐたことを知ることが出来る。彼等の平和を破りに侵入したアリヤン族は、定着を知らぬ彼等の生活とは異つた、城を築き、村邑を形づくつてゐた先住民の、むしろより高度な既述のドラヴィデアン文化に直面したのである。

しかし、アリヤン人は長い移動生活によつて、自然の困難やさまざまな障害物に對して挑戦する力を知らず知らずに養つてゐた。遊牧生活の常として、彼等は自づと見聞をひろめて行つたし、さまざまな定住地とも接觸して來た。勢ひ異人種の顔も見馴れてゐた。しかも彼等は耕地に定著してゐる住民よりも、鑛物の知識が豊富であつた。といふわけは、彼等は或ひは山道を越え、或ひは岩石地方さへも通らなければならなかつたからである。青銅や鐵の發見は、恐らく遊牧生活の絶えざる移動が彼等に恵んだものであつたらう。

洋の東西を問はず、世界歴史の古い時代を緝けば、アリヤン人が等しく「都市の侵略者であり、強奪者であり、掠奪者であり」かつ「掠奪をこととしてゐた豪膽な牧畜民であつた」(ウェルス「世界文化史大系」)ことを教へられるのであるが、印度を襲つたアリヤン人達は一そう意識的であつた。すなはち、新しい土地を求めに侵入しようとした好戰的な精神が、一路これらの先住民との戦ひをいどませたのである。

侵入者は彼等の信ずる自然の神々に祈禱し、皮膚の色の異なる種族と戦つた。それは、同時に宗教の戦ひでもあつた。

因陀羅^{インドラ}は戦ひに、その崇拜者たるアーリヤを助く……彼はアーリヤのために、獻供を行はざる諸種族を征服す。彼は黒面の敵の皮を剥ぎ、これを殺し、これを灰にす。彼は有害殘忍なる諸種族を焼き殺す。

(梨俱吠陀^{リグヴェダ}・第一卷)

因陀羅とは吠陀アリヤン族のもつとも尊び、かつ恃んだ雷霆神である。彼等は神に祈つて突進し

た。さうして、勝利は侵入者のものだつた。何故ならば、アリヤン族は、既にいくたの試煉によつて、優秀な軍馬と、志氣を鼓舞する軍鼓と、さうして嚴重な武装・鋭い武器とを持つてゐたからである。殊に軍馬は土民の恐れ戦くところであつた。その故に、アリヤン人は、軍馬をダヂクラ（神聖なる軍馬）と呼び、その讚頌は梨俱吠陀の中に見えてゐる。われわれは、この侵入者の勝利の跡を梨俱吠陀から拾つてみよう。

鷹の飛び來るを見て 鳴く鳥の如く 敵は財寶・家畜・食物を 求めて疾走するダヂクラを見て 叫びたけぶ。敵は馳驅すること電光の如き ダヂクラを恐る。ダヂクラは一千の敵を走らせ 意氣ますます旺んにして これを留むるを得ず。

（梨俱吠陀・第四卷）

軍鼓高く響きて 戦機の熟せるを知らず。われらの諸將は 軍馬に乗りて指揮す。あゝ 因陀羅よ 兵車にたちて戦ふわれらの戦士をして 勝利を得さしめよ。

（梨俱吠陀・第六卷）

戦ひ近づけば 戦士雲の如く現はれ 鎧をつけて進む。

われらは弓をもつて 勇猛傲慢なる敵を征服せん。弓よ 願はくは計略を破らんことを。

箠は親の如く 矢はその子の如し。箠は音をたて 戦士の背にあり 戦ひに矢を與へ その敵を征服す。

軍馬はその蹄をもつて 砂塵をまきあげ 高々と嘶き その兵車を引いて 戰場を疾驅す。

軍馬は退かず 掠奪をこととする敵を その蹄に蹂躪す。

（梨俱吠陀・第五卷）

このやうに、アリヤン人は兵車を驅り、鹿の角や鐵を鏃にした矢を用ひ、鎧に身を固めて、土族の城砦を次々と攻め陥していつた。のみならず、兜、楯、投槍、斧、劍なども武器として役立たせてゐたことが、他の讚頌によつて述べられてゐる。侵入者の優秀性とはとりも直さず、かういふ武器のもつ威力でもあつた。

戦ひ敗れた土民は次第にその原住地を追はれ、或ひは戦野に屍をさらし、或ひは捕へられて、のちに首陀羅姓を名乗る因をなし、その大部分は勢ひ南方へと潰走して行つた。が、反撃を試みなかつた譯ではない。復讐の一念に燃えた土族は、時に大舉して勝利者の部落を襲ひ、財寶・家畜を掠

奪した。彼等は鯨波をあけて、到底追跡できない千古不斧の大森林へ遁走することがしばしばあつた。さうしてみれば、勝利者は必しも絶対のものではなかつた。短軀輕捷な土族の逆襲は、よしその城砦を奪つたとはいへ、彼等の樂觀を許さなかつた。原住民を滅ぼして、五河地方の各所に部族の集團を形づくつたアリアン人は、常に敵の反撃に怯えつゝ、漸く定住の態勢をとるに至つた。彼等が朝夕の祈禱に、次のやうな神の讚頌を行つてゐたのは、あきらかに土族の逆襲を恐れたからに外ならない。

あゝ 因陀羅よ かの掠奪隊を殲滅せよ。彼等を廣い 汚れ穢れたる 底なしの穴に投ぜしめよ。

あゝ 因陀羅よ 卿は三たび 掠奪隊を殲滅せり。われら民はこゝに 卿の偉勳を讚美す。

(梨俱吠陀・第一卷)

あゝ 因陀羅よ 僧は卿の武勳を讚美す。卿はいくたの掠奪者を滅ぼして 戦ひを終結せしめたり。卿は神を崇拜せざる敵の諸都市を破壊せり。卿は神を崇拜せざる敵の武器を摧けり。

(梨俱吠陀・第一卷)

戦ひは終つた。今やアリアン人が勝利を占めたのだ。だが、彼等は征服者として勝利の美酒に酔つてばかりはゐられなかつた。大家族制の集團生活といふものは、お互の部族の間に勢力の均衡が破れたときには、力に訴へてその勝敗を争ふ日がいつか来るものである。十王の亂——それは一つの例に過ぎないが——として梨俱吠陀の教へるものは、さういふアリアン人同志のみぐるしい争ひがあつたことを物語つてゐるのである。

十王の亂

印度西北部の高原から侵入して來たアリアン人は單一の部族ではなかつた。彼等は、この十王の亂に見られるやうに、各々の部族がそれぞれの部族の長を頂き、互ひに聯絡のない生活を営んでゐたのである。

部族對部族の對立は、そこに權力を生み、嫉妬を生じ、絶えまない反目があつた。牧畜と狩獵とを生活の糧とした彼等には、青々と緑したる牧草も、その所屬を争ふ種となつた。射落した鳥や獸の争奪も、しばしば物議をかもす因となつた。紛争はかうして醸成されて行つた。

廣漠たる五河地方^{パンシヤ}には、やがて、共通の言語と文化をもつ部族の間にも、甚だしい勢力の消長があつた。中でも一ときは勢威を誇つてゐたのはトリツ族とバーラタ族であつた。このほかにも五種族と呼ぶヤドウ、ツルヴァシユア、ブル、アヌ、ドルフヤの諸族も競ひ立つてゐた。

トリツ族の王スーダは婆羅門^{ブラフマン}ヴィシユワミトラの祈願によつて五河地方に勢威を擅まにするやうになつた。同じくスーダ王の王宮に仕へるトリツ族出身の婆羅門ヴァシシュタと祭典に關する意見の相違から、ヴィシユワミトラは遂に相拮抗するバーラタ族に走つた。バーラタ族の敵意は燃えたつた。もとよりスーダ王の支配を快よく思はなかつたバーラタ王は、同じ思ひの五種族を語らひ、ほかにもかねてスーダ王の權威をねたんでゐたシュムユ、アジア、シユイクル、ヤクシユの諸族を誘ひ、こゝに十王の同盟が成つた。

かくて、婆羅門同志の感情のもつれが、直ちに政治の動きと化し、勢力争奪の戦ひにまで押し込まれたのであつた。

五河地方の久しい平和も、また均衡が破れたのである。十王の同盟軍は、こゝにスーダ王に對して戦端を開いた。數に於て優勢を誇つた十王軍は驍々と馬を進めた。

が、天帝は信仰あつきスーダ王に組みして、バルシユ河を渡渉する十王の兵を破つた。これが梨

俱吠陀^{クヴェダ}のしるす十王の亂の梗概である。以下、その一部を引用するのは、太古の宗教とその生活との結びつきを考へたいがためである。

ヴァシシュタの子等よ 因陀羅^{インドラ}は汝等とともに 信度川^{シンド}を渡れり。因陀羅は汝等とともに

ペーダ王を征服す。因陀羅は十王の戦ひに 汝等の祈りによつて スーダ王を擁護す。

あゝ 因陀羅及び婆樓那^{ポラナ}よ 大地の終りは兵塵に没し 鬨の聲は天に達す 敵軍は今や近づきたり。我等が祈りをきかば 因陀羅及び婆樓那よ 恵みをもつて速かに我等の方に來れ

あゝ 因陀羅及び婆樓那よ 卿等はスーダ王を救へり 戦ふ能はざるまでに ペーダ王を膺懲せり。卿等はトリツ族の祈禱をきけり 僧侶たちの求むるところ 戦ひに果實を結べり

因陀羅及び婆樓那よ 卿等は十王の戦に於て 十方より圍まれしスーダ王を恵みたり。白衣のトリツ族は假髪をつけ 供饗を捧げ 讚頌を歌ひて 神を讚美せり

因陀羅は戦ひに於て ブリトラ族を征し 婆樓那は敬虔なる法を護る 勇剛なる神々よ われらは今 妙なる調べをもて 讚頌を歌ひ 卿等に祈願す。あゝ 因陀羅及び婆樓那よ われらに幸福を授け守護せられよ

註* グアシシュタ——スーダ王の側近に奉仕する婆羅門の僧侶。

** 婆樓那——萬物を包擁する神、即ち蒼天の至上神である。

アリヤン人の生活

五河地方のアリヤン人の生活的根據は、なほ主として牧畜に依存してゐたことは、前にしるした通りであるが、彼等は、しかし、森林を切り開き、村邑を形成し、徐々に定住の道を選んだのであつた。アリーヤとは「尊貴」あるひは「高貴」の意と、「耕作者」の意を表はすものといひ、既に彼等は耕作の技術を有してゐたことが窺はれる。

が、農耕は豊饒な土壤と、それを露ほす灌漑用水と、生育に必至なる太陽のあまねき照射とを必要とするのは、こゝに言ふまでもない。

思へばアリヤン人の長い移動生活も、さういふ土地と水とを求めた放浪であつたと言へるのだつた。彼等は、ドラヴィデアン族が母系社會制を有してゐた(第一章参照)のに反して、父權的大家

族主義を奉じてゐた。従つて、一家は父に、父は家系の長老に、さうして家系は部族の長にそれぞれ指揮統率せられてゐた。彼等が村邑を形成するに當つても、族長は占卜によつて、その土地が上記の條件を充し得るやを伺ふのであつた。當時のパンジャブ地方は五河あるひは七河の河川がその兩側の平原を露ほしてゐたとはいへ、なほ廣漠たる面積は、溝渠をうがたねば灌漑の便を有しなかつた。

われらは田野の王とともに この野を耕さん 願はくば王よ われらの馬に力を添へんことを 然してわれらに幸福を授けよ。

あゝ 田野の王よ 牝牛の乳を興ふる如く 清く新しき多量の雨を興へよ。水の王よ 願はくばわれらを幸福ならしめよ。

(梨俱吠陀・第四卷)

と歌つたやうに、馬や牛を使つて農耕し、雨を祈つてその大地をあまねく露ほすのを待望した。かうして耕地を得れば、畦もまた讚頌の對象であつた。

あゝ、多幸なる畦よ、^{シ、イ、}來れ われらは御身に祈禱す 願はくば富と 豊かなる穀物を興へよ

(梨俱吠陀・第四卷)

農耕の産するものは何であつたらうか。小麦や大麦があつたことは考へられても、米はまだ稻さへも知られなかつた筈である。

家畜としては特に牛を珍重した。牝牛は農耕に缺くことのできないものであつた。牛はしばしば紛争の種となり、財産を示すに牛の頭数を數へ、貨幣のない上代の商取引は、これも牛を標準として行はれてゐた。

牝牛はのちに宗教的な讃仰の象徴となつたが、さうして牝牛崇拜は、五千年後の今日に至つてもヒンヅー教徒の犯すべからざる戒律となつてゐるのであるが、吠陀時代の牝牛は乳を興へることによつて、その乳のやうに豊かに雨を興へよ、などと讃頌に見えてゐる程度に過ぎなかつた。

アリアン人が金屬細工の技術を習得してゐたことは、鏃や甲冑、投槍などが武器として使用されてゐたことから知られるところである。さらに、森林を開いたのちに、その木材をもつて家屋を

建て、草木の皮を織つた布片で皮膚を蔽ふことも行はれてゐたもののやうであつた。

家族のうち男はすべて牧畜または農耕に従つた。部族の長を除いては、如何なる階級制度もなかつた。そして、男は牧夫であり、農夫であると同時に、一朝ことある時は戦士となり、戰場を舞臺に勳をあげんと勵む。戦ひ終れば、再び彼等は平和な耕作にいそしむのである。

結婚は嚴肅に行はれた。

青春の女子は自らその夫を選ぶ権利をもつてゐた。後世のやうな一夫多妻制は、その當時は特例として王または酋長のみ許され、人民は一夫一婦の制度を固く守つてゐた。従つて、婚姻の儀式は、天帝に對する誓ひによつて、善良な夫、勤勉な妻として、借老同穴の契を結ぶのである。

(新婦に告ぐ) あゝ、新婦よ 汝はよろしく良人の家に入るべし われらの奴婢に われらの家畜にも 幸福を興へよ。

その眼に怒をあらはすこと勿れ 汝の良人をして幸あらしめよ 家畜にも恵みをたれよ 情愛に富み 生々としてあれ 勇子を生み 天神を尊び 溫和なるべし われらの奴婢に幸あれ われらの家畜に幸あれ。

あゝ めぐみ多き因陀羅よ 新婦をして子に富ましめよ 財寶にめぐませよ 彼女に十子を
與へよ その良人と共に十一人たらしめよ。

(梨俱吠陀・第十卷)

不幸にして嫁がずに家に留る女子には、父の財産の一部が興へられたし、寡婦の再婚も許されて
ゐた。後世の女子の存在がまつたく因循姑息に流れたものとはせ考へれば、如何にこの時代の生
活者が自由人であつたかが解る。

部落の長の館は特に宏大に建てられた。それは館がその部族の中心であつたからである。彼等は
其處で宴會を開いたり、勝負事をしたり、時には議論も行はれたりした。アリヤン人がたいへん歌
をうたふことの好きな人種であることは、その聖典である吠陀が詩の形をとつてゐることからも考
へられるが、その他にも歌が長い彼等の漂泊生活を元氣づけるために役立つたといふことも一つの
理由であつたと思はれる。いつも館の會合では、餘興として朗吟が行はれた。記録はかうして歌の
形として、長く口々に傳承されて行つた。

部族の長がやがて王とよばれるやうになるのは自然であつた。そして、王の對立や連衡が行はれ

たことは前に述べた通りである。しかも、人口の膨脹は、アリヤン人をいつまでも五河地方に定着
せしめなかつた。

吠陀の宗教

耕作者であるアリヤン人が、出來秋の稔りを得るために、如何に雨を望んだか、といふことにつ
いては前に述べたとほりである。雨を欲する心は、自づと雨を伴ふ雷霆神である因陀羅に對する深
い崇敬の念をおこさせた。よき畦を欲するがために、畦は神格化されるのである。太陽の恵みに感
謝する精神は、太陽の種々な現象をも神とせずには居られなかつた。

このやうに、吠陀時代の宗教は(それが若し宗教と呼ばれるならば)自然崇拜のそれであつ
た。

かくて、彼等はあらゆる自然現象を神格化したのであるが、たゞに宇宙全般の現象ばかりでなく
彼等自身の運命に至るまで、すべて神々の力によつて支配されるものと信じたのである。さうして
特に天體現象に感激し、神々の顯現と尊崇したところに、太古の宗教的特徴があつた。こゝにはそ
の代表的な神々について、しばらく考察を続けよう。

天上の神としては、光明を興へるものツヤウスを光りの神とし、宇宙の支配者として天の神・婆樓那を立て、道德・物質の規律たらしめた。また婆樓那はこれを畫の空の神格である密他羅と對照すれば、夜の空といふ狭い解釋も生じる。

太陽の威力はこゝで説くまでもない。むしろ梨俱吠陀の神話は太陽神話を中心にしたものと言つてもよいほど、彼等はその功德をあらゆる方面から觀察していくつかの神を生ぜしめたのである。即ち、空中にある本元的な太陽の神格化はスールヤである。その下界を照らし、人に生命を興へるものとしてはサヴィトリがあり、牧畜の神として榮養を興へるプーシャンあり、三步にして天を濶歩するといふ太陽の力を示す神としてヴィシヌがある。

雷霆の支配者にして且つ軍神たる因陀羅への讃頌は、多くの引用によつて既にわれわれの知るところである。彼は手に金剛杵をもつて毅然として立つ。この外に、暴風雨の神としてマルツ、風の神ヴァーユなどは、何れも志氣を鼓舞する戦ひの神々であつた。

太古の人類が火を尊んだことは、いまさら説くまでもない。吠陀アリアン人種が、地上の神の最高位として、火の神アグニを置いたのも自然であつた。この外、神々へ供養する神酒ソーマも神格化され、地の神ブリチヴィ、死の神ヤーマ、祈禱の力を神格化したブリハスベチなど、次々と新し

い神々が生れた。何故ならば、感動のあるところ、尊崇の起るところ、それは何ものにもあれ、彼等は神と祭つて神聖視したのであるから……。

これらの神々の外に二體の女神がある。

ウシヤスは曉の女神で、優美と微笑とを表象し、時に舞姫に擬せられ、人類の友として親しまれてゐた。サラスヴァチは川の神辨財天で、川の岸で祈禱をしばしば行つたところから、川も神聖となり、祈禱中の讃頌の女神として樹てられたものであつた。

われわれは、もはや最高の神を三體も所有せねばならぬのである。即ち、婆樓那と因陀羅とアグニ——がそれである。このやうに、何れも至上の神としてあがめられるといふことは、これを裏返して考へてみれば、印度侵入のアリアン人種が決して單一の種族ではなかつたといふことの證左なのである。

十王の亂を始めとして、いくつかのアリアン族相互間の争ひには、かういつた宗教上の問題もあつたのである。實に、印度人の生活と宗教との結びつきは、有史以前の吠陀時代から、今日に至るまでの連綿たる傳統であつた。われわれは、今後、五千年の歩みの中にいくつかの宗教の興廢を見るであらう。が、その何れにせよ、吠陀時代の宗教の如く、素朴な信仰を見ることはできないであ

らう。これらの宗教を多神教と見るもよし、また最高神の表現をみて一神教とするもよし、更にマツクス・ミュラーの如くこれを「交替神教」と考へるのも亦よからう。その名稱の如何をとはず、彼等の宗教生活の純真性と素朴さとは、やがて世界に冠たる印度哲學を生む培養土となつたのである。

インドといふ名稱

アリヤン人がインダス河上流の五河地方^{パンジャブ}へ最初の足跡をしるした時、彼等の目にうつつたものは滔々と千古不滅に流れ去る水流であつた。彼等はほとぼしる水勢に感動して、
「シンヅウ！」

と叫んだ。シンヅウとは「海」の義であつた。そのまゝ、流域をシンヅウと稱し、五河を集めて海へそゞろインダス河は、往古は信度河^{シンド}と呼ばれた。

この稱呼が波斯へ入ると、ゼンド語の轉訛によつて、サ行はハ行に移つて行き、インダス河流域の住民をヒンヅ^{*}とし、その國をヒンヅスタンと言つた。蓋し、スタンとは住所の意にほかならない。

三度び、この名稱が呼ばれたのは希臘であつた。希臘人はハ行をア行に發音して、ヒンヅはインヅとなり、その民をインドイと呼んだ。

支那の文獻によれば、シンドといふ音を表はすのに、身毒、申度、眞定、信度、辛頭の文字をあて、ヒンドは賢豆に、ヘンドは天笠、天豆、天定などと書きしるしてゐる。

わが國では古くからインドを天竺と言つてゐたのは、印度文化が支那を経由して傳へられたためであつた。現在のインドを表はすためには、日・支ともに印度といふ字を用ひてゐるのは周知の通りである。

インドといふ名稱は、以上の諸例によつて考へてみるに、それは外國から呼んだ名稱に外ならないのである。印度人自身は、今も昔も、正確に國名を語らせるならば、「バーラタ・ヴァルシャ」（バーラタの領土）或ひは「バーラタ・カハンダ」（バーラタの國）と言ふのである。

この頃のことであつた。この第二のアリヤン人を、木村日記氏の啓蒙的な論證によれば、ヴラーツ
チャ・アリヤン種族と呼んで、第一の正統アリヤン（吠陀アリヤンともいふ）と區別してゐる。即
ちヴラーツチャとは「破門された」といふ意と「混血された」といふ義とを有してゐるからである。
ヴラーチャ・アリヤン（非正統あるひは非吠陀アリヤン）はいろいろな點で、第一の侵入アリヤ
ンと異つてゐる。正統アリヤンの白皙な色に對して、彼等は混血によつて黒色を帯びてゐた。また
前者が長頭人種であるのに、後者はあきらかに短頭人種であつた。この第二のアリヤン族が何處
から侵入したか、といふことにはいくたの異説がある。が、ともあれ彼等がその第二回の侵入を行
つたときには、最初の侵入者は既に恒河の中部地方にまで移動してゐた。そこで、彼等は吠陀アリ
ヤン種族の定住地を迂廻して、恒河の一層下流地方や、中部印度を越えてカチャワル半島やデツカ
ン地方に進出して行つたのである。

かうして、遠くその源をヒマラヤ山系に發して、滔々と流れくだる恒河の大流域には、大小の王
國が並び立つに至つた。拘樓、般闍羅、憍薩羅、迦尸、韋提訶、鶯伽などの諸王國が有力であつた
が、その中でも拘樓と般闍羅との勢力は、殆んど他の諸國を壓倒してゐた。

マハーバーラタ

拘樓王國といふのは、十王の亂に見えてゐるバーラタ族とプール族との融合によつて生じた王國
であつた。彼等は前十四世紀頃、恒河上流に移住し、首府を河畔のハスチナプラに置いた。

同じ頃、般闍羅も拘樓の南に移り、部落政治から國家政治へ移つていつた。般闍羅は五種族の聯
邦であつたが、過去の（十王の亂）それではなくて、クリヴィイ、ツルヴァシユア、ケュシイン、ソ
ーマカ、スリンヂアヤの諸族がその首府をカーンピリアに置いて、立憲君主國を營むことになつた
のである。

この兩國は相對峙すること多年、互に文化を發達させて、友好的な交りを續けて來た。が、此處
に拘樓王族の中で、勢力争ひが始まつたのである。そのかみのプール族とバーラタ族との對立が、
やがてプールの後裔たるカウラヴァの百王子とバーラタの後裔であるバーンドウの五王子との從兄
同志の反目となり、つひにバーンドウとは親戚にあたる般闍羅も干戈をとるに至り、拘樓・般闍羅
の戦ひとなつたのである。兩軍はクルクシェトラの聖地で戦ひの火蓋を切り、拘樓に組するもの憍
薩羅、韋提訶、鶯伽、迦、伽、憍駄羅の諸國、般闍羅を助けるもの摩咀跋耶、摩伽陀、迦尸、枝提

の諸國——全北印に亘つて十八日間の激戦がくりひろげられたのであつた。

この拘樓・般闍羅戦争が印度古典の二大史詩の一であるマハーバーラタ（摩訶婆羅多あるひは大婆羅多譯とも書く）の中心を構成してゐるのである。

マハーバーラタは本詩十八篇、附録ハリヴァンシャを併せて十萬頌を含む大叙事詩であつて、各頌は三十二綴から成り、總行数二十二萬行の浩瀚な大著作である。かのホーマーの「イリアッド」の一萬五千六百九十三行を思へば、まさに世界第一の長篇叙事詩であり、ミルトンの「失樂園」をしのぐこと三十倍の長さに達してゐる。

もとより作者のほども想像されないが、印度人の中には、この作をヴィヤーサの手になるものと信じてゐるものもある。が、ヴィヤーサとは、元來「整頓者」「編輯者」といふことを意味してゐるのであつて、吠陀の文獻にはヴィヤーサは二十八人もゐると言はれてゐる。

その作られた年代も、古傳説によれば、西紀前三千百一年といふことになつてゐるが、最近の學説では、凡そ前四世紀から西暦四世紀ごろまで、と稱せられてゐる。特に附録の部分は内容、思想ともに後期婆羅門教時代のプラナ文學と何ら異なるところがないと見られる。とまれ、マハーバーラタは宗教、哲學、法制、神話、傳説の一大寶庫であり、單に史詩と呼ぶよりも、まさにスミスの言ふ

「道德教旨の百科辭典」として、いま尙印度人の血管の中にたぎり、心の中に泌み入つてゐる印度精神そのものである。いまその片鱗をうかゞふために、できるだけ壓縮した梗概を掲げよう。

その梗概

拘樓王チットラーインガダの歿後、その王子達のうち長兄のダハリタラーストラは盲目であり、末弟のヴィドゥラはその母が奴隷族の出であつたため位を嗣げず、中の王子パインドウが王統を繼承したのであつた。

パインドウ王は治政よろしきを得て、名王の譽たかかつたが、いくばくもなく夭逝した。パインドウ王には五人の王子があり、ダハリタラーストラには百人の王子があつた。さうして、拘樓王國の統治は盲目のダハリタラーストラが見ることになつた。盲目王はパインドウの遺子である甥たちを吾子のやうに育てたが、彼の百王子達はそれを喜ばなかつた。パインドウの五王子はパインラヴ（パインドウの子孫）と呼ばれ、盲目王の百王子はカウラヴァ（拘樓の子孫）と言はれるのをつねとしてゐた。パインラヴの長兄ユディスタラは教學の心深く、宗教心に富んでゐた。次兄ビーマは棒技に秀でて力の強いこと身體の大きいことは並ぶものがなかつた。第三王子のアルジュナは武

道に熟達し天下無敵の技量をもつてゐた。第四のナクラは悍馬を御する名人、末弟のサハチは天文学に精通してゐた。

さて盲目王はバーンラヴの長男ユディスチラをもつて拘樓王國の幼王と定めようとしたが、百王子は長兄ドルヤドハナをはじめとして、さまざまな謀略をもつて、従兄にあたる五王子を壓迫し、父王に迫つてつひに五王子を追放するに至つた。

拘樓の隣國である般闍羅王國では、その後久しからずして姫君ドラウパディのためにスワヤン・ヴァラ（較武）を舉行することになつた。當日は天下の諸王、遠近の武士ら競つて首府カーンピリヤに集ひ、我こそ姫君の背たらんと願つた。しかし、この日の課題はとりわけて困難なものであつた。参集した人々の試みが凡て失敗に終つたとき、一人の婆羅門が起つた。彼は強弓を引いて轉環を貫き竿上に廻つてゐる金魚の眼を射た。かくて姫君の花環は勝者の頭に懸けられた。しかし、群衆は婆羅門が姫の夫たるを喜ばず、般闍羅王ドラウパタの周りに蟻集して、口々に不平を唱へた。

此處に於て、かの婆羅門は假装をぬいで、「我はバーンドウの第三王子アルジュナなり」と身分を明さざるを得なかつた。かくして、アルジュナはドラウパディ姫をつれて、兄弟とともに母の許に歸つた。彼は母に「武技によつて賞品を得た」と告げたので、母はその何たるかを知らずに「賞

品は五人の兄弟で分けよ」と答へた。母後の命に背くことのできない五王子は、やむなく姫を五人の共通の妻としたのであつた。この結婚が機縁となり五王子は般闍羅の親族として同盟を結び、またヤーダワの豪士クリシュナの知己を得て勢大いにあがつた。

盲目王は彼の百王子とバーンドウの五王子との間に拘樓王國を分配しようとして、バーンラヴにはヤムナー河畔の森林地帯を興へた。五王子は森林をひらき、不毛の地を開拓して、首府インドラプラスタ（現今のデリー附近）を創建し、長兄ユディスチラ即位し、よく善政を敷いて王國の繁榮を樂しんでゐた。

一方、ハスチナブラをはじめ主要な諸都市を領土とした百王子の長兄ドルヤドハナはそれをもつて足れりとせず、ひそかにバーンラヴの領地をも狙つてゐた。一日、バーンラヴのユディスチラと賭事を争ひ、ユディスチラは連敗を喫して、財産、王國、軍隊および最後にはその妻さへも失ふに至つた。この時、盲目王は兩者の間に調停に立ち、「五王子を以後十二年間放逐し、第十三年目の最後の一年を全く隠れ忍び得たならば、再びその王國へ復歸させる」ことを約したので、こゝに五王子は再び流浪の身となつた。

かくて五王子とその妻はサラスヴァチ河畔のカームヨカ森林に入り、長い流浪の日を送ること前

後十二年、その後、姿を變へて摩咀敷耶國王ヴィラータに事へ、長兄は王の遊樂の相手となり、次兄のビーマは厨房に入り、アルジュナは王女に歌舞を教へ、ナクラは家畜を司り、共通の妻ドラウパディは王后の小婢となつて、第十三年目を送ることになつた。

折しも百王子はヴィラータ王の家畜を窃み去ること屢々であつたので、アルジュナ終に立つて武裝をととのへ、その家畜を恢復したが、このため五王子は百王子に發見されるに至つた。が、その時こそ先約の第十三年の終りであつた。

五王子はかくて公然とその王國の還付を要求したが、返事はもたらされなかつた。のみならず、百王子側は戦闘準備に寧日ない有様であることを知つて、こゝに天下を二分した悲愴なる十八日間の大戦端が開かれることになつたのである。

勝利はバーンラヴの五王子の上に輝いた……。

註* スワヤン・ヴァラ——古代の印度王族がその姫のために配偶者を定める式で、當日姫は花輪をもつて立ち、武勇すぐれ且つ困難なる課題をよく行つたものに、姫の花輪は與へられる。即ち、武藝會であると共に、「婿選み」の式でもあつた。

* 母系社會であるドラヴィデアンの一婦多夫制が、こゝに表現されてゐるものと考察することもできる。しかりとすれば、拘樓族は既に混血アリヤン乃至はドラヴィデアン族それ自身であつたかも知れない。高楠博士の拘樓族は崑崙族の音譯であつてクル族即スメル族であるといふ説も、この見地からなほ參考となるであらう。

***クリシュナ——五王子の參謀となつて戰場ではアルジュナの御者として活躍する。「不殺生道」によるアルジュナの不戦論をくつがへし、正義の戦ひとして矛をとることこそ王者武將の眞の「道」であると論し、聖戦論を説く。後に「薄伽梵歌」中に「智行」と「作業道」を説いて、印度民族運動の指導原理となる聖雄である。「薄伽梵歌」については後段に説く。

韋提訶のジャナカ王

マハーバーラタの大戦争の後に、拘樓王國には英邁の王バーリクシタが出て、拘樓の領地を一層擴大することに成功した。更にその長子チャナメチャは國王の儀禮の式典を兩三度も行つたといふ英雄で、その頃から單に王と言はず皇帝と呼ばれたほど、彼の人格も國威も北印度地方に鳴り響いた。これが拘樓の最盛期で、その後國內が二分し、しばしば天災を蒙り、饑饉に遭遇するなど、拘

樓の勢力は老木の枯れるやうに凋落して行くのであつた。

もはや拘樓・般闍羅の時代は過ぎ去つたのだ。さうして、こゝに擡頭して來たのが、恒河の二層下流にあつた章提訶であり、迦尸、橋薩羅等の新銳國家群であつた。

これらの新銳國家は、あきらかに第二回の侵入者として知られてゐたヴラーツチャ・アリヤン種族であつた。彼等が正統アリヤンの定住地を迂廻してさらに恒河下流に居住地を覓めたことは、前に述べた通りであつた。即ち、拘樓・般闍羅等の國家としての權威が彼等を壓倒してゐた時代のことである。

曾て彼等を「吠陀アリヤン外の國」と蔑んでゐた諸王國の力は、今や昔日の面影もなく衰退して行き、政治的權威を喪失してゐた。さうして、新興種族である混血アリヤン族がこの好期を握つて一躍、その勢力を伸張した。中でも、その擡頭著しいものがあつたのは、不世出の王ジャンカをいふたゞいた章提訶王國であつた。

章提訶の國域は今のビハールのティルフットに當り、當時の首都はミラチと呼ばれ、その周回三百リーグ（一リーグは三哩）一萬六千の部落を有した大國であつた。

ジャンカ王は特に文化の發達に力をそゝいだ。それは彼自身が既に大なる哲學者であつたからで

もあるが、その首府には諸國の有識者が參集し、宗教、倫理、哲學の振興を計つた。初期の優波尼沙士哲學が生れたのも、實にジャンカ王の大いなる庇護の下であつた。

建物は正しく列びて、美しき都市の各通路には壁門が旋り、市内には馬車や牛車の集る水溜もあり、樹園も美しく繁つてゐる。章提訶の都は、王族と武士の集ひで榮え、彼等は虎の皮衣を着し、旗はひるがへり、兵士は勇ましく、婆羅門は迦尸の衣を着て、梅檀の木を以て祭祀を行ひ、宮殿は寶をもつて飾り、妃姫は華美な衣裳と花冠とで飾る。……

(佛典本生譚)

その王庭には、天下の賢能が集つた。その當時の婆羅門が着る衣を着する迦尸の英王アジャトサトル王も、文學の保護者として知られてゐるが、彼をして「あはれ、一切のものは、ジャンカ王は我らの保護者たれ、と言ひつゝ皆かしこに走り去る」と詠歎せざるを得なかつたほど、章提訶の隆盛はきはまつたのである。

章提訶の隣國（現在のオウダ地方）は橋薩羅王國であつた。その當時の王をダシニアラタと言ひ

その長子ラーマの妃に韋提訶のジャナカ王の女シーター姫をむかへてゐた。かうして、われわれは二大史詩のもう一篇であるラーマーヤナ（羅摩耶那）の舞臺へ差しかゝつたのである。

ラーマーヤナ

橋薩羅王ダシュアラタには三人の寵妃があつた。第一妃カウサリアーは王子ラーマの母であり、第二妃カイケイはバーラタを産み、第三妃スミトラーは、ラクシュマナ及びサトルグナをあげてゐた。これらの王子たちは何れも文武兩道を學んでゐたが、長子ラーマは殊に眞摯敬虔な性格と卓抜した武藝を兼ね具へてゐた。

ラーマは一日韋提訶國王の公主シーター姫のスワヤン・ヴァラに出て、よく佳人を妻とするを得た。橋薩羅の國民はこれを傳へきいて、一日も早く首府アヨドヤに歸り、漸く老いて政に倦んだ父王に代つて若き王子が國政を見ることを望んだ。この時、バーラタの母カイケイは、わが子が攝政太子となることを望んで、曾て老王の約した「一生に一度の願ひはきいてやる」といふ言質をたてに、彼の志を變へんことを迫つた。老境にあつた國王は止むなくバーラタを樹て、ラーマを十四年間の追放の刑に處した。國民はこの決定をみて、悲しみ歎いた。その歎歎流涕する聲アヨドヤの市

中に満ち、老王また幾ばくもなくして、悲しみのうちに歿した。

追放の命をうけたラーマとシーターは、彼等を慕ふ母弟ラクシュマナと三人で、南への旅を續けた。彼等はブラヤガのバーラドヴァジャの仙居を訪れ、次いでチットラクターのヴァルミーキ仙人の許に身を寄せた。その頃、父王を喪つた次弟バーラタは、ラーマの跡を追ひ來り、その次第を物語つてラーマに歸國して王位を繼ぐことを懇請した。しかし、孝心厚く、義を重んずるラーマは、追放の年期を終るまでは歸らぬ、と答へた。バーラタは止むなく、ラーマの歸國まで橋薩羅の國を治めることを約して、兄弟は南北に別れた。

ラーマの一行はその後ダインダカ森林中を漂泊し、やがてゴダヴァリ河に達した。彼等は流れを廻つて水源地近くに小舎を建て、長い年月を耐へ忍ぶことになつた。

時にランカ（セイロン島）の魔王ラーヴァナはシーターの美を傳へきいて、ラーマの留守にその住居を襲ひ、彼女を奪ひ去つた。ラーマは百方これを求めて、遂にラーヴァナの行爲と知り、彼女を奪還すべく策をねつた。即ち、南印度の蠻族バーリ王の弟スグリーヴァと結んで、先づ彼の欲望たる兄王の國土と妃とを得んとする謀を援けてこれを成就し、次ぎにランカ王の囚れの身となつたシーターを救ふべき軍を起さしめた。

蠻軍の猿將ハヌマンは先導となつて六十哩の海峡を躍り越え、シーター姫を發見してラーマの指輪を渡し、ラーヴァナの宮殿に火を放つて歸り、こゝに全軍は海峡にアダムの橋をかけて渡り、都城をとり圍んだ。ランカの軍勢は、ラーマの魔力ある劍と咒文のために、連敗を續けた。かくて戦ひは終段に入り、ラーヴァナの子インドラジットは黒雲に乗つて反攻し來つたが、ラーマの異母弟ラクシュマナのために殺される。この報にラーヴァナ大王自ら出馬して、ラクシュマナを刺した。(しかし、ハヌマンの奇薬により後に蘇生する)

憤起したラーマと背水の陣を敷いたラーヴァナとの天地をゆるがす一騎打によつて、この戦ひは終つた。つひに、ラーマはシーターを救ひ出したのである。シーターは身のけがれなきを證明するために、進んで火中に身を投じるが、火傷一つ帯びることなくその貞操を全うしたことを知らせる。

時に追放の刑期は過ぎた。ラーマ、シーター、ラクシュマナの三名は懐しい故國橋薩羅の首都アヨドヤへ晴れの歸還をした。彼等の隠忍は美しい實を結び、ラーマは王位に上り即位の大典を行ひ、シーターは王后として橋薩羅の國いよいよ榮えんとする有様であつた。

だが、この物語は更に不幸をつけ加へてゐる。曾てない大饑饉がいくばくもなくして橋薩羅を襲つたのである。ラーマ王はこれを祕密に對する天罰であると考へ、心中ひそかにシーターの貞操を

疑ふに至つた。これはやがて國民全體の疑惑となり、國王としてラーマはつひにシーターを追放せざるを得なくなつた。

その時、シーターは既に懐妊の身であつた。しかし國王の命令は重かつた。彼女は曾て不遇なりし時代に夫と共に身をよせたヴァルミーキ仙人の隠栖を訪れた。こゝで、彼女はラヴァとクシャといふ雙生兒を産んだ。ヴァルミーキはラーマの詩を綴つて、その父の功業を兩子に教へた。また十六年の歳月があつた。

この間、國威いよいよ擧つた橋薩羅では、國王ラーマは馬祠祭を營むことになつた。馬はヴァルミーキの隠栖を過ぎやうとして、ラヴァとクシャに捕へられた。かくてラーマは我子との對面を得ることができたが、國民は尙シーターに對する疑ひを解かず、遂にシーターは冤罪のため地に歸するに至つた。

そして、この敘事詩は、作者ヴァルミーキの次のやうな豫言の通りに、いまも尙印度國民の胸底ふかく藏し、シーターの貞操とラーマの武勇を、ありし日のやうに思ひ起させるのである。

ヴァルミーキは言ふ。

「山山の峰のあらんかぎり

川川の地上に流れんかぎり
その如く亦へに このラーマヤナは
人々の口の葉に生きぞ残らん
と。

註* シーター——畦といふ意で、姫が地より出でて地に歸るといふのも、農耕に對する古代の關心を物語るものに外ならない。

** ヴアルミーキ——「ラーマヤナ」の作者と傳へられてゐるが、その傳は不明である。詩篇の成つた年代は「マハーバーラタ」より古く、頭尾の二篇を除けば、同一人の手になつたことは確からしく思はれる。全七篇、約二萬四千頌から成つてゐる。

*** 猿將ハヌマン——當時南印度にゐたドラヴィダイアンその他の先住民を「ラーマヤナ」の中では猿猴、熊熊或ひは妖怪として記載してゐる。

**** 馬祠祭——國家の安泰を祝福するために馬を犠牲に供する式である。まづ、多くの婆羅門會によつて一頭の軍馬を選び、この馬を式場から東北に向つて放つ。馬の進むに従つて百人の乗馬の兵士が之を安護し、更に數萬の兵がこれを援護して、先頭の馬の赴くまゝに一ヶ年間

を彷徨させる。軍馬の通過する國々は、祭祀國の主權を認めてその從屬國になるか、或ひは數萬の護衛軍と一戦を交へるか、何れか一方を選ばねばならない。この間、祭祀國王は、宮廷に僧侶を集めて軍馬の安泰を祈り、やがて一ヶ年をすぐること三日間にわたつてソーマ祭を行ひ、歸國した晴れの軍馬は護衛軍と從屬國軍とを従へて王城に歸り、更に豐滿盛大な舉式の後に、他の幾多の軍馬とともに擧殺せられ神に捧げられるのである。

四 姓——カスト

印度今日の問題である四つの階級——カスト——が制定されたのは、アリヤン種族が恒河流域へ定着した史詩時代であり、その確立が定められたのが哲學時代であつた。

四姓といふことは、もとより古代印度の、それも吠陀アリアンが五河地方へ侵入したころには、あり得る筈もなかつた。一見よ、我は作歌者なり、わが父は醫師なり、わが母は石臼をもつて穀を磨す。われらは各々異なる職業に従事す」と梨俱吠陀の讀頌にあるやうに、婆羅門は「作歌者」の意であり、刹帝利は單に「強い」といふ形容詞にすぎなかつた。

しかし、四姓の萌芽は、これを同じく梨俱吠陀の「原人歌」に見出すことはできる。

彼等（諸神）がブルシヤを分割せし時、いかにこれを切りしか。ブルシヤの口、腕、股、脚は如何なりしや。

婆羅門は彼の口なりき。その雙臂は刹帝利なりき。吠舍は彼の兩股にして。首陀羅はその足より生れたり。

（梨俱吠陀・第十卷）

これを以てして直ちに吠陀時代に四姓が存在したと思ふのは餘りにも早急な判断と言はなければならぬ。何故ならば、吠陀時代にはいまだ職業の世襲もなく、戦士と耕作者の別もあきらかではなかつたから……。その頃の社會に存在した区分は、勝者と敗者であり、アリアン人と非アリアン人であつた。従つて彼等との關係はヴァルナ（色）によつて決定されてゐた。白哲端麗なアリアン人種と黒褐怪異な先住民との二つの階級が存在したに過ぎなかつた。

註* 婆羅門、刹帝利、吠舍、首陀羅——の四姓を呼ぶに、今日ではカストの語をもつてするが、

これは十五世紀末のヴァスコ・ダ・ガマの將來したポルトガル語であつて、種姓を示す語彙としては、むしろヴァルナといふ古語がより正確なものと言へるであらう。

宗教心の強かつた古代アリアン種族の中から、祭祀を司る専任の僧侶階級が生じた。集團生活によつて部落の長が選ばれ、やがて王侯となり士族となつた。恒河の流れを降つて來た時代は凡そこのやうな頃であつた。しかも、祭祀はますます精密頌頌をきはめ、王國はその廣大なる領土を治め、やがて祭祀萬能、王權專制をもたらしに至つた。

いまや婆羅門至上を叫ぶ僧と、武と治とをもつてする王士と、この二つの階級の生活は、あまりにも一般人民のそれと懸隔を有するものがあつた。この對差を合理化するために、一般人民の種姓として更に一階級を加へて、所謂「吠舍」が成立することになつたのである。

この外に、先住民の捕虜を使役してゐたものを「首陀羅」と呼んでゐたことは、四姓分立のはるか以前のことであつた。なほ首陀羅とは「奴隸」ではなく「奴隸視された民族」の義と見るべきである。

かくして、アリアン、非アリアンの二つの区分は、アリアン種族間の三つの分立によつて、爾後

三千年に垂んとする今日まで、四姓として固く守りつゞけられて来たのであつた。そして、首陀羅と他の三種姓の間には峻烈な差違——越ゆべからざる一線を劃してゐた。即ち

婆羅門は吠陀の學習及び教授、己れ及び他人のために祭祀を行ひ、施しを受く

刹帝利は吠陀の學習、人民の保護、布施

吠舍は吠陀の學習、布施

首陀羅は怨恨なく上三族へ仕ふ

と、規定されてゐた。更に、マヌの法典によれば「婆羅門、刹帝利、吠舍の三種姓は再生族にして、第四の首陀羅は一生族なり、而して第五の種姓あることなし」といふ規定を設けて、首陀羅の吠陀を學習することを妨げ、若しこれを犯すときには

若し首陀羅が吠陀の誦唱を傾聴するときはその耳に溶けた鉛をつめ、若し首陀羅が吠陀を唱へたときはその舌を切り、若し首陀羅が吠陀を記憶するときはその身を二つに裂くべきである。

(ガウタマの法典)

といつた残忍な刑罰が行はれることになつてゐた。加ふるに、この四姓を守るために、結婚は往時のやうに自由には行はれなかつた。常に同一種姓の中で婚姻が行はれたことについては、既にマハーバーラタの中で、婆羅門に身をやつしたアルジュナが姫の花輪を得たときに名乗りをあげる一條を想起されるか、或は印度古典劇中の寶玉篇ともいふべき「シャクンタラー姫」の次のやうな一節によつて、よく知ることができらうであらう。

ツシャンク王 あゝ、姫が婆羅門ならぬ母の胎から生れたのであるならば……。えい、そのやうなことは氣遣ひせずとも姫は武士の妻となる わがこの心さとりなば げにや迷ひの道しるべ 正しき人には胸のこゑ、何に致せ も少し詳しくしらべて見よう。 (中略)

王 いや、よく解り申した。それでは天女の生んだお子ぢやのう。

アナスーヤー(姫の友達) 左様にござります。

シャクンタラー姫(羞げに俯向いてゐる)……

王(獨白) これならだいぶ見込はある。しかし先刻の朋輩のされごとには、婿選びをしてゐると聞いたゆゑ、氣にかゝるて……

この四姓は一は婆羅門至上主義となり祭祀萬能主義をもたらし、二は漸く勢威をとなへた刹帝利の王族専制統治となり、兩者の間に、反撥と摩擦とを生ぜざるを得なかつた。前者は獨善的なブラーマナとして記録に残り、後者の力は印度哲學の寶庫たるウベニシャツトに於て徐々に發揮されて行くのであるが、われわれはその前に印度古典の源として四つの吠陀集録について若干の知識を必要とするやうである。

吠陀集録

印度文化の黎明期を物語つてゐる吠陀集録は、その代表的なものとして梨俱吠陀を時に引用して來たが、なほこの外に沙磨吠陀、夜柔吠陀及び阿闍婆吠陀を數へることができる。梨俱吠陀はアリヤン種族の侵入當初から五河定住時代に於ける讚歌や神話を集録したものであるが、その作品そのものから言へば、必ずしも歴史と共に進行したものとは思へない。古いものもあるが、明かに恒河時代に補はれたものも散見されるので、全十卷その收載する讚歌千二十八頌——といふ今日の形を

とつたのは、この時代であつた。

他の二つの吠陀、とくに夜柔吠陀には、その内容にも屢々「恒河」地方の地理が現はれるのを以つてしても、當然史詩・哲學時代の製作であると考へられる。

吠陀に現はれたる社會は初期のものではあるが、決して原始的なものではない。聖歌そのものは技巧に富み、かつ文學的構成をなし、當時の學者によつて調整されたものである。その言語、韻律、様式すべて皆非凡の學識を示してゐる。

（スミス「牛津印度史」）

梨俱吠陀は讚歌をその内容とし、沙磨吠陀は歌詠を、夜柔吠陀は祭詞を主題として編纂せられたものであるが、思想的にいへば前者はまつたく梨俱吠陀と同じく、後者には拘樓・般闍羅文化の影響が見られる。

しかし、大體に於てその内容を相等しくする吠陀が、三種類も作られたといふのは、どうしてであらうか——われわれはこゝに祭式萬能主義と僧權の確立したことを知るのである。

その昔は梨俱吠陀のみで、謂つてみれば、素朴に神を念じてゐたのであつたが、婆羅門の勢力が強化されると共に、祭官の職掌もその任務によつて自ら分けらるに至り、それぞれの祭官が己に屬する吠陀を必要とするところから、現存の三つの吠陀が區別されるやうになつた。

諸々の神を祭場に勧請し、讚誦を司る勸請官に屬する梨俱吠陀、ソーマ祭に際して、一定の旋律に合せて歌詠を行ふ歌詠官のための沙磨吠陀・祭式の執行にあつて供器を準備し、火水を取り、供犠をそなへる等、實務にあたりながら低聲で祭詞を唱へる祭供官に對する夜柔吠陀——がこれである。そして、吠陀こそ神の啓示であり、天啓であるとして、吠陀すなはち「知識」と名づけ、吠陀を高めることによつて、自らも高しとする吠陀天啓主義、婆羅門至上主義が行はれるに至つた。

以上三つの吠陀の外に、これは更に後期に作られたものであるが、阿闍婆吠陀を加へて、普通四吠陀と呼ぶのである。

阿闍婆吠陀は祭式全般の監督にあたる祈禱官に屬するものと定められてゐるが、この書の本質は惡鬼調伏の呪法であり、長命財福の祈願にあつた。

この吠陀は印度に於ける科學史の上にも特筆大書すべきもので、當時疾病を豫防し又は癒す

ために用ひた呪法は、後世の醫術の萌芽を包含した木のやうなもので、その木の魔術的な利益によつて、疾病を避けもし、治ししたのである。

(ラブソン。「古代印度」)

阿闍婆吠陀の重要性は、それが後代になつたものであるに拘はらず、よく古代の風俗習慣等をも採り入れてあることと、特にアリアン人の聖典である前三者に反して、この吠陀にはドラヴィデアンその他の先住民の宗教も多く混淆されてゐることである。その中に蛇、性器、魔法、呪術の崇拜があり、やがてこれらが綜合されてヒンヅー教を生む端緒ともなるのである。

かういふ上代の文學が、その幽遠の昔から今日に至るまで、殆んど異つた解釋が成立しないほど正確に傳つてゐるといふのは、たしかに驚くべきことである。それは、吠陀を文字の上に表はすことが出来るやうになるまでの間、その長い期間を古代の印度人は正しい口授によつて貴重な(彼等には神聖な)古典を傳承して來たのである。否、それどころか、今日に於ても、彼等のある者は吠陀をそらんにてゐるのである。

吠陀を學ぶことが神を知る唯一無二の道であつた古代には、口頭傳授の形式が、人生に於けるも

つとも嚴肅なことであつたのだ。彼等はその子にその弟子に、正しく吠陀を傳へることにその生涯を費したのだ。そこには何等の附け加へもなかつた。神聖な原文は忠實に傳承され、維持されてゐた。それは世界の歴史上に曾てない意志の長い繼續であつた。そして、世界文化の上で、曾てない人類の記憶の長さでもあつた。

婆羅門書

吠陀文學と總稱された中に、四つの吠陀集録の占める位置はサヒンターと言つてそれぞれ讚歌、歌詠、祭詞及び呪詞を主題としてゐるが、この外に上記の讚歌なり祭詞なりの用法を定め、その意義を説くブラーマナ（婆羅門書、梵書、祭事釋などと和譯してゐる）といふ尤大な一體系がある。ブラーマナはそれははじめは夜柔吠陀の附屬として作られたものであつたが、この新しい聖典が祭式萬能を謳歌してゐたため、婆羅門至上の聲に應じて、勢ひの赴くところ、つひに何れの吠陀にも附加され、やがてサヒンターとブラーマナとはそれぞれ獨立したものとされるに至つた。従つて本來のものであつた夜柔吠陀にはブラーマナを含んだ黑夜柔吠陀と、ブラーマナを附さぬ白夜柔吠陀との二つの異本が生じた譯であつた。

ブラーマナにはまた通常その終りにアーラニヤカ（森林の卷）といふ一章を設けて、さらに高尚幽玄な思想を展開する試みが行はれてゐた。アーラニヤカは名の通り餘人を遠ざけ森林の中で傳授されるべき秘義を収載し、その思想には哲學的思考の一段の進歩を示すものがあつた。

印度哲學の最初の烽火をあげ、歲月を闊みすことゝに三千年、いまなほ光芒を放つ珠玉篇——ウパニシャットが成つたのは、その當初はさらにこのアーラニヤカの末尾に附された數章であつたやうに思はれる。しかしウパニシャットの哲學的思辯は進展してその留るところを知らぬ状態となり、まつたく獨立した一大體系となりおぼせたのであつた。

従つて、吠陀文學といふのは、吠陀集録と婆羅門書と森林の卷及び奧義書から成つてゐるのである。しかし、現在その中で重要視されてゐるのは、吠陀のサヒンターの部分とウパニシャットであつて、アーラニヤカは多く散佚し、ブラーマナは神名の由來、祭祀のいはれ、天地開闢の次第などを神話に托しあるひは一流の論法を以て獨善的な史譚に結びつけて、徒らに吠陀アーヤン思想の裝飾を企圖する點が、自らその評價を引き下げてゐるものと見られる。

恒河地方に定住したアーヤン種族は、その王國の間の興亡はあつても、外敵や先住民達との生存を賭した争ひの世界からは、遠く離れた平和な生活に入ることができたのである。さうして、四姓

の確立とともに、婆羅門は第一位にして至上の階級とされ、王侯士族庶民の上に立つて、權勢を握りにした。彼等は吠陀は絶対にして天啓なりと叫び、萬能を唱へ、教學を一手に收めて古代精神史を獨占し、祭祀を煩瑣ならしめて、貴貧を問はず布施を要求した。即ち、神は祭式に依存し、祭式だけが神意を左右するといふ、神と人との位置を顛倒する現象を呈した。神意とは即ち祭官の意志に外ならぬといつた觀念は、婆羅門に對する尊敬と恐怖とを惹き、人々は彼の怒りや呪ひをうけないやうに、自らを卑下し、兩者の懸隔は一層はなはだしくなつて行つた。

かくて婆羅門の祭式萬能は甚だしい瑣末主義に陥入らざるを得なかつた。例へば、三吠陀の精要として三祕音「唵(aum)」を作つたり、また供犠に關する變遷も、吠陀時代には乳、穀物、神酒を捧げたに過ぎなかつたが、後には次第に家畜、財寶、衣服、食物にまで及ぶやうになつた。ブラーmanaはこの變遷に對してこれを合理化するを得ず、頗る非論理的な筆調を用ひてゐる。

初に神々は犠牲として人を取りき。されども供犠に適する部分は、人を去りて馬に入りしかば、次いで馬は供へられたり。供犠に適する部分は、その後馬を去りて牛に入り、後また牛を去りて羊に入り、次いで山羊に入り、長くこゝに止まりて、山羊はこの上なく供犠に適するこ

ととなれり。

(シヤクバタ・ブラーmana)

かういふ考へ方は、また日常の儀式にも嚴重な規定を設けざるを得なかつた。例せば満月及び新月の第一日に行ふ式事、祖先祭、聖火供養、四ヶ月祭、神酒獻納式など枚擧に暇がないほどであるが、これは後に「マヌの法典」となつて、一層煩雜な規定を明文化することとなるのである。

ブラーmanaの神話の中に、大洪水のことが記載されてゐるのは興味がある。人類の祖先であつたマヌは飼つてゐた魚の豫言によつて近く世界を掃蕩する大洪水のあることを知り、船を用意して、その難をのがれた。彼は水の退くのを待つて、祭祀を行ひ、その力によつて萬物を創造した——と説いてゐるが、ノアの方舟と殆んど細かなところまで一致してゐるのも一奇とすべきであらう。

何れにせよ婆羅門の專横と僧權の擴大が生んだブラーmanaに對して、漸く勢威を増した刹帝利である諸王侯が甘んじてゐる譯もなかつた。さうして、印度精神史上劃期的なウパニシャット哲學が恒河の流域に沿ふて東へ南へと移動する王國につれて、澎湃として起るに至つたのであつた。

ブラーマナによつて極端にまで推し進められた祭式の實際的な遂行と、それに對する正しい知識とは、おのづから相離れて來た。さうして、正しい知識を求める意志が人の心の中に芽ばえたことも自然であつた。

特に刹帝利である王族中の俊英たちにとつて、婆羅門の説くところのものは冠履顛倒の徒勞事としか考へられなかつた。さらに、婆羅門中心の文化は拘樓王國に集約されてゐたかの感があつたが、それはやがて來た拘樓王國の凋落と共に、折から恒河河口にかけて勃興した新興國家の宮廷に移されることになつた。即ち、文化の中心の移行が、同じやうに婆羅門の移動を示し、新興國家群の王侯が眞面目に思想問題に參與し始めたのである。しかし、自由な思想を憚しむ混血アリヤンの刹帝利たちにとつて、便利主義的な論理に終始する婆羅門文化の衰弱と頽廢を見破ることは容易な業であつた。

かくて、王侯たちは各々の心に任意な思索行爲を營むことになつた。しかもそれは健全な思想であつた。曰く、靈魂の運命、宇宙精神の本性、輪廻と解脱の問題、とりわけはブラーマナ末期

現はれた「梵と我」との解釋などが、その主重な命題としてとり上げられた。「梵とは何ぞや」「我とは何ぞや」これらの宿題を解くことが、彼等に新しい生活信條と新しい思想とを與へるものであつた。

註* 梨俱吠陀では「祈禱」の意に用ひられたブラーマナは、やがて祭官の名(祈禱僧)となり、四姓の最上級婆羅門となり、ブラーマナ時代に至つて祈禱を抽象化した梵(中性非人格)として轉用され梵こそ最高原理であるとしたのである。

** アートマンは梨俱吠陀では「氣息」他人に對する「自分」等の義であつたが、それが「身體」「團體」と發展し、ついで人の「本性」となり「自我」となり延いては物一般の「實體」をも指すに至つた。しかしブラーマナによれば、實體の意を表はすには「ブラーナ」があつた。「人間に十のブラーナあり、アートマンは第十一にして、これにそれ等ブラーナは依止せり」(シヤタバタ・ブラーマナ)とある。

これら探求の心に富んだ王侯の中でも、迦尸のアジャタサトル王、拘樓のニチアクシュウ王、韋

提婆のジャナカ王等の宮廷には、天下の名知識を集め、才幹の人は堂に充ちて、つねに活潑な論議が行はれた。これらの論議が發展して、ウパニシャット（優波尼沙土あるひは優波尼沙曇と書き、奥義書と和譯する）哲學の一齊開花となつたのである。

ウパニシャットは「侍座」を意味する。それよりして、侍座の際に傳授される「祕密の奥義」を指し、さらにヴェダンダ（吠陀の終り、或は吠陀の極意）と呼ばれるのは、吠陀集録、婆羅門書、森林の卷、奥義書と綜合された吠陀文學の最後の部分を成してゐると考へられたからである。

ウパニシャットは言ふまでもなく、必ず吠陀に附屬してゐる。いまそのうちごく重要なものを、大體想像される年代順によつて擧げてみよう。

白夜柔吠陀のブリハターランヤカ、沙磨吠陀のチャインドーグヤ、梨俱吠陀のカウシータキ及びアイトレーヤ、黑夜柔吠陀のタイティリーヤ奥義書等を古ウパニシャットと呼び、その後には作られたものは凡てこれを阿闍婆吠陀の所屬として、例へばムンダカ、マイトラヤーニヤ奥義書等を新ウパニシャットと言ひならはすことになつてゐる。

ウパニシャットは散文のものもあり、韻文のものもある、また兩者を混合したものもあるが、その形式は一樣に對話、問答あるひは辯論であつて、問ふ者答へる者の關係も、多くは師弟、父子、夫

婦の間で行はれるのである。

例外もあるが、代表的な語り出しは次のやうな文體をとつてゐる。

ブリハッドラタと名づけられたる王ありき。その子に王位を譲りて、身の無常なるを觀じつ
つ、世欲を離れて森林に退隱しぬ。かくして彼はその森林にありて、最高の苦行を行ひ、太陽
を凝視し、兩腕を高くあげて立てり。かくすること千日の終りに當りて、自我を悟れるシャ
カニヤ仙あり、王の側に來れり。彼はその光明に依て恰も煙なき火の燃ゆるが如くなりき。即
ち王に向つて曰く「立てよ、立て、而して汝の欲する贈物を選べ」こゝに於てか王は仙に頂禮
して曰く「我はいまだ我を知らず、されど汝は眞理の通達者なりと聞く。願はくばそをわれに
語れ」……

（マイトラヤーナ奥義書）

ウパニシャット哲學の中心をなすものは「梵我一如」の思潮であるが、それこそ印度哲學の誇る
解脱と輪廻の思想から出發したものであると言へる。絶望と不満とに苦しむ小さな自己を超越して

最高の自我に生きようとするのがウパニシャットの実践的な目標であつた。さうとすれば、この哲學は存在に關する探求ではなくて當爲のそれであると言はなければならぬ。かくて、ブラーマナに萌芽を見出した宇宙の大原理としての梵を、その最高我と同視することによつて、

我は梵なり (Aham Brahma asmi)

汝はそれなり (Tat tvam asi)

といふ見事な形而上學的な結論に要約されたのであつた。

この間の經緯を物語るウパニシャットは、たゞに思想の高尚悠遠の點のみでなく、その比喩の卓拔と修辭の鍊磨とは、一讀清新の文學苑に遊ぶの心地をいだかせる。哲學書といへば難解な字句が肩をそびやかせるものと思ふ人は、「蜘蛛がその糸を牽きて出で行くごとく」あるひは「火より火花の太陽より光りの發散するごとく」一切は「我により出ること」を知り、「芥子粒よりも、黍粒よりも或ひは黍粒の核よりも一層微なるもの」が心臓の内部に存する「我」であることを教へられ、「恰も鷹もしくは鷲が、かの虚空に於て飛翔し、疲れし双翼を收め、棲息するがごとく」に熟眠位をとる時が彼の最高の世界であること等を味つた場合に、どんな驚きを感じるであらうか！われわれは、紙面の許すかぎり、もう少しばかりの引用を厭はないで、印度精神の本源であるウ

パニシャットを通觀して見ようと思ふ。何故ならばウパニシャットの思想はその創造された時代の古さにも拘らず、いまもなほ印度人の現代思潮として躍動してゐるからである。

韋提訶王^{ヱイデハ}ジャナカとヤージュニャヴァルカヤ仙との對話

仙「人ありて王に告げしところのものあらば、願はくばわれらをして聞かしめよ」

王「シリナの裔ジトワンはわれに告げて、語即梵なり、と言へり」

仙「母あるもの、父あるもの、師あるもの言はん如くに、今シナリ子はそを王に告げたり。故に語は即梵なりと言へり。何となれば、若し語る能はざるものには、何の得るところかあらんと思ひしならむ。さあれ、彼は王に對して、その語の所住と所依とを告ぐるところありしや」

王「否、そはわれに告ぐるところなかりき」

仙「大王よ、そは實に一足にて立てるものなり」

王「ヤージュニャヴァルカヤ仙よ、卿はその人なり、願はくばわれに教へよ」

仙「舌はその住處なり、空はその依止なり。これ即ち慧なるが故に宜しくこれを崇拜すべし」

仙「大王よ、語そのもの即ちこれなり。實に人の友たることは語に由つてのみ覺知し得べし。また讚歌（梨俱吠陀）も祭詞（夜柔吠陀）も……また神に供へられしものも、火に獻げられしものも、食はるるものも、飲まるるものも、此世も彼の世も、一切有類は、大王よ、ことごとく語に由つてのみ覺知せらるるものなり。大王よ、語は實に最高の梵なり。かゝる知識をもつてその梵を崇拜する者を、語は放棄せざるべし。一切有類はかゝる人に集ひ來るべし。彼は神格となりて必ず諸神に參すべし」

（プリハダーランヤカ奥義書）

王侯がしばしば婆羅門の論理を破り、これに教へをたれたといふ史話はブラーマナの中に見られる。上記のジャナカ王が三名の僧に對して、聖火供養の意義を問ふたところ、三僧の答はともに不十分であつたので、王は不満のまま車に乗られた。その時一僧（ヤージュニャヴァルクヤ仙と傳ふ）は車を追つて、王にその説明を求めた。（ジャタパタ・ブラーマナ）といふ一節は、あきらかに刹帝利の婆羅門に對する思想的優位を物語つてゐる。

迦尸のアジャタサトル王とガールグヤ仙との對話

ガールグヤ「かの太陽の中にある人を予は梵として尊崇す」
アジャタサトル王「否、否、これに關して論議する勿れ、われはげに彼を至高なるもの、一切有類の上首、王者として尊崇すればなり。何人にも、若しかくの如く尊崇するものは、至高なるもの、一切有類の上首、王者となる」

（プリハダーランヤカ奥義書）

續いてガールグヤは、月中に在る人、電光に在る人、虚空に在る人、風に於ける人、火に於ける人、水に於ける人、鏡に於ける人、歩み行く者の後より生ずる音響、方處に於ける人、影所成の人、身體に於ける人、などをあげて、それぞれ梵として尊崇すると主張した。これに對して、王はその一つ一つの意義を質し、何れも梵として尊崇すべきに非ず、と論駁した。遂にガールグヤ仙は沈黙せざるを得なかつたのである。

印度哲學の中でも、特に大きな問題として輪廻論がある。一般に生物が單に一世のみで滅するものではない。その肉體の滅後は、それぞれの業に従つて、再び次の世に種の形をとつて生れかはつて來る。かくして、過去より現在へ再生したものは、さらに現在から未來へ、とこしなへに再生を

續けて行く——これが、ごく大雑把な輪廻思想であるが、ウパニシャットには、次のやうな有名な一節がある。

蝶がこの葉を去りて、他の葉に到り、而してその葉を引きよする如く、我も亦この身を去り、無明を離れてのち他の身に近づきて、これを已れに引きよするなり。

また鐵工が金の一片を取りて、これを他の新なる美しき形に造り換ふることく、我も亦この身を去り、無明を離れてのち、祖先、ガンドハルヴァ、諸天または造物主或ひは梵天等のことき新なる美しき形をなす。

(プリハダーランヤカ奥義書)

後に佛陀によつて著しくその振幅を増したかに思はれる解脱の思想も亦ウパニシャットに見出すことができる。解脱は他に求むるべきでなく、自らの中にそれを求むべきであるとすれば、解脱とは所詮本性に安住することに外ならぬ。即ち、吠陀を誦し、施物を捧げることなどは無用ではないにしても、決して解脱の眞道ではない。自覺こそ解脱の因であり、無自覺にして個に執し、欲情に

囚はれることが輪廻の因であるとすれば、輪廻を脱して本性に安住するためには明知を養ふことが肝要である。明知は經驗智でなくて、それはまさしく直觀知であらねばならぬ。故にそのための修行として瑜伽や禪定が行はれた。かくして「我は梵なり」の大自覺となり、梵我一如は、眞我の偉大さを物語つてゐる。

ヤージニニャヴァルクヤ仙はその妻マイトレयीに教へて言ふ。

「恰も鹽の一塊が水中に投ぜられし時、それは溶解し再びこれを取りあぐる能はざるも、何處よりとるも鹹味あるごとく、この偉大なるもの(アートマン——我)は無終にして無邊なり、唯所衆のみ……」

(プリハダーランヤカ奥義書)

同じやうに鹽を比喻に用ひたものとして、ウッダラーカの有による創造説がある。彼は有の動機を吠陀以來の「多とならむ、繁殖せむ」の欲望に歸し、「世界は初め有のみなりき、唯一にして第一二のもの無かりき」として、初めを非有とし、その非有より有を生じたり——といふ説を破つてゐる。

ウッドローカは我子、シュヴェーターケートウに「愛兒よ」と呼びかけながら、有による宇宙創造觀を語るのである。

この鹽を水中に入れ然る後明朝の許に来るべし、と。彼はその如くせり。(父は)言へり、昨夜汝が水中に入れし鹽、そを愛兒よ持ち來れ、と。彼はげにそを索むれども見出さざりき。何となれば、そは全く解消したればなり。愛兒よ、その水の表面より吸れ、如何に、と。鹹し、と。中間より吸れ、と。……底部より吸れ、と。……そは常に存せり、げに愛兒よ、汝は有を認めざれども、そはまさに此處に存す、と。かの微細なるもの……汝はそれなり (Tatvam asi)

(チャインドーグヤ奥義書)

われわれはもはやこれ以上ウパニシャットの世界に留る餘裕を持たぬことは遺憾であるが、先づ跣足の管見を濟ませたものとして、西歐哲學者の中で、印度哲學を最初に知り、しかもそれを多分にとり入れたショーベンハウエルの絶讃を掲げて、この章を終らうと思ふ。

ショーベンハウエルは、梵語によるウパニシャットの翻譯を讀むことはできなかつた。その頃波斯語に譯されたウブネカットの謂はゞ重譯である波斯羅句語の翻譯がやつと完成(一八〇一年)されただけであつた。西洋が印度哲學の驚くべき思考を知つたのは、この不完全なウブネカットの翻譯によつてであつた。ショーベンハウエルも勿論さうであつた。しかし彼は一讀、よく印度哲學の根本に徹底し、これを己れの哲學中に攝取する天分を示した。彼はいくたびか印度旅行を企てたが遂に成らずして逝つた。彼の死の床には、愛讀したウブネカットの一冊が、彼の遺骸によりそふやうに置かれてあつたと言ふ。

ウブネカットは、如何によく吠陀の神聖なる精神を呼吸せることよ！ 熟讀によつてこの比類なき典籍の波斯羅句語に親しみたるものは、内心に於て如何にその精神に感動せしめらるゝことよ。行文の間、如何に確定的、決定的かつ徹底的に調和せる意義に充ち満ちたることよ！ 高尚、神聖なる眞面目さは全篇に漲り深遠、獨創、崇高なる思想は各方面より吾人に殺到す。この中に於ける一切は印度の空氣を吐き、原始、自然の存在を息す。嗚呼、こゝに於て、如何に精神が、早くより扶植されし猶太の迷信及びこれに阿諛する一切の哲學より清めらるゝこと

よ！ 原本を開けば、それが研究こそ最も報酬多きものにして、また最も吾人を啓發するものなれ。こは予が生の慰藉なりき。而してまた予が死の慰藉たらん。

(シヨールベンハウエル「パレルガ」)

第四章 釋

迦

(前七百年—四百年)

十六王國

中國印度のはなやかな文化圖をくりひろげた韋提訶の王庭にも、やがて衰へを見せる日が訪れてゐた。わづか一世紀に滿たぬ時の経過は、徒らに英王ジャナカの名を留めただけで、韋提訶國は迦尸の一族であつた離車族のために跋耆聯邦の一國としての位置を興へられたに過ぎなかつた。佛敎聖典のいふ十六王國の中には、もはや韋提訶の光輝ある國名は見えず、それにかはる新興勢力であつた跋耆聯邦がつかの間の榮華の夢を結んでゐた。

恒河の流域を流れに遡りながら、十六王國の名をあけてみよう。即ち、鶉伽、摩伽陀、迦尸、拘薩羅、跋耆、末羅、拔提、跋蹉、拘樓、般闍羅、末地耶、戊囉西那、阿設迦、阿槃帝、健駄羅(夜嚕那とも言つた)甘謨惹がこれである。恒河といふ一筋の流れを中心にして、中部から北部へかけて群雄割據の圖が、この十六王國時代であつた。その領土は互に隣國と相接し、つねに紛争と戦亂

が絶えなかつた。とりわけて勢力のあつたのは迦尸カシであつた。その首都バーラナーシ城（現在のベナレス市）は周圍十二リーグの都市で、あたかも全印度を號令するかのやうに恒河河畔に築えた。もとより財力といひ、兵力といひ兼ね具へた迦尸國王が、その頃の「一切王中の王」と呼ばれたのは、その最盛時代のことであつた。迦尸はその隣國である憍薩羅との間にしばしば戦端を開いた。佛教本生譚によれば、迦尸の國王が憍薩羅王を捕虜とし、その國を奪ひその妃を掠めて己が后とした——と傳へられ、又南印の阿設迦アサツカの如きもその勢力下にあつたと誌されてゐる。しかも、迦尸はつひに憍薩羅の軍門に降らざるを得なかつた。會て國土をかすめた憍薩羅は、いつの間にか、そのかみのやうな弱小國ではなかつた。

迦尸が憍薩羅に征服されたやうに、十六の王國が、そのまゝ併存することは不可能であつた。しばらく後に、われわれの前に現れるのは、憍薩羅、跋蹉バクサ、阿槃帝アパンテイおよび摩伽陀マカタの四大王國と跋耆バクシ聯邦との時代となるのである。即ち、西曆前六世紀には、十六王國の解體と新たな編成が行はれてゐた。分裂から統一へ——印度の文化と歴史を決定づける動きが、ひそやかに近づいて來た。

沙門——六師外道

婆羅門文化がウパニシャツト哲學を一つの契機として、婆羅門自身の優越性を失ひはじめてゐたことは、ジャナカ王のやうな刹帝利シヤトリの思想家が現れたことによつても明かであつた。婆羅門と刹帝利の思想的な對立は徐々にではあつたが、新しい文化の芽を育てゝゐた。

吠陀ヴェダアリヤンの思想家を婆羅門と稱したに對して、こゝに非吠陀アリヤンの思想家が起り、これを沙門と呼んだのである。沙門は多く刹帝利から出たが、なほ一般庶民からも沙門となつたものもあつた。婆羅門の傳統的な教條規定による束縛もなく、自由に考へ、自由に生きた沙門たちを一鎖を斷つた者」とか「裸の者」とか呼び、さういふ名をいたゞく沙門教團さへ現はれるに至つた。

その頃の人々は、ことに青年たちは、武士となつて一國の統治を夢みるか、沙門となつて出家し、「考へる人」としての生涯を思ふか、若人の心はこの二つの道に全生涯の生き甲斐を培けてゐた。たゞその生れた血統の故のみをもつて、高貴とされ尊ばれた婆羅門階級に對する、他の三姓の反撥する力は、こゝに思想運動としての沙門の道を選ばしめたのである。さうして、考へることの自由さが、また一つの美しい魅力でもあつた。さういふ沙門團の中で、特に六つの思想團體が當時の思潮を反映してゐた。六師外道と呼ぶのがこれである。外道とは佛教からみて「外道」であるだけで、謂はゞ六沙門といつた意味に過ぎない。

善といひ悪といふも絶對的なものではない、凡てのことは偶然の成立であつて、その中に因果といふやうなことはないと説くプーラナ・カサッパ（富蘭那迦葉）。

一切は自然の必然の力より流れ出るもので、人爲のいかんとも爲し得ざるところである、従つて人の生活もたゞ自然に任せて置くべきであると主張するマツカリ・ゴーサーラ（末伽梨拘舍羅）。

人は地・水・火・風の合成されたもので、生命なるものも畢竟は右の四大が適當に和合したものに過ぎぬ、といふ唯物思想から、身體即靈魂であり、人はたゞ一個の肉體のみであるから、生きてゐる間に快樂を縱まにするのが人生の本分であるとする快樂論のアジタ・ケーサカンバリー（阿夷多翅舍欽婆羅）。

萬有ものみなの存在を地・水・火・風・苦・樂・靈魂の七要素の成立組成に求め、七要素はそれぞれ獨立の常住體たるが故に、人死するも生命は不生不滅であると説く、バクダ・カッチャヤーナ（浮陀迦旃延）。

眞理なるものに一定不變の常現なく、その時在りと考ふるものは有りと答へ、後刻これなしと思はゞ無しと答ふるが眞理であるとして、例へば、「沙門の果報は、有とも、無とも、又は有無とも、非有非無ともいふを得べし」といふやうな、故意に意味のとり憎い詭辯を弄するサンジヤヤ・ペラー

ティブツタ（散惹耶毘羅梨子）。

一切は先業の所作で、この先業の力を脱するには刻苦自製の苦行（斷食と裸行を主とする）と戒律を守らねばならぬといふ耆那教の教へを後に展開するに至つたニガンタ・ナータブツタ（尼乾子若提子または大雄と呼ばれた）。

註* この派の詭辯は饒論といはれてゐる。問答の場合に、「他生ありや」といふ問に對して、「予

にして若し他生ありと考ふるならば在りと答ふべし、然も予は斯く考へず、また然りとも考へず、また然らずとも考へず、然らずといふに非ずとも考へず」と應答して、確答を避ける方法であつた。即ち知に執着することは解脱の障害となるといふ知力否定説でもあつた。

* 今日なほ百二十五萬人の信者を有する耆那教は、大雄によつて提唱された宗教であつて、宇宙は生命要素と非生命要素とよりなるといふ二元論に立脚し、さらに非生命要素を空・法・非法・物質・時の五類とし、この五つのもとの結合から煩惱と輪廻とを生ずると説く。故にこの結合を破り生命要素を本然の性質に還元せしめるのが解脱であつて、そのためには激烈なる難行苦行を積み、無作不殺の戒律を守り、三寶（正信、正智、正業）によつてこの世の絆から脱却でき、得道者となることを得るとしてゐる。得道者を呼ぶに勝者と稱したとこ

るから、やがて耆那教の名を生じたものである。開祖大雄は西紀前五九九年から五二七年ごろまで在世したと傳へられ、その出身が刹帝利であることは深い意義を有してゐた。

耆那教の不殺主義は極端なところまで行はれ、道を行く時に小蟲を踏み殺すのを恐れて掃き乍ら歩き、空中の小蟲を呼吸によつて害するのを恐れてマスクを用ふるなど、或ひは毎朝口を嗽ぐこと、食後手を洗ふこと、夜食を攝ることを禁じたのも、共に殺生を恐れたからである。また彼等は地水火風の四大のうち、地と水とは生物をその中に含むとし、火と風とは生類を害するものとしてゐたので、これらに關する食物は、これを決して口にしない。

尚、佛教も耆那教も、共に古代婆羅門教に對する革新運動として起つたものであるが、我を常住とし苦行を勵行する耆那教からみれば、佛教の修業方法はいかにも疎懶安逸な快樂主義と現じたかも知れない。兩者の相容れざりしも亦自然であつた。

以上の忙しい瞥見によつても、六師の説くところが究極に於ては、人生苦樂の因を考へることによつて、則にそつた生活を営むことにあつて、現實生活の苦惱と傳統的生活の虚偽とに目覺めた思想運動であつたと言へるのである。さらに、十六王國併立の絶えまない戦亂は、一層現實的な唯物思想を養ひ、戦火に灰燼と歸する世相が誘ふ厭世觀からの解脱思想がこの時代に萌芽を見せてゐるこ

とは、下からもり上る力が集積され、整理されて、やがて各々の思想系體を形づくつたものと思はれる。

しかし、古代婆羅門教に拮抗し、婆羅門思想に對立した尤なるものは、佛教であり佛陀釋迦牟尼の思想であつた。

悉達多太子

西曆前五一五年、四月八日早朝のことである。迦毘羅城を王宮とした釋迦族の淨飯王の妃、摩耶夫人は藍民苑中の無憂樹の下で男子を生んだ。彼女はその出産のために實家である拘利城へ向ふ道すがらのことであつた。世繼を得た母后は、喜びの中にそのまゝ迦毘羅城へ歸つたが、産後七日にして歿した。生れた子は悉達多と名づけられ、母の妹である愛道夫人が妃となつて、健かに育てられた。全亞細亞の、大東亞の宗教的な思想および感情をほとんど決定づけた偉大なる釋尊は、かくて誕生したのである。

傳説によれば、生れ落ちたばかりの悉達多太子の相を見た有徳の仙人は「この赤子が家にあつて王位を繼げば、全印度を統治する轉輪王となるであらうし、また出家成道すれば必ず佛陀となつて

萬民を救済するであらう。われはもはや年老いてゐて、この偉大なる赤子の成長を見守ることもできず、その教説を聞くこともできない」と、父王淨飯に嘆きつゝ豫言した、といふ。

悉達多は十五歳の時に立太子の式をあげた。文武の道はふたつながらそなへ、天稟の才能は、一日、同族環視の中で大いに武藝を現はしたこともあつた。だが、それよりも八歳の頃に、禽獸の互に相食むを見て悲しみ、農民の營々たる辛勞をいだんだ——といふ逸話の方が生彩を放つてゐるであらう。

十七歳の時、彼は拘利城主善覺の娘、耶輸陀羅（華色女）を迎へて妃とした。従兄妹同志の結婚である。妻は美しく、國は豊かであつた。北に雪山連峯聳え、南に恒河の久遠の流れが、いくつかの清い支流を作つてゐる迦毘羅城内の生活は、華美に流れ、奢侈にかたむいてゐた。林苑は山水の美を競ひ、微風は芬香を送つてゐる。一日の興を助ける狩もあつた。大樹の下に憩ふ王庭の逍遙のひとときもあつた。美姫の舞ひ、歌ひ、遊びさんさめく王宮の生活があつた。

だが、端麗な若い太子のおもてには、いつも一沫の濃い哀愁の翳が漂ふてゐた。それは満ちたりた生活のもたらす無爲觀であつた。あまりにも長く續いた無爲の日が、彼をさいなむのである。さうして、日々に悲哀の情は深まつて行つた。

一日、悉達多は髪すでに白く、齒も落ちこぼれ、杖にすがつて辛うじて歩を運ぶ老爺を見た。彼は壯年の永く頼むに足らぬことを思つた。また或る日のことである。氣息奄々とした病者を見る太子の胸には、肉體の苦惱がいつわが身を襲ふかも知れぬといふ想念が浮んだ。さらに、人の死をともらつて、六親眷族が棺をめぐつて號泣する光景は、彼の心に世事常なく、人命の短かさを知らしめたのであつた。無常觀——それが、いつか悉達多の心につちかはれ、はぐくまれてゐた。だが、彼はまだそれを正しくは認識してゐなかつた。

註* 釋迦の生死に關する年號については異論がある。また、彼の生涯のそれらの時期を劃する年齢についても同じく説者によつて異なる。さらに彼の事蹟についても同斷である。こゝにはごく一般的なそれを記述した。

** 釋迦族を非アリヤン種族であると主張する説は、今日では殆んど常識に近い。本來チベットに居住したウラル・アルタイ語系の塞族の一分派と見なすのである。即ち、アリヤンの侵入と平行して印度に入り、百十三代の間、インダス河下流のポータラに都したが、やがて衰亡してその一支族はヒマラヤ山麓に逃れ、カピラヴァスツに建都したものが釋迦の祖家であるとされてゐる。

人は病氣をするもの、死すべきものであり、幸福は不安定であるといふ考へは、悉達多の思索生活をつねに暗くさせてゐた。彼は流浪の苦行者たちをうらやまねばならなかつた。沙門は冥想の生活と宗教的な論議を愉しみながら、苦行と戒律にその日を送つてゐる。それは一層深い眞實の生活を求めてゐるものやうに思はれた。太子もさういふ生活を覚え、その願望に燃えた。

語り傳へるところによれば、彼がさういふ生活を心の中にひそかに覚えてゐた時に、妃耶輸陀羅が一子羅喉羅を生んだのであつた。

彼はその知らせをきいて、つぶやいた。

「こゝにも絶たねばならぬ繫縛がまた一つ新しく生れた」

絶たねばならぬ繫縛を断つ日——それは悉達多が二十九歳の、その年も押しつまつた十二月八日であつた。彼は父、母、妻子の恩愛の絆を断つて、深夜、名馬カンタンに跨り迦毘羅城を去つた。彼は道を東南にとつて、摩伽陀國の首府王舍城附近の山林に入り、婆羅門アララ・カーラーマ仙について、解脱をたづねた。だが、婆羅門の答は太子をうなづかせるには遠かつた。

そして、太子の出奔は父王の歎きであつた。やがて彼の仙人居にあるのを知つた父王は、自ら駕をむけて太子の歸國をうながした。しかし悉達多の出家の決心は固く、彼の心を翻へさせることは父王も、妻も、子もあきらめなければならなかつた。父王は止むなく五人の家臣を残すことを承知させてむなしく迦毘羅城へ馬を返した。五人の家臣は太子を護衛する傍ら、太子とともに道を學んだ。佛書にいふ五比丘がこれである。だが、解脱は彼等の心にはいつまで待つても訪れなかつた。彼等はこの山林を捨て、泥連禪河畔の苦行林に移つた。此處でも彼等は失望しなければならなかつた。解脱は苦行林のなかにはなかつたのだ。

その頃になつて悉達多は禁欲も、斷食も、苦行も、いたづらに衰弱を増すだけで、彼の求めるものは決して得られないといふことを知つた。

彼は苦行を止め、常食を攝ることを欲した。彼は一牧女のさゝげた乳を、この世にない甘美なものとして飲んだ。だが彼に従ふべき五比丘には修行の異端を理解することができなかつた。彼等は既に志くぢけたと見た悉達多を捨て、鹿野苑へ向つた。——五比丘は苦行を續けることだけにまだ淡い希望をつないでゐたのだ。

太子は泥連禪河の流れを渡つて、佛陀迦耶の菩提樹の下に坐した。彼は眞正覺を得るまでは、こ

の坐を去らぬことを心に誓つた。眞正覺とは何か、解脱とは何か。——突如、啓示があつた。それは激湍のやうにほとばしる思想の波であつた。時に悉達多^{シツダト}三十五歳、二月八日の早朝、明星東に現はれる頃、豁然として大悟した、と傳へてゐる。

悉達多は立ち上つた。この悟りを世人に分つために、彼は足を鹿野苑^{カノノ}へ向けた。そこには彼を見捨てた五比丘がある。彼等を濟度することが佛陀^{ブツ}である釋迦牟尼^{シキヤムニ}の第一歩であつた。

註* 佛陀とは覺者の意。

** 牟尼とは智者の意。

根本佛教の精神

釋迦の教理を後世に至つて佛教と稱するやうになつたが、當時にはさういふ特別な名稱があつたものとは思はれない。新しい宗教といふよりも、それは婆羅門教^{バラモン}の中に包括されてゐて、しかも墮落腐敗した婆羅門教に對する一種の廓清運動であつた。若し釋迦その人がゐなかつたとしても、いづれかは何人かの手によつて推し進められたに違ひない社會改革案であつた。佛教とほゞ等しい時

代に現れた耆那教^{ジナ}とでも、同じく婆羅門教の一分派としてその紊亂を矯めさうとしたのであつた。それは婆羅門階級から刹帝利^{クシャトリヤ}へ、王侯から庶民へ、と流れた革新主義のもたらした成果であつたのだ。しかし、佛教がまさに佛教として本然のしかもその大きな影響力の故に、世界的な宗教としてより上るに至つたのは、一に不世出の人格である釋迦その人の力でもあつた。

釋迦の企圖したものは何であつたらうか——いま當時の社會革新といふことを考へれば、凡そ次の如きものであつたらう。

その第一は階級制度の打破であり、一切平等の思想であつた。第二はかくて平等となつた人間を欲望の奴隸から濟度しようとするにあつた。そのために、吠陀^{ヴェダ}アリヤンと非吠陀^{アヴィダ}アリヤンの差別はまづ撤廢された(釋迦自身混血アリヤン乃至は非アリヤン種族の出身である)次にアリヤン人と非アリヤン人との、もつとも甚だしい差違を縮少した。即ち、四海平等の説であつた。

まことに彼こそ自我を没却せず、自我に傾注し、自我を摧滅した人であつた。彼は人の心を把握することができた。心とは何か——この大きな問題の解答こそ、根本佛教の精神に外ならない。心とは動いて止まないものであるが故に諸行無常であり、動いて止まないのはこの間に常住の支配者がいないからであるといふ諸法無我となり、動いて止まず支配者もないとすれば、永遠と自主を缺く

が故に、苦であり空であるとする一切皆空の理があのづと導き出されるのである。かくして、諸行無常、諸法無我、一切皆空の精神を實踐する道が、四聖諦であり八正道であつた。

釋迦は鹿野苑に於ける最初の說法（初轉法輪）の中で、苦・集・滅・道の四諦を説いた。苦諦とは一切現世の苦痛であり、集諦とはその苦を生ずる業であり、滅諦とは苦痛の滅却であり、道諦とはその方法を言ふのである。凡そ一切の存在は苦痛である。苦は個人の貪り飽かぬ欲望の故でありこの欲望を克服しない限り人生は憂苦に満ちた行路である。故に、個人の感能欲、不死欲、名利欲などに打ち克つて、自我を滅却したときにこそ、至善至高なる涅槃の境地に達することができる、としたのであつた。

涅槃への道——この至難な道を覚めるものに、道諦といふ實踐律が與へられた。即ち、八正道を修めることが、涅槃を志す人々の出發であり、過程であつた。

正命（正しい生活）、正業（正しい行爲）、正語（正しい言葉）、正精進（勤勉力行すること）、正定（止住して忍び耐へる）、正念（正しい考察）、正見（正しい目標）、正思（正しい意思）——八正道とは特にこと新しい思想ではなかつた。それは、たゞ萬人の守るべき道德實踐律であつた。

傳 道

鹿野苑で五比丘を濟度させた釋迦には、その日から彼の生涯が說法と傳道の一生であることを約束されたのである。彼は五比丘と相ともに、諸種族の村々をめぐつた。五ヶ月にして六十人の得度者があつた。釋迦の人格と實踐とは、說法と傳道といふ二つの表現によつて完成されたのであつた。

彼は瞳を凝してかの黄衣の僧を見た、その僧は一見如何なる點に於ても他の幾百千の衆僧から識別すべくもなかつた。しかも彼も亦たどちに認識した——これこそは佛陀であると。……佛陀は何か思ひに沈みつゝ、慎ましく歩を運んで行つた。彼の冷靜なる顔色は樂しげにも非ず、哀しげにも非ずして、さながら我が身の内面に向つて微笑みつゝあるかの如くに見えた。ゆたかに内に湛へたる微笑を以て、一人の健全なる小兒にも似て、從容として迫らざる態度をもつて佛陀はいとも自然なる歩を運び、衣を掲げつつ、總ての彼の弟子達の如くに、嚴格なる戒律に従つて歩一步進んで行つた。しかしながら、その顔容とその歩行、靜かに伏せられたる

その時、靜かに垂れたるその手、及び靜かに垂れたるその手の一本一本の指さへも、和靜と圓滿とを現はし、求めず、傲はず、永遠の靜穩と、不滅の光明と、一指を染め難き平和とのおだやかに呼吸しつつあつた。

かくして佛陀は施物を集むるために市の方へと辿り行いた。……

(ヘルマン・ヘッセ「シツダールター」)

釋迦たちの徧歴は、やがて摩伽陀國の首都王舍城の郊外に達した。釋迦は竹林にあつて、衆生濟度の説法を聞いた。摩伽陀の國王頻毘沙羅は自ら竹林に赴いて釋迦を見、その聲に耳を傾けて、深く佛教に歸依した。この時に國王はじめ多くの刹帝利の得度者を得たばかりでなく、王の布施によつて竹林精舎が建立されて、こゝに釋迦の教へは普く中印度に浸透して行つた。多くの弟子たちの中に、外道を奉じた婆羅門僧舍利佛、目連、迦葉などが、師弟あひともに佛陀の御衣にすがつたのもこの時であつた。

釋迦は王舍城外の人となること數年、漸く年老いた父淨飯王の乞ひをいれて、故郷である迦毘羅城へ向つた。その途次、橋薩羅國の傳道で豪商須達多の歸依を得た。須達多は祇園精舎を寄進して、

佛陀の恵みと光榮とを世に示した。

釋迦が歸國したその日は、恰も異母弟である難陀の立太子式と華燭の典をあげる當日であつた。難陀は兄である佛陀を拜して、その場で出家を決意した。さらに七日にして、一子羅睺羅も得道した。

「汝出家の時はなほ難陀あり、いま難陀出家し、羅睺羅も亦これに習ふ。王統の斷絶するを如何せん」

と父淨飯王の嘆いたのもこの時であつた。しかし、教義はあまねく擴まつて、人の力をもつては如何ともなし得ない勢ひをもつてゐた。

釋迦が迦毘羅城を去つて、再び王舍城外の竹林精舎へ歸る日、釋迦を追つてその佛弟子に加へられることを願つた七人のものがあつた。釋迦の従弟でその敬愛を一身に集めた阿難をはじめとして阿尼盧陀、提婆達多、婆提、婆求、金毘羅および優波離であつた。この七人のうち、前の六人は何れなくも刹帝利であつたが、優波離は彼等に事へた理髮師で、いふまでも首陀羅であつた。曾て吠陀の朗詠をきくことさへも禁じられてゐた首陀羅が、いまは出家得道を許されるのであつた。こゝに新しい日がはじまつたのである。種姓を超えて眞實に生きることができるのである。この大きな改革

は、佛教の浸潤を一層つよめて行つた。のみならず、父淨飯王スレーダの死後、釋迦の養母であつた愛道夫人、世にありし日の妃であつた華色女の二人がともに出家することを願つた。佛陀はこれを容易に許さなかつたが、彼女等は志をまげず、佛陀を追つて離れなかつた。阿難は彼女等の願望を望み得べくもないのを知つて、ともに佛陀に願つた。かくして佛陀は遂にこれを許し、比丘のほかに始めて比丘尼を生むに至つた。佛陀の光被するところ、階級の差もなく、男女の別もなかつた。——時まさに彼が成道後、五年の頃のことであつた。まことに「花の香は風に逆はざるも、徳の香は天下に徧ねし（法句經）」であつた。

佛陀および佛弟子の徧歴は中北印度に及び、歸依する王侯は摩伽陀の頻毘沙羅王、憍薩羅の波斯匿王ディトなどの實力者であつた爲め、忽ち全印度に求道者を得たのであつた。しかも、その傳道にあつては、身命を賭した殉教精神をもつて、衆生濟度の實をあげた。十大弟子の中で説法第一といはれた富樓那が輸盧那へ傳道する時にあたつての佛陀との問答によつて、われわれはよくその實相を知ることができる。

その時、富樓那、佛に白す「我すでに世尊の教誡を蒙りぬ。我これより西の方、輸盧那の地に遊化せんとす」

に遊化せんとす」

佛告げ給ふ「西方、輸盧那の人は兇惡輕躁にして、罵詈毀辱を好む。汝、若しその毀辱をきかば、如何にするぞ」白す「世尊よ、彼國人は我を毀辱すとも、我はこの念を作さん。かの輸盧那の人は賢善にして智恵あり。我を毀辱すれども猶、石をもつて打擲するに至らず、と」

佛また告げ給ふ「若しまた石をもつて打擲せば如何」白す「我はまた念じて言はん。輸盧那の人は賢善にして智恵あり。石を我に加ふるも、猶、刀杖を用ひず、と」

佛さらに告げ給ふ「若し刀杖を加へなば如何」白す「我は念ぜん。輸盧那の人は賢善にして智恵あり。刀杖を我に加ふるも、猶、我を殺すに至らず、と」また告げ給ふ「汝を殺さば如何」白す「我はこの念となさん。死の縁や一ならず。或は繩をもつて自ら繋るあり。或は深坑に投ずるあり。かの輸盧那の人は賢善にして智恵あり。我この朽敗の身に於て、少作の方便をもつて、すなはち解脱を得せしむ、と」

佛のたまはく「善哉、富樓那よ。汝はよく忍辱を學べり。汝いま能く輸盧那の中に止住するに堪ゆ。行け、富樓那よ。彼に到りて未度の者を度し、未安の者を安んじ、涅槃を得ざるものに涅槃を得せしめよ」

憎惡は憎惡によりて、遂に止むべきにあらず。忍によりてのみ、ひとりこれを止むるを得。これ如來の法なり。

〔法句經〕

成道の日より四十餘年間を傳道に費した釋迦は、西曆前四八五年二月十五日、抱尸那伽羅城外雙羅雙樹の下で入滅した。かくて、釋迦の肉體は八十歳をもつて滅んだが、その教へは今日に至るまで長く維持され、發展されて行つたのである。

四大王國と佛陀時代

佛陀時代の中北印度は十六王國の對立が徐々に分解されて、漸く四大王國に統合されようとする頃であつた。摩伽陀の頻毘沙羅王、憍薩羅の波斯匿王はともに國內に精舍をもうけて、厚く佛教に歸依したばかりでなく、兩王は互に姻戚關係を結んでゐた。摩伽陀王頻毘沙羅の公妃は憍薩羅王波

斯匿の王妹憍薩羅提摩であつた。彼女は所持參金として迦尸の一邑をもつて嫁した、と本生譚は記してゐる。この二國の外に有力な王國として跋蹉と阿槃帝があつた。

阿槃帝王波羅殊提は諸王中もつとも勇猛で、チャンダ（怖るべき者）またはマハーセナ（大軍を有する者）と呼ばれてゐた。彼はひそかに摩伽陀の攻略をめぐるせ、まづその第一歩として隣國である跋蹉を攻めて、國王優陀延那を捕虜とした。しかるに波羅殊提の一王女は囚れの人である優陀延那を慕ひ、相思の仲となつた。二人は機をつかんで跋蹉へ逃走するのに成功した。波羅殊提は遂に娘の戀のために跋蹉と和を講ぜねばならなかつた。後にこの國は憍薩羅の攻撃をうけて、優陀延那王はラーヴァナカといふ邊境に難を逃れるといふ事態にたち至つたことがあつた。この時も優陀延那王は摩伽陀の王妹を妃とすることによつて、摩伽陀と阿槃帝の援軍を得て、憍薩羅軍をおのれの領土から撃退することができたのである。

憍薩羅の波斯匿王は「婆伽梵（佛陀の尊稱）も刹帝利、予も刹帝利。婆伽梵も憍薩羅、予も憍薩羅なり」と言つたやうに、迦尸や釋迦族、拘利族などをその傘下に收めて、憍薩羅の雄飛を期待させた英王であつた。王は佛陀の血縁と釋迦族の純潔な血統とを重んじて、その妃を覓めて特使を迦毘羅城へ送つた。しかし血統の純一を誇る釋迦族にとつては、容易ならぬ請求であつた。さりとして

拒絶すべくあまりにも波斯匿王の實力は大きかつた。のみならず憍薩羅は事實上釋迦族の支配者でもあつた。そこで、彼等は苦肉の策として、マハーヴァーマンといふ釋迦族正系の男子と奴隷の女との間に生れたヴァッサバハといふ一女を送つたのである。かうして迎へられた正妃から憍薩羅の王子頻溜茶迦が生れた。王子は生母の故郷へ赴いて、血統の正しくないことを知つた。彼は歸國すると父王波斯匿にそのことを告げた。波斯匿王の怒りは言ふまでもない、直ちに王妃も王子もその地位を剝奪され、釋迦族はいまにもその報復をうけるものと覺悟しなければならなかつた。しかしこれは佛陀のとりなしによつて、王子の地位も復して、釋迦族は危きをまぬかれたのであつた。波斯匿王の佛陀に對する歸依の情のいかに深かつたかを察し得られる一挿話である。だが、悲劇は必ずしも逆境にのみ現はれるものではない。波斯匿王歿して、王子頻溜茶迦が即位した。釋迦族はこの吉報に、樂觀と一族の安心立命を思つたが、その時、新王をいたゞく憍薩羅の大軍は迦毘羅城を襲つた。釋迦族は己れの血統の支配者によつて虐殺されるに至つたのである。しかし釋迦族の滅亡は同時に憍薩羅國の末路でもあつた。かういふ内訌がその國の力を著しく弱めてゐた。さうして、やがて摩伽陀帝國に併合される運命が到來するのであるが、それはもう暫く後のことである。

佛陀時代の血で血を洗ふ悲劇は、摩伽陀にもあつた。恒河河口の富裕な鶯伽國を手中に收めた摩

伽陀が、その頭角を表はしたのが頻毘沙羅王の時であつた。頻毘沙羅王は深く佛教を信奉して竹林精舍を造營し、諸國から參禪する求道者の群によつて王舍城は佛教の中心地の觀を呈してゐた。がその太子阿闍世は外道を奉じ、こゝに父子は宗教を異にするに至つた。のみならず、正妃、側妃によつて生れた王子たちは互に對抗する意識になやまされ、王位繼承に對する不安はつねに彼等の心理をゆがませてゐた。

この時、始めは佛陀の弟子となり、中途師に反いて耆那教に走つた提婆達多の使喚によつて、太子阿闍世は父王と佛陀とを共に葬らうとする陰謀を企てるに至つた。劍をふりかぶつて父王の居間に迫つた阿闍世は侍臣に妨げられてその企は空しく終つた。が、このことを知つた父王頻毘沙羅は位を太子に譲つて彼の要求に對へた。しかし、あくまで疑惑の眼をもつて見る阿闍世は、つひに父王を幽閉し、彼を餓死せしめた、と傳へられてゐる。これは佛陀入滅前八年のことであつた。

このことあつてから阿闍世には激しい良心の苛責があつた。さうして、彼は熱病に冒され、身心ともに消耗し、高熱にふるふるやうに心も病んだ。彼はすゝめられるまゝに、心の平靜さを得るため佛陀に一切の罪を懺悔し、その後は深く佛教に歸依した、と佛教史家は説いてゐる。

阿闍世アジャタタトの暴虐な所業は先考の妃憍薩羅提コイサラテに悲しみの日々を興へた。彼女は間もなく夫の跡を追ふことになつた。現世の悲しみよりはその方が遙かに愉しいことであつたらう。父と子が王位を争ふた生々しい記憶が母後の死期を早めたのであつた。

このことは憍薩羅の波斯匿王ボラスネイにとつては、實の妹を失つた悲しみであつた。が、なほ我慢のならないことがあつた。それは阿闍世アジャタタトが母後の持参金であつた迦尸カシからの歳入をそのまま着服してゐることであつた。かくて波斯匿王は軍を起した。阿闍世は若く逞しかつた。その上、領土を擴張しようといふ野望をいだいてゐたので、直ちに宣戦に應じて軍を進めた。波斯匿王はもう老境の人であつた。兩軍には各々いたゞく國王の年齢のやうに志氣の開きがあつた。かくして第一戦は摩伽陀軍マカッタの上に勝利を興へた。退いて國都舍衛城セウヱを防衛せざるを得なかつた憍薩羅軍に、傳説は祇園精舍にあるものから阿闍世の軍隊の弱點を知らされた、と誌してゐる。それかあらぬか、第二回の戦は憍薩羅軍の壓倒的な勝利となつて終つた。この大詰は國王阿闍世が捕虜となる一幕であつた。しかし波斯匿王は伯父甥の間で戦ふといふことを好まない優しい心をもつてゐた。そこで、王女ヴァジラ

1を阿闍世アジャタタトにめあはせて、問題の迦尸カシを摩伽陀マカッタに分割することにした。世にも目出度い幕切れであつた。

かくて迦尸の歸屬を定めた阿闍世は次の攻略に向つた。吠舍離ベシリーへの進撃であつた。しかし吠舍離はそのかみの大國章提訶チャテハをふくむ八王國の聯合で跋耆聯邦バクシと稱したゞけ、兵力も國富もともに充分な強敵であつた。阿闍世は奇計を用ひて、この強敵を敗つた。摩伽陀の宰相ヴァツサカーラは、阿闍世のために殺害されようとしたのを辛うじて逃れたのだ、と詐つて吠舍離の保護を乞ふた。彼は巧みに國民の甘心を買つて、爾來三星霜、この聯邦の共和體を分裂せしむべく暗躍した。やがて機會は來た。阿闍世は戰車を配備した大軍を送つて、跋耆聯邦とその隣國である未羅ムラとの同盟軍を蹂躪した。仁政を施した王波斯匿の歿後、後繼者である頻溜荼迦王ピルユカの暴政はいつの間にか大憍薩羅國コイサラを摩伽陀の發展する勢力の下に置いてゐた。もはや摩伽陀の國は先考のそれから見れば、二位に近いそれは恒河ガンガを渡つて遙か北方ヒマラヤ山脈の麓にまで達してゐた。だが、彼の飽くなき侵略の欲求は、それだけでは満足しなかつた。彼の目は中印度の阿槃帝アパンテイに注がれてゐた。だが、この國の實力は容易なことでは外敵の侵入などを許さゞとも思へなかつた。むしろ阿槃帝も亦摩伽陀の攻略を目指してゐたのである。かくて、對立する二強國の間には、國境を未解決のまま、數年が過ぎて行つ

た。

この間に阿闍世は愛子優陀延によつて虐殺された。それはあだかも、彼が頻毘沙羅王を餓死させたやうに、もつとも愛した子供からの刃をうけなければならなかつた。暴虐な血が親から子へと傳へられてゐたのであつた。優陀延は摩伽陀國王として統治すること十六年、阿闍世の遺志をついで阿槃帝アツンタイを志したが、つひに成らなかつた。しかし、既に北印をほぼ統一した摩伽陀の首府として、新にパトリブトラ（華子城）に築城したのは彼の時代のことである。彼の後を繼いだ王は暗愚であつたため、その死後、國民の輿望を擔つて大臣尸修那伽が王位についた。尸修那伽は懸案の阿槃帝を討伐して、中北印度をまつたく摩伽陀一色に塗りつぶすことに成功した。爾後、摩伽陀の支配者を尸修那伽王朝と呼ぶに至つたのである。しかし、この尸修那伽王にしても、なほ手のつけられぬ所があつた。それはインダス河を隔てた邊北の地一帯を占領してゐた波斯の領地であつた。

ダリウスの來寇

世界帝國を目指した波斯のキロス王が中央亞細亞を征服したのは西紀前六世紀の頃であつた。キロスのダリウスは、祖父の遺志を繼いで大波斯帝國を興した。前五一〇年のことである。ダリウス

は大舉してインダス河を渡り、シンド地方を始めとして犍陀羅、ペルチスタン等の西部印度一帯に互つて波斯軍を駐屯せしめるのに成功したのである。

肥沃なベンジャブ地方を手中に收めた波斯帝國は、總督を置いて統治し、年々莫大な貢物を徴收することができた。のみならず、この地方の大きな魅力は人的資源の徴發が可能なことであつた。毎年、新しい壯丁が兵役に服するために波斯軍の管下に入つたのである。

一方、さういつた搾取に對して、波斯文化がその地方を潤ほした。ダリウスは文化に深い理解を示してゐた。

ペルシヤの諸王は文化の統治者であるといふ彼等の大使命を十分に意識してゐた。これはダリウスが小亞細亞沿岸の航海に通じた船長スキラックスを見出し、これを派遣して大インダス河の水路を踏査せしめたことによつても知られるところである。

（ブレストッド「古代文化史」）

これは印度に於ける最初の外寇であつた。そして印度は、まだ統一した國家をもつてはゐなかつ

た。摩伽陀帝國を一つの例としてあげてみても、前五一八年といふのは頻毘沙羅王の全盛時代で、摩伽陀の擡頭がこれから始まらうといふ時であつた。印度といふ大きな國を全體から見れば、恒河流域を占めた數國の爭奪戰が続いて行はれてゐたので、邊境の地への關心は薄かつた。のみならず若しこれを奪取しようとするならば、大軍を動かし、國帑を擧げて戦はなければならぬのは當然であつた。分立から統一へ さういふ動きの中では望まれぬことに違ひない。かくして、波斯人は安全にその占領地を守り続けることができた。さうして、住民は毎年、年を新にするたびに三百六十タレント（約七十萬圓）に達する貢物をさしげ、若者を兵役につかせるのがならはしとなつたのである。この状態は、これから約二世紀の間、大した變遷もなく続けられるのであつた。

第五章 阿育王と摩伽陀帝國

（前四百年—二百年）

九 難陀王朝

摩伽陀の尸修那伽王朝がかねて念願の阿槃帝を平定して、北印度から中部印度までをその手中に收めてから、わづかに二十八年——烏色王の歿後、十王子によつて共和政治が行はれたのであつたが、この王朝は實質的には烏色王の死によつて終りを告げたといへるのである。さうして、次に立つたのが難陀王朝であつた。

難陀王朝の始祖マハーパドマは烏色王の宮廷に傭はれてゐた理髮師であつた。種姓はその職業からみて首陀羅であつたことは疑をはさむ餘地がない。この男は才智と同時に勇氣をもつてゐた。種姓を超越した戀愛などは許される筈もなかつたのに、烏色王の王妃はいつかマハーパドマを寵愛するやうになつてゐた。彼はそのため自然と宮中で勢力を得るやうになつた。そして陰慘な悲劇が宮廷を背景に描かれるに至つた。理髮師上りの將軍は己れの野心と戀のために烏色王を殺害して、ト

人の王子たちの聯合政治を敷き、自ら執權の職に任じた。セイロン島に残された傳説によれば、次々と十王子も謀殺されて、王位はつひにマハーパドマのものとなつたとあるが、彼の戀人であつた王妃については詳かではない。

マハーパドマは「大將軍」と呼ばれ、一萬の騎兵と二十萬の歩兵、二千臺の四頭馬車、三千の象軍を有してゐた。卑賤から身を起したこの王には、たよりにすべきものは己れの軍隊——實力のみであつた。しかも彼は婆羅門や刹帝利に對抗しなければならなかつた。彼は二十四年間統治したがその死後は八人の王子達によつて十二年間、摩伽陀帝國の實權は引きつがれてゐた。これが九難陀王朝の短かい統治史である。九難陀とは始祖と八人の王子だけの王朝といふ意味である。

されば難陀王朝の生命は、孔雀王朝の旃達羅笈多の箒星のやうな出現によつて亡ぼされ、西紀前三七二年から前三二二までの、凡そ五十年間の夢であつた。この王朝の短命であつたのは、何よりも首陀羅の出身であつたことが致命的であつた。國民の支持を失つた王朝にとつて、さらに大きな困難が現れた。それは亞歷山の遠征であつた。しかも難陀王朝の最後の王は、己れの身を護る軍隊からも不信を買ひ、意のままにこれを動かすこともできなかつた。

亞歷山の遠征

マケドニアの大王亞歷山は波斯王大流蘇との戦ひに捷つと、傳へきいたその豐饒と莫大な價金と兵士の寶庫である西北印度に心を惹かれた。

西暦前三二七年の早春、亞歷山はヒンヅークシ山系を越えて、疾風のやうに軍を進めた。彼の軍隊は舊波斯領内に於ては大きな抵抗をうけることもなく、無人の曠野を行く勢を示したが、インダス河を渡つて南岸に達すると、ジェナム河とチェナブ河の間に領地をもつ地方豪族のボルス王麾下の歩兵三萬、騎兵三千、戦車五千からなる印度軍と戦はなければならなかつた。だが、この精強な地方軍も旭日の勢にある亞歷山の大军には抗すべきではなく、ジェナム河の一戦に脆くも潰えた。

亞歷山はさらに東方恒河の流域に兵を進めようとしたが、マケドニアや希臘兵からなる彼の軍隊はその前進を拒んだ。はるか歐洲からの戦旅の日は長く續いて、兵は望郷の念しきりであつた。のみならず、炎熱の國印度は歐洲兵の戦闘意識をすくなく失はしめたのである。亞歷山大王ともその軍隊の同意がなくては、一寸の土地も得られる譯もない。彼は止むなく東方の攻略は断念して、インダス河を下り、ペルチスタンの海岸そひに歸路についたのである。まこと風の如く來り且

つ去つた軍勢であつた。

ベルチスタンの荒野を通りすぎて歸る路で、飢渴と食料欠亡のために、途上落伍者を出し多数の兵力を失つた。亞歴山は彼がバビロンの大都を出發して以來、七年有餘の歳月を経過して、再びもとのバビロンに歸還したのである。……彼は印度の境界に、やがて希臘勢力の中樞たるべき諸王國を設けた。かやうな中樞から希臘の藝術は印度に入り、今日なほこの地に餘喘を保つ藝術の始原となつた。

(プレステイド「古代文化史」)

西紀前三二三年六月、この若くして天才的な帝國形成者亞歴山大王は三十二才をもつて死んだ。彼は印度の五河地方とシンド地方とを己れの帝國內に併合しようと思圖してゐたが、その大業は彼の夭折によつて妨げられた。そして、亞歴山の領土は盟主を失つて分裂した。彼の部將の一人であつたセレウカスは、インダス河からエフエスに到る舊波斯帝國の大部分の支配權を獲得した。これは通例シリアと呼ばれる王國のことである。しかしセレウカスにもインダス河流域に近い領地は

放棄せざるを得ない日がやがて訪れるのである。それは難陀王朝に代る新しい摩伽陀の代表者である孔雀王朝の旃達羅笈多の登場であつた。

孔雀王朝

孔雀王朝の創始者は白面の青年旃達羅笈多であつた。彼は難陀王朝の最後の王と身分の低い女との間に生れた子であると言はれてゐるが、異本によれば釋迦族の一分派であるモリヤ族の君主の子となつてゐる。何れにせよその若い日々に、難陀王朝に追はれて、身を亞歴山の遠征軍に投じた。彼は難陀王朝の征服を亞歴山に勧めたが、大王の意は動いても麾下の兵の歸心に、彼の獻策は容れられずに終つた。しかし、彼はこの間、亞歴山の陣營にあつて、つぶさに戰術を學んだのである。

潮が引くやうに亞歴山が軍をおさめて歸つた後、前三二〇年代に、旃達羅笈多は五河地方を根城として烽起した。印度に残つた希臘總督フィリップスに對する民衆の烽起に乗じ、この擾亂を巧みにとらへて、兵を摩伽陀の首都華子城に進めた。會て彼が追はれた難陀王朝を亡すについて、彼を助けたのは婆羅門僧カウチリヤ一名をチャナキヤと呼ばれた手腕家であつた。

チャナキヤ（孔雀王朝の宰相）思ひ起せば、わが愼恙の災にナンダの若枝は悉く焼かれて、町人どもは小鳥の如くに忽ちばつと四散しつくし、女どもの嘆きの黒煙に月の面も暗くかすんでわが智謀の風に敵の軍師の頭には灰降りつもつて枯木同然。かくて我が怒りは力衰へて消えしとはあらねど、山火事の焼くべき物の最早なくて熄みしが如く鎮まつたばかりであつた。上を惧れて露には色に出さねど、頭を垂れ憎しみを隠して、わしがナンダ王に役を剝がれてすごとと立ち去る姿を哀れと眺めくれし人に、獅子が傲れる象を山の頂きより落すが如く、ナンダ王をば玉座より追ひ落して見せんとの大願たて、遂に志を遂げて宰相となり、今かく寶刀を佩くも、これみなチャンドラグプタ王のおためなり。四民を惱ませしナンダの一族をば根だやしして、王位をマウリヤに献じたれば池の蓮と幾久しう御代は萬代までも續くことであらう。ひと我に辛ければ、我またひとに辛しとかや——したが、ラークシャサ（ナンダの宰相）を味方につけねば、ナンダの一族ほろびたりとて油断はならず、チャンドラグプタのお家はまだ大磐石とは言ひ難し……。

（ヴィサーカダツタ「ムドラークシャサ」第一幕）

股肱の臣カウチリヤの政治的手腕によつて北印一帯の地及び西はインダス河から東は緬甸に至るまでの廣大な國土の統一がなつた西紀前三二二年、孔雀王朝の第一代の王として旃達羅笈多是摩伽陀帝國の帝位に即いた。彼の施政は嚴格ではあつたが國民の陳情に耳をかはずに吝かではなかつた。彼の軍隊は六十萬と稱せられ、實戰の經驗が精強さを増してゐた。全印度統一といふ大きな理想の第一歩をふみだした旃達羅笈多に對する第二の試練はセレウカスとの一戰であつた。

亞歷山帝國の崩壞によつて、已れの分前としてシリヤ、小亞細亞地方を獲得したセレウカス・ニカトールは、いまはなき大王と同じやうに豐沃な印度河流域の土地に對する誘惑を斥けることができなかつた。前三〇五年、彼は侵入を決意して軍を進めてみると、昔日の亞歷山帝國の一部は、既に旃達羅笈多の手にあつて孔雀王朝の仁政の下にあつた。そこで彼は勢ひ旃達羅笈多との一戰をいどまざるを得なくなつた。しかし印度軍は彼にとつては強敵であつた。遠征軍の志氣は緒戦に脆くも挫けて、セレウカスは撤退するの止むなきに至つた。そして、希臘人は形式上マケドニアの朝貢地であつたヘラート、ガンダハール、マクラーン、カプール等の領地を、實質的にも摩伽陀帝國の版圖と確認するといふ屈辱的な條件によつて和を結んだ。のみならず、セレウカスは已れの女を獻じて旃達羅笈多の勝利感を満足させ、その代償として自らは五百頭の象を得て、遠征の土産としな

ければならなかつた。

このこと以來、孔雀王朝とセレウカスのシリヤ王國とは久しく友好関係を續けた。それは希臘の使節としてメガステネスが前後五ヶ年も摩伽陀の首府華子城に滞在した時の記録によつてその時代まで辿ることができるのである。メガステネスは

「この王は血を流すことを何とも思つてゐない。それ故、日々暗殺に對する恐怖で暮してゐる」と旃達羅笈多を觀察してゐる。又をなじ見聞記によつて、當時の首都華子城や宮廷の様子なども知ることができる。

華子城は恒河とヒラニヤヴァーハ河との合流點にあつて、長さは九哩二分の一、幅一哩四分の三の矩形狀の城廓で、周圍は深さ三〇呎、幅六〇六呎の濠をもつて取りかこまれてゐた。城壁には攻防用の櫓五七〇をそなへ六十四の城門があつた。この中にある宮殿は木造であつたが、その華麗なことは到底波斯等の比ではなかつた。宮殿の柱には金箔を塗り、金の蔓や金の鳥などが飾られてゐる、と當時の豪華ぶりを記述してゐる。

國情については、「印度の民は質朴節儉で幸福な生活を送つてゐる。彼等は祭祀の場合を除いては酒を呑まない。食料は米であつて、主として野菜を混へて炊いた米飯である」とメガステネスは

書いてゐるが、これは二千年後の現代にもそのまゝ適用される記述であつた。

このやうに國威を輝かし、國富を増し、行政を確立して、中央集權制度を敷いた旃達羅笈多は、前二九七年に歿した。さうして次の王は頻頭沙羅であつた。この王は「敵を殺す者」といはれたほど勇敢で、その二十八年の統治期間に十六の大都市を征服したとあつて、先王の業を繼いで帝國を確實に維持し、さらに領土を擴張した。頻頭沙羅王は前二七〇年に歿した。こゝに孔雀王朝第三代の王であり、かつ全印度の統治者、大佛敎主義者、文武兩道の大帝として、阿育王がわれわれの前に大きく浮んでくるのである。だが、われわれは彼の事蹟を知る前に、彼によつて統一されるに至つた南部印度の狀勢を見て置く必要があるやうに思はれる。

南印の諸國

ラーマーヤナ詩篇の一節に、ラーマ王子が南印の猿將ハヌマンの協力を得て、ランガ島(セイロン島)に渡るといふところがあつたが、記憶の良い讀者は頁をくらなくともまだ覺えて居られることと思ふ。史詩時代にはじめて登場した南部印度は、それまで猿とか熊とか呼ばれたやうに、アリアン人から見れば被征服民族であるドラヴィデアン等の原住民の諸國があつたのである。だが、そ

これらの諸國はいつまでも孤立してゐた譯ではない。ラーマヤナの中で、ラーマ王子一行の行路はあきらかにゴダヴァリ河を渡つて南印の地へ進んでゐたことを示してゐる。故に西暦前六世紀頃、南印にはアリアン文化が入りはじめ、そこにドラヴィデアン文化との美しい混淆が見られたのであつた。

歴史のもつとも古い頃の南印度には、コーラ、パインドヤ、チエラ、ケララなどといふ國々が、古いしかし美事な文化をもつて榮えてゐた。やがて韋提訶のジャナカ王時代にはヴィダルバハ、アサツカ、ボハージャ等の移住アリアン種族の諸國が創設され、さらに極南にはアンドラ、プリンダ、ムーティバ、シャベラ等の非アリアン種族の王國や、混血種族として排斥されてゐたカリంగాなどの群雄が割據してゐたのである。

すべての印度史家は、次の事實を忘れてはならない。タミール人即ちドラヴィデアン人が、北部アリアン民族の組織からまつたく獨立し、否むしる場合によつては反對でさへある古文明を有してゐたといふ事である。

(スミス「牛津印度史」)

これらの諸國は、その極南地方のごく一部分を残すだけで、不出世の轉輪王阿育によつて、まつたく摩伽陀帝國の一部に編入されたか、少くとも朝貢國となつたのであるが、そのうちでも長く反抗をつゞけたカリంగా國との一戦は阿育王の事蹟の中で、彼の勇武と有情の心を知る鍵となるものである。

阿 育 王

阿育王は父王頻頭沙羅の在位中はウジャインの副王として赴任してゐた。ウジャインはもとの阿槃帝の首府で、中部印度の要衝であつた。彼は父王危篤の報によつて、急ぎ華子城に歸つた。そして、彼は攝政の地位についた。それは前二六九年のことである。彼が實際に即位式をあげたのは、前二六五年であるから、この間に四年間といふ孔雀王朝の空位があつた。この即位式を延ばしたことが、佛教の傳説となつて、「阿育は母を異にする九十九人の兄弟を九十八人まで殺して王位についた」と語られてゐるのである。だが、このことは佛教のもつ教化力を餘りに過大に示さうとした誇張であるとするべきであらう。たしかに阿育王の佛教歸依には一つの大きな轉機があつたには違

ひない。が、それだからと言って、佛教徒以前の彼を「悪阿育」で、歸佛後は「法阿育」と稱したと主張する必要はない筈である。

阿育王が即位の式をあげてから八年後のことであつた。マハナディ河とゴダヴァリ河とに狭まれたマドラスの東岸に位するカリンガ國がたまたま帝國の令下に服さなかつたので、阿育王はこの國の討伐を決意するに至つた。彼は大兵を率ひて南方の戦線に向つた。激戦の後、阿育王の軍はカリンガ國を接收した。この戦ひは十萬の敵兵を虐殺し、十五萬の人民を俘虜とすることによつて終りを告げたのであつた。阿育王は光榮ある勝利者であつた。だが、彼の心は何故か勝利の凱歌に躍らなかつた。そればかりか彼の心は戦争の惨虐と悲惨に傷んだ。彼はもはや二度と再び戦争をくり返したくないと思つた。戦争の惨禍を目の前にして、彼は佛教のもつ平和的な教義に心をひかれはじめた。彼の父は婆羅門教徒であつた、彼の祖父の旃達羅笈多是耆那教を信じてゐた。彼もまた若年のごろは外道の教説を信じたこともあつた。彼はいまや征服は力でなくて教へを武器とするべきであることを悟つたのである。

阿育王はカリンガ國に戦死者のために碑を建て、深い弔意を表はした。「人に王たるものは、先づ自らを治め、次にその敵を鎮撫すべし、自らの欲望に打ち克つ能はずして、いづくも能く敵を

征し得ん」と刻ませた心はこの戦を最初の、さうして最後の戦ひとさせたのであつた。

かうして人格廻轉を示した阿育王は、爾後佛教に歸依すること厚く、佛教をもつて國教と定めたのである。彼は年齢をとるに従つてますます教旨を信じ、僧服をまとひ佛陀の四大靈蹟（迦毘羅城

——降誕地、佛陀迦耶——成道、鹿野苑——初轉法輪、拘尸那伽羅——涅槃の地）を巡行し、或ひは華子城内に於ては動物を殺すことを禁じ、宮廷の肉食を止めるなど、正式の佛教徒としての生活を營んだ。また彼は廣く全印度へ、佛教徒の法即ち道德律を普及する手段として、多くの石柱を建て、磨崖に碑文を刻ませ、また伽藍を建立するなど、供養あまねきものがあつた。世に阿育王の石柱として喧傳されてゐるのは、このうち發掘されたもので、サンチー、バルフート、ブダガヤの塔は特に古代美術の印度的完成を示してゐる。これらの塔の一つに大凡次のやうな意味の碑文がしたゞめられてゐる。

「皇帝はかく宣せ給ふ。父母は従はるべきである。生物に對する尊敬は勵行さるべきである。常にまことを話さねばならない。これらは實行しなければならぬ法の諸徳である。先生は生徒に尊敬されねばならぬ。親戚の間といへども相應の禮儀は示さねばならぬ。これらは恭敬の規範である。——人々は日夜これに従つて行かねばならぬ」

人民に道德の實踐を説く阿育王は、人々の福祉を願ひ内治に意をそそいだ。彼は人畜の渴きを醫すために大規模な井戸を堀鑿させ、やがて炎熱の陽を遮ぎるであらう縁蔭を作るために組織的な樹木の植付をし、公園や藥草の栽培、病院等の公共施設に力を致した。彼の仁政はその王位にある間に二十六回も特赦を行つてゐることからも解る。

彼は佛教の布教といふことでも、恐らく佛教史上の第一人者としての功績を與へられてゐる。祖父以來のセレウカス、その他の諸外國との平和な交渉は、阿育王をしてそれらの諸國へ布教師を派遣し、傳道させることを考へつかせた。王子マヘンドラを錫蘭島へ送り、極南のタミール諸王國をはじめ、國外ではシリヤ、埃及、マケドニヤ、キレネー、エビルス^{エビルス}の西歐諸國へ、その教旨をうけた布教師が派遣された。このことたるや、彼がまさしく全印度統一の覇業に成功し、西はアフガニスタンから東は緬甸まで、南北は遠くヒマラヤ山系から、印度洋の怒濤かむコモリン岬までの、名實ともに印度皇帝として、鐵輪王の名をほしいまゝにした「實力」を物語るものに外ならない。

註* 七寶四德を具備して、須彌四洲を統一し、正法をもつて世を治める轉輪聖王のうち四種あつて、金輪王は須彌四洲を統領して最も優れ、銀輪王は北洲を除く三洲を、銅輪王は東

南洲を、鐵輪王は南瞻浮洲（印度のこと）を統治する王と言はれてゐる。これは佛教の所謂「轉輪寶」からでた帝王思想で、印度では阿育王によつて二百年待望の夢がまどかに結ばれたのであつた。なほ、釋迦の説法を轉法輪といふのも、この思想から發したもので、特に鹿野苑の最初の説法（初轉法輪）は佛教美術に必ずとり入れられる重要な内容となつてゐる。

阿育王、人頭を賣る

阿育王の仁政の根本精神は、もとより佛教にあつたけれども、またそれだけ厚く高い規範と仰いだことは言ふまでもない。その一つの例として、經典にある「阿育王、人頭を賣る」件を口語譯してみると。

阿育王は厚く三寶を尊信して、比丘達に會ふたびに、その長幼を問はず必ず下馬して、禮拜するのを常としてゐた。

王の大臣耶睺にとつては、これは不滿の種であつた。ある日彼は王に言つた。

「出家沙門といふものは、誰でも成れることだから、中には低い種姓のものも居ります。草を作る

職人や、機を織るもの、瓦業もあれば、理髪師でも比丘になれます。また下の下といはれる旃達羅とても沙門となればその前身を問ひません。どうして王はこのやうな微賤なものにまで禮拜をなされねばならぬのでせうか」

王はこの問ひに答へなかつた。

そして幾日か経つた。阿育王は大臣一同を呼び集めて、仰せられた。

「生類を殺すことは、國法として禁じた通りであるが、死んだものの頭をとることは差支へない。汝等は各々異つた動物の頭をとつて、市中に賣り捌いて參れ。深き仔細あれば……」

そして、耶睺には特に次のやうな命令を下された。

「汝は自殺した人間の頭を賣るのだ」

すべての大臣は王の命令をいぶかり乍らも、それぞれ動物を探し、その頭を賣つた代金を王の前に差し出した。だが、耶睺だけは賣れなかつた。誰も死人の頭を買ふものがないのは當然な話であつた。のみならず、町の人々は口々に罵つた。

「お前は賤しい旃達羅か、怖ろしい夜叉、羅刹か！ どうして死人の頭などを持ち廻つてゐるのだ」彼の復命は、王の意に心ならずもそむかねばならなかつた、といふことであつた。

そこで、王は再び言はれた。

「賣れなければ、無代でやつて參れ」

耶睺はまた町に出て叫んだ。

「無代でやるから、この頭を貰ふものはないか」

やがて、王宮では次のやうな問答が行はれた。

「耶睺よ、どうして人間の頭は賣れないのだ」

「王様、人の頭は厭がられるのです」

「それでは、耶睺よ、私の頭もやはり人々からいやがられるだらうか」

耶睺は勇をこして、正しい答をした。

「王様の頭も、同じことでございませう」

そこで、王は言はれた。

「耶睺よ、よく聞け。人間の頭は貴賤を問はず、種姓を選ばず、みな一樣に厭がられるものだ。王の頭も、人民の頭も區別はない。しかるに、お前は、重い種姓を恃みにして『私が沙門に禮拜するのをとめようとするのは誤であらうが……』と。(大莊嚴經第三卷)」

阿育王の治蹟として、最後にぬかすことのできないものは、前二四九年、王子ティッサに命じてとり行つた三藏の結集である。佛陀の入滅以後、佛教は、これまでに二回の結集を行つてゐた。

第一回の結集は、佛滅後その教理について異論が生じたので、前四七七年、摩伽陀の阿闍世王の後援の下に、王舎城に五百人の僧侶を集めて行はれた。その次第は、迦葉の司會によつて、持律第一の稱ある優波離が戒律をとなへて衆僧これに和し、多聞第一と稱せられた阿難をして教法を唱へしめて衆僧これに和し、會期七ヶ月をもつて結集を終つた。

この結果は宗論の一致によつて佛教の勢力を伸長させたが、阿闍世の歿後は尸修那迦王朝ようやく振はず、佛教も亦その王侯の後援者を失つて漸く舊態を維持するにすぎなかつた。第二回の結集は、かういふ情勢の中に、尸修那迦朝最後の王、烏色王の治世、前三七七年頃、吠舍離城に七百人の僧侶が参集して行はれた。既に衰勢を示した佛教に新風を導き入れようとする自由派と、釋迦の教へをあくまで墨守しようとする保守派との間に大論争を起し、佛教々團分裂の兆を見せたのみで收穫なくこの回は終つた。

その後、九難陀王朝は耆那教を支持し、孔雀王朝の旃達羅笈多またこれに和し、次王頻頭沙羅は婆羅門教に走るなど、佛教の隱忍は久しきに亘つた。しかし、こゝに阿育王の出現あり、待望久しい轉輪王の面影を仰ぎ見た佛教及び佛教徒は、國教と指定されたのみならず、形式内容ともに整備されて、再び昔の榮えをとり戻したのであつた。この意味で、第三回結集には特に經（佛陀の教へ）律（戒律）論（教へについての僧侶の解釋）の三藏を結集せしめたことは、當時の一般語であつたパーリ語をもつて議事經過を筆録せしめたことと共に、飛躍的な段階を與へたものであつた。會期九ヶ月華子城に集ひ參る僧侶じつに一千名に及んだ。

かくて敬虔なる佛教徒としての阿育王の一生は前二二二年をもつてその生涯を閉じたのである。

シュンガ王朝

印度統一體としての摩伽陀帝國は、阿育王の死によつてまたも分裂の氣運を見せて來た。それは一に閼門の紛擾からであつたと言はれてゐる。阿育王の妃パドマーヴァティは王に先立つてみまかつた爲め、阿育王はティシヤラクシターを后とした。彼が晩年の二、三年を王位から退いて隱居したといふのも、この間の經緯を物語つてゐた。

孔雀王朝の最後の王はブリハドラタであつた。もはやその頃には阿育王治下に見られた黄金時代の影さへもなかつた。佛教には偶像崇拜の思想が入りこみ、形式主義に墮した拜佛精神は、曾て叛旗をひるがへし、革新を叫んだ昔の婆羅門教に徐々に近づいてゐた。

一方、目を國境に移せばセレウカス王朝から獨立した希臘人チオドトスの新王國バクトリヤ(大食)國の存在は、摩伽陀帝國に新しい脅威を興へるに充分であつた。内憂外患ともも到つて、ブリハドラタ王の治下では各地の酋長藩侯の獨立が目に見えて多くなつて來た。またしても、局面打開のために新しい一石が投ぜられるべき事態となつてゐた。臣下は大臣系と武將系の二派に分れ、互に拮抗してその勢力を争つてゐた。

この時、一武將プシャミトラのクーデターによつて、ブリハドラタ王は果敢ない最後をとげるに至つた。謀殺によつて始まつた孔雀王朝は、阿育王を中興の祖として、またも暗殺によつて滅亡することになつたのである。

この暗殺は、しかし、摩伽陀元老院によつて、正當と認められた。それは、南北より脅威をうけて國運危殆に瀕しつゝある、といふ理由からプシャミトラは摩伽陀の帝位を獲得することができた。これをシュンガ王朝と言ふのである。——時に西暦前一八五年のことであつた。

第六章 外寇と貴霜王朝 (前二百年—西暦三百年)

大夏のメナデル

シリヤ王國として知られたセレウカスの大きな版圖は、孔雀王朝の阿育王時代に、二つの獨立國を誕生させた。一つはヒンズークシ山脈とオムダリヤ河の間に領地をもつたバクトリヤ(大夏)であり、もう一つは裏海の南東に位置を占めたバルチア(安息)であつた。

阿育王の死後、西印度には希臘諸王が割據するやうになつた。その地方一帯は、曾て旃達羅笈多(Chandragupta)がセレウカスから譲られたものであつたが、孔雀王朝の力ではもはや維持して行くことはできないやうになつてゐた。

希臘人の諸王の中には、二人の印度侵入者があつた——バクトリヤのデメトリオス王とメナデル王がこれである。「バクトリヤ一千の都市の知事」であつたデメトリオス王の印度侵入はアフガニスタンの大部分とパンジヤブ地方を占領することになつた。一方、メナデルも西はカブールか

ら東はマツーラまでを征服し、中印度地方にまで及ぼさうとしてゐた。これを印度人はヤバナの侵入と呼んでゐる。ヤバナとは、その頃印度で、希臘のことを呼んだ稱呼であつた。

メナデルは前一七五年頃、オウドに達した。そこで彼の強敵であつたシュンガ王朝のプシャミトラの軍と遭遇した。メナデルは第二の亞歷山大王たらうとして、大いに正義と人道を旨として征服地を統治したが、ほどなく印度軍のために撃退されて、彼の雄圖もむなしく、インダス河北岸に後退しなければならなかつた。これはたしかに敗戦ではあつたが、決定的なものではなかつた。その後兩軍の間には相對峙したまゝ數年があつた。そして、大夏の軍隊がまづたく印度からその影を消したのは、次に印度を目指して來たバルチアの軍隊によつてであつた。

バルチアの侵入と塞種

シリヤ王國の一部、波斯の北方バルチア州に獨立國を起した安息は、その第四代の王ミトラダラス一世の時にシリヤ王國を亡し、ヒンヅークシの山々から西はユーフラテス河の流域までをその手中に收めた。そしてこの頃から印度侵略をはじめ既に印度安息の領土をタキシラー地方その他西北の地に樹立したのである。

バルチア人はもと中央亞細亞の數多い遊牧民の一部であつた。その血の中には多くのイラン人種が混つてゐた。彼等は勇敢といふよりは粗暴に近いほどの騎馬種族で、幾千頭といふ駒をそろへ、砂塵をまいて侵入して來たのであつた。

その後着々として領土を擴張し、それ以前に印度大夏を樹立してゐたバクトリヤ軍を各個擊破して進んで行つた。西曆四〇年代にはベシヤワールからインダス河下流の地一帯はまづたくバルチアの勢力範圍となつてゐたが、カンダハールはその頃既に印度進出に成功した塞種の占めるところであつた。

紀元前二世紀に於て、われわれは中央亞細亞から遊牧民族の部落の群である塞種のことを聞き始めた。この民族は印度平原に南下し、五河地方に土着し、その領域マツーラに達し、カシヤワール或ひはスラーシュトラを占領し、彼等は遂にその支配者となつた。古代の印度に於ては、サカなる名稱は、たゞ漠然と山徑の彼方から來た外人を表はす總稱として使用し、これによつて民族又は部族の精細な區別をつけることはしなかつた。

(ラブソン「古代印度」)

塞種族の印度進出は同じ遊牧民であつた月氏族に追はれた結果の所産であつた。彼等は精悍な月氏族のために、次々と止むを得ざる移動を續けた。バクトリヤへ侵入し、バルチアを犯し、つひにガンダハールからインダス河の流域を占めるに至つた。彼等はヒルマンド河畔のシースタンに本據を置いて、徐々に印度の内部に食ひこみ、モアス王に至り（前一〇〇年）ベンジャブ地方を侵し、勢ひ大いにあがつた。その後にはカチャワル半島に自立した種族も出たのである。彼等には民族統一といつた概念がなかつたので、部族の酋長の意見によつて、個々の小さな集團が自由に行動することができた。そこでこの侵入者の集團、タキシラやマツラに腰を据ゑた一團を北部サツトラブと呼び、マルワ地方のそれを西部サツトラブと言つたが、後者は更に二十の部族に分けることができた。サツトラブとは「大守」といふ意味の波斯語であつた。

しかし、彼等の本來の移動が謂はゞ月氏族に追はれた一種の逃避行であつた位であるから、印度に月氏族の來寇があると共に、彼等もまた亡びざるを得ない運命の下にあつた。

カインヴァ王朝

相つぐ外寇に應接の暇なかつたシュンガ王朝の始祖ブシャミトラは前一四八年に歿した。

羅門教をもつて國民精神を振興させようとした。そのために佛教の布教をきびしく禁じたので佛影史上では有名な人となつた。バクトリヤ王メナデルをインダス河畔で撃退して凱旋した時に、彼は長らく中斷されてゐた馬祠祭を復活し、盛大に舉行した。彼の武威は辛うじて南方諸國を押へ、カリンガとの戦ひも有利に解決することができた。

ブシャミトラの次にアグニミトラが即位したが、凡庸な君主として王位を維持するに汲々たるのみで概ね治績はあがらなかつた。彼のしたことといへば印度劇の奨励ぐらゐるものである。この頃になると西北部の國境は特に外敵の來襲によつていつも何處か擾亂されてゐた時代なので、摩伽陀帝國の國威も著しく衰退の路を辿るばかりであつた。やがて、シュンガ朝第十代のデヴァブリーチ王のとき、摩伽陀元老院はこの王を王者の資格に缺けるものと考へた。そしてかれを廢し（一説には殺害されたとある）、ヴァスデバといふ婆羅門僧を立て、摩伽陀の王位を繼承させた（前七二年）。カインヴァ王朝はかくて生れ出たのである。

しかしカインヴァ王朝は短命で終つた。ヴァスデバの統治僅かに九年、その子ブーミトラが十四年在位し、第三代ナラーヤナ王が十二年間、そして第四代にして且つ最後の王スサルマンの第十

年目に南印に擡頭したアンドラ王朝によつてまつたく征服されるまで、僅かに全王朝の生命として四十五年間を摩伽陀帝國の系譜に残したにすぎなかつたのである。

カインヴァ王朝を倒した(前二七年)のは、南部印度のアンドラ王朝である。そのときの王はシムカ・シャータヴァハナであつた。久しく南方にわだかまつて機會を覓めてゐたアンドラ一族はカインヴァのササルマン王を刺して、凱歌を奏した。そのほか、前代のシュンガ朝の後裔も滅ぼされた。曾ては全印度に號令した摩伽陀帝國は、こゝにまつたくその後繼者を失ふことになつた。外寇につぐに外寇をもつてしたこの時代は、何ごとにもまれ殺伐の氣をはらんでゐた。霸道とは「力」であり、「死ぬもの貧乏」であつた。若し誰でも外敵に反撃することができれば、それが英雄であり、國王の資格でもあつた。傳統とか血統とか言つてゐるうちに、多くの土地に外國植民地が置々しく印度大夏とか、印度安息とかいつて、これ見よがしの經營を續けてゐたことは、當時の印度人には我慢のならないことであつたらう。この鬱憤をはらすことのできるものが、大きく浮び上つて來るのも道理であつた。

アンドラ王朝と南印の狀勢

アンドラ王朝は阿育王の全印征服の頃すでに極南地方に蟠踞してゐた非アリアン王國であつた。彼等は中印度や北西方の紛争をよそに孜孜として國力を養成した。その結果、ゴダヴァリ河附近に漸く勢力をもつて來たアンドラ王朝は、東海岸ばかりでなく西海岸も傘下に併呑することに成功した。

摩伽陀帝國では、シュンガ王朝とカインヴァ王朝のいつもながらの血なまぐさい繼承戦が續けられてゐたし、國境を突破した外寇は、既にわれわれの知つたやうに我もの領土を設定してゐた時代であつた。そしてシムカ王のとき、摩伽陀帝國の崩壊があつた。それは同時にアンドラ王朝の逞しく立ち上る轉機でもあつた。

アンドラ王朝の宗教は佛教であつた。阿育王時代の大衆部の中心指導者であつた大天といふ僧侶が、クリシユナ河畔に布教の根據を置いてから、この王國の民衆は殆んど佛教一と色に塗りつぶされたかの感があつた。そして代々の王侯も佛教保護者であることに誇を感じてゐた。新しい國家に新しい宗教がびつたり合致したのである。第六世の王シュリー・シャータカラニの名は、佛教美術としてばかりでなく古代印度藝術の粹といはれるサンチーの塔門に、その記録を残してゐる。

この王朝に課せられた役割は南印を外敵の侵入からふせぐことにあつた。そのため彼等はしばし

ば、前に述べたやうな侵入者と戦はねばならなかつた。二世紀の始め、カチャワラ半島の塞種が南印デッカ地方へ侵入して來た。この時のアンドラ王朝はガウタミー・プトラ王の治世で、國を擧げてこの不法な侵略者と戦つた。かくて塞族は撃退されたのである。ガウタミー・プトラ王は國民的な英雄となつた。彼は進んでグジェラートやラージプタナをも彼の版圖に組み入れた。彼は二十五年間の統治で歿したので、その後は王子ブルマリーが繼いだ（一三三年）。

アンドラ王國の英雄が死ぬと、今度は塞族に英雄が生れた。西部サットラプの一族で優禪那の大守であつたルツドラグーマン（一三〇年——一五〇年）である。彼は前代になし遂げられなかつたデッカンの征服に再び乗り出した。その頃は國王とか大守とかいふ人が軍司令官であつたので、相戦ふ指揮者の優劣が直ちに兩軍の勝敗の分れ目であつた。塞族の二度目の侵入は、ルツドラグーマンに率ひられた軍隊によつて、デッカンの奥深くまで達することができた。それはアンドラ王朝の脅威であつた。戦ふか、妥協するか、その何れかを選ぶべき立場となつたブルマリー王は、後者を選んだ。彼はルツドラグーマンの娘と結婚して、姻戚關係によつて一時的の平和をとり結んだのである。

一方、極南地方のチョラ、パンディア、サチャプトラ等の小王國は、かういふ領土擴張戦には無

關心であつた。彼等は独自の文化を育て、開港場として異國文化をもとり入れてゐた。印度洋の貿易風の行方がはつきり解るやうになると（一世紀）、外國との通商が賑盛を極めるやうになつた。

埃及、波斯、希臘、羅馬などの船が、交るがはるやつて來た。彼等は寶石や香料や、絹や、それからもうその頃には立派な製品を作り出してゐた綿織物などを印度から買つて歸つた。かういふ通商關係から、いくらか希臘風な影響が南方文化に與へられて來た。だが、それは決して希臘文化を輸入したといふことではない。印度の文化は、その頃の波斯やメソポタミア文化、埃及文化などより遙かに高い優れたものであつた。むしろ影響の大きかつたのはそれらの異國の方であつた。南方印度の諸王國には希臘兵が宮廷儀仗兵として使用されてゐたほどであつた。それはたしかにある種の裝飾的價值をもつてゐたからであらう。

大月氏の來寇

だが、外寇はまだ續いてゐた。今度は大月氏の北印征服が始まるのである。

土耳其人の血統をもつた月氏は、その始めは天山々系の廻りにゐた遊牧種族であつた。當時中央亞細亞を席捲してゐた匈奴族に追はれて、次第に西方に移動し、イリ河畔の塞族を南に潰走させた

が、またも烏孫に壓迫されてヒマラヤの西へ向ひ、バクトリヤを征服してワフシエ河々北の地に月氏國を建てた（前一二八年）。

國を建て、都を定めるやうになると、彼等は本來の遊牧生活を捨て、城廓の中の生活を始めたのである。月氏國と言つても、それは立憲君主の國ではない——いくつかの部族の共和聯邦の形式であつた。そして、前七〇年頃から五つの翽侯に分けて統治されるやうになつた。

註* 支那の西域にあつた種族で西域族に屬すると説く人もある。

** 五翽侯は月氏には關係なく、バクトリヤの小王侯であるといふ桑原・羽田兩博士の説も捨て難い、が今は通説をとる。

月氏五翽侯のうちでは貴霜族がもつとも強力であつた。それには一人の英雄があつた。貴霜翽侯は一世紀の頃には、他の四翽侯を従へ、「大」月氏國がその名のやうに大國となつて生れ出たのである。

かゝる大業を行つた王をクジュラ・カドフィセス（丘就卻）といひ、彼は西方安息國の所領

を侵し、南はヒンヅークシ山脈を越えてカーブル河の流域を收める。その子のヴェマ・カドフィセス（閻膏珍）はさらにパンジャブ地方にまで拓疆を行ふ。

（松田壽男「中央アジア史」）

カドフィセス二世は印度に侵入してゐたバクトリヤやバルチアの勢力を一掃し、一度びは中印度のアラハバード近くまで攻略した。その後一代おいて（次王ヴァジシユカはたゞ無能な君主でしかなかつた）、西北印度の統一者迦膩色迦王が出るのである。これを大月氏の貴霜王朝と呼んでゐる。

迦膩色迦王

迦膩色迦王は西紀七二年に即位して、都をブルシャーブラ（現今のペシャワール）に定めた。サカ紀元といふのはこの年から起算するのである。印度人たちは、外國人を一樣にサカと呼んでゐたのであるから、大月氏の貴霜王朝をサカといふのを躊躇しなかつた。

迦膩色迦王の意圖したところは或ひは全印度の征服にあつたかも知れなかつた。とに角、彼のとき北印度に確實な帝國制を布いたこと、彼が佛教に歸依して、その王朝下に阿育王以來の第四

の結集を開いたこと——この二つの事蹟が迦膩色迦王の名を今も史上に留めてゐるのである。彼の希望が全印度の平定であるにせよ、中央亞細亞の情勢は印度のそれよりも一層急なものがあつた。そこで彼の觸手は南印に及ばないで、月氏族の古巢であつたカシュガルやホータンの地へ伸びて行つた。彼の征旅行の留守はその子フヴィシカが印度を守つた。彼の帝國は遠くパミール高原から恒河の流域まで、雄大な構想のまゝくりひろげられた。

迦膩色迦王の結集はカジュミール地方のジャランガラのフヴァナ寺に五百人の僧侶を招いて、經、律、論に關する異説を統一させた。その議事は梵語で筆録し、銅板に刻んで、特に建造した寺塔に收めた。散逸と汚損を防いだのである。このために、一時衰へたかに思はれた佛教は従前に増した力で信者と、それに従つて僧侶の數を増して行つた。そして、佛教は大衆層を獲得するにつれて、北方に浸潤して行つた大乘佛教と、依然として南方に固執した小乘佛教とに、次第に分裂して行くのである。なほ、この時代は、迦膩色迦王自身は佛教信者であつても、他の宗教——婆羅門教や耆那教も依然として存在を主張することができた。

迦膩色迦王の後繼者であつたフヴィシカも、さらにその次のヴァリスデヴァも佛教徒としての生涯を送つた。殊にフヴィシカはマツラをはじめ各所に寺院を建立したり、希臘美術をとり入れた

ガンダーラ佛像を奨励したりして、印度に於ける佛教はその後に進んであらう衰退を知らぬげに、最後の光輝ある發展を示してゐた。

大月氏の統治が教へたもう一つの大きなことは、それが印度に於ける最初の異民族による支配であつたことである。月氏族はアリアン人とも違つてゐた。またドラヴィデアン族でもなかつた。彼等はウラル・アルタイ語系の、たしかに宗教も風俗も教養も——まづたく違つた文化をもつた民族であつた。それにも拘らず、月氏の統治は迦膩色迦王のやうな英王を出し、その宮廷には當時のあらゆる俊英が侍り、學藝の華が誇りやかに咲き亂れた。のみならず、貴霜王朝の始祖カドフィセス一世がその晩年を敬虔な佛教徒として送り、その子カドフィセス二世が熱心なる濕婆神崇拜者であつたこと、更に迦膩色迦王以後の厚い佛教歸依などは何れも、異民族の印度同化を物語るものでしかない。

即ち、月氏は力の侵入には成功したが、燦然たる印度文化には逆にまづたく征服されたものと言へるのである。蓋し、そのことこそ印度のもつ力と美とが、異民族を壓倒し去つて、やがてそれらを吸収しつくした姿であつた。

迦膩色迦王の學苑には、大乘佛教の唱導者馬鳴がゐた。印度醫學の大家チャラカがゐた。數學に

造詣の深かつた科學者マータハラがゐた。かれらは何れも王のまたとない伴侶であつた。かうして、一世の榮華を誇つた貴霜王朝は、迦膩色迦王の後、約一世紀のあひだ印度の統治權を握つてゐたが第四世紀の始めに笈多王朝の出現によつて、漸く勢力を失ひ、領土を蠶食されて行つた。打ちのめされた彼等の歸るところはやはり故里であるトルキスタンであつた。さうして、再び第五世紀に印度を窺つたときには、彼等はや「魏書」にはゆる小月氏國として、僅かにその命脈をつないでゐたのである。

佛 教 美 術

印度古代美術といへば、それは佛教美術の同意語である。佛教美術をぬいては印度美術を語れないし、古代美術を探るには佛教に關する彫刻や建築の中にそれを求めなければならぬ。

現在のこつてゐる古代美術の遺品は、阿育王建立の石柱、バルフートの塔門、佛陀迦耶の欄楯、サンチーの塔、アヂヤンターの石窟、エローラの洞窟などが代表的なものである。

これらの資料によれば、古代美術の遡り得る年代は大凡阿育王時代の西曆前三世紀であるが、例へば阿育王の石柱の上に施された獅子の丸彫の巧みな寫實と力強い表現は、これらの彫刻が一朝一

夕になつたものでないことを知らしめる。けれども、われわれはそれ以前の古代については、まったく知り得ないのである。何故ならば、阿育王以前の（恐らくは以後といへども）彫刻や建築にはおもに木材を使用してゐたもので、材料の腐敗崩壊によつて、まづたく残存物をとどめないからである。

しかし、もつとも古い製作と考へられる阿育王の石柱——それは砂岩を削つてやゝ先を細くした圓柱で、美しく研磨してあり、その上に蓮瓣を下向きに設計した鐘のやうな形の柱があつて、さらにその上の頂盤には獅子、象、牛等の丸彫が安置してある五〇呎にも及ぶ大石柱であるが——を見ても、その優れた意匠と成熟した技法とは、先づ印度美術史の開卷第一頁にして、既にわれわれを瞠目せしめる美しさである。

建築としては、卒塔婆といふ塔をあげなければならぬ。塔は元來は佛舍利（遺骨）を封藏するために作られたものであつた。それが後には聖地を記念するためにも建立されかの阿育王の八萬四千塔といはれるものにまで發展して行つた。

サンチーの大塔は僅かに現存してゐる阿育王時代の八萬四千塔の一つと稱せられてゐる。が、これには勿論後代の手がかゝつてゐるものの、しかし最古の塔ではある。塔は圓い臺の上に丁度鉢を

伏せたやうな塔身を築き上げて、その上に相輪といふ幾層かの輪を有する控へ柱を立てたものであつた。その内部は直徑の半分ほどは阿育煉瓦といはれてゐる大きな軌を積上げてある。その上をシユンガ朝時代の輻形の石で覆つてあるのが現状である。

佛陀迦耶の大塔も阿育王建設のものといはれてゐるが、これには明らかに後世の變形と擴大とが見られる。そして印度教と佛教の奇異な混淆さへもある。この大塔の高さは百八十呎、矩形の基部の上に九層の階をもつてゐる。

佛教伽藍には支提チエーと毘訶羅ビカが特長的である。支提は塔廟とも譯してゐるが、これは小さな禮拜堂である。毘訶羅は精舎といふ人もある位で、これは言ふまでもなく僧院である。しかし、殘存してゐるのはともにアジャンター其他の石窟の中にあるものだけで、單獨に存在した在り日の姿を偲ぶよすがもない。

彫刻の微妙な美しさは、サンチーの塔門や佛陀迦耶とバルフートの欄楯の中に、ほとんど無限につきせぬ古代美術の面影を残してゐる。サンチーの塔門にはアンドラ王朝下(前一世紀)に建設された碑銘があるし、前二世紀中葉のバルフートや、それから稍遅れて佛陀迦耶の欄楯には、シユンガ王朝治下の貨幣の彫刻などによつてあきらかにその製作年代を確めることができる。

この塔門や楯には殆んど隙間なく浮彫が施されてあつて、その内容は法輪、菩提樹の供養、佛本生譚ボツタ(佛陀前生の物語)、佛傳、蓮華、女人像その他いくつかの動物などで石材を用ひながらまるで象牙彫のやうな精細微妙の世界を展開してゐる。

これらの彫刻のもつ世界的な意義は、その獨創性にあり、繪畫的な表現、優美な描線、卓抜な構圖、さうしてこれらの全體が醸し出す豊かな滋味、微笑しい風韻は、それがしばしば稗拙にも見える素朴さで貫かれてゐることにあるのである。

次に古代の佛教美術で注目すべきことは、「佛陀形像の不表現」といふことである。佛陀の傳記を綴つた彫刻の中にも、決して佛陀は存在してゐないのである。古代期の彫工は、佛陀の形像に代へるに、方座、聖樹、佛足跡、經行所、塔などでこれを象徴してゐる。

果してどんな理由から、佛陀の形像を描かなかつたのか——この問題に對する妥當な解答はそれを一つに纏めることは困難であるが、大體次のやうな考へ方が許されるであらう。

一、佛陀の人間としての形像よりもその精神的な存在を象徴によつて示すのみで甘んじたこと。
二、神聖なる佛陀を寫すことはその尊嚴を冒瀆するものとしたこと。三、時代の推移によつて人間的佛陀が次第に超人的佛陀となり三十二相八十隨好と見へるといふに至つては到底これを描し得な

いこと。四、またこの時代が古代期の遺物崇拜の時代であり、形像によつて佛陀を髣髴しようといふ欲望のなかつたこと——などが擧げられるが、これを要するに、原始佛教は依然として婆羅門教の強い影響の下にあつたがために、釋迦を神格化して尊崇するにしても、これを偶像とするまでには至らなかつた、と見るべきである。

しかしわれわれが既に知つたやうに、印度にはいくつかの異國人が入つて來た。さうして彼等は印度の大きな懷に包含され、やがて印度人とかはりのない生活を營むやうに同化されて來たのである。バクトリヤ人もバルチア人も佛教に歸依した。塞種も月氏族も釋尊の恵みを等しくうけるに至つて、こゝにその頃すでに成つてゐた希臘神像に模して、釋迦の像を刻まうとする欲望が起つたのも自然であつた。

佛像の出現——所謂ガンダハラ佛像はかうして作られた。それゆゑ、佛陀の表情はアポロに似、梵天はペテロに形どり、藥叉や毘沙門はバルテス、アテネと同一の形相をとるに至つたのも怪しむに足りない。そして、佛像の出現は佛教の布教の上に大きな力を致した。人々は佛陀の形像をおがむことができ、これを日夜禮拜することのできるのであつた。そこには偶像崇拜のもつ法悦が一層宗教的な光輝を放つた。貴霜王朝の迦膩色迦王時代に佛教の著しい發展があつたことは、今もなほ殘

る北部印度のガンダハラ佛像がたゞ無言で物語るのみである。

印度の原始的な繪畫については殆んど知られてゐない。たしかに存在したに違ひない繪畫藝術は今ではもはやこれを求むべくもないのである。それは繪畫のもつ材料のもろさといふことを考へれば、五千年の文化の流れにその原始時代の作品の遺物を求める愚さは捨てなければならぬ。

アジャンターの壁畫として知られてゐるものでも、そのうちで最も古い年代の第九窟第十窟のもも西紀一、二世紀と推定されてゐる。第九窟のマンチョラ本生圖は浮線的で軟かい畫調、第十窟の六牙象本生圖は豁達な描線で放膽な畫調を示すなど、まつたくこの二代表作の中にも對蹠的な美術があるのである。

古代印度の原始繪畫は殘存せられずとも、畫論の中では古代の美を遺憾なく傳へてゐる。例へば神や王様を描くには、その形像は一般庶民よりも大きくしなければいけないとか、若い女性には均衡の美と姿勢端正とに氣を附けるとか、群衆の描寫には全體的な統一を心がける等といふものであるが、所詮それが今日からみて幼稚なものであらうとも、美の起元の古さと正しさを物語るものではないか。

また三世紀に在世したと想像されるヴァツシヤナの「カーマ・ストトラ」の中には、サドアンガ

といふ繪畫六法がある。

- 一、ルバブヘダ——形像、山水、建築などに關する客觀的形狀の知識。
- 二、プラマナム——比律、解剖、遠近などの正しい知覺、數量、構成の要道。
- 三、ブハワ——形像に於ける感覺表現。
- 四、ラブニヤ・ヨジャナム——典雅美麗の必要。
- 五、サドリシヤム——形似に於て眞をうることの必要。
- 六、ワルニカブハンガ——用筆、着色法などの實際方面。

古代印度美術の世界に冠たるところは、いまだこれを正しく傳へ得たとは思はない。——美術を語るに文字をもつてするいらだたしさ、それは百千言を費しても尙足れりとはしない筈である。そこでこれらに就てはほんの一瞥を興へただけにして、われわれは次の章に進むべきであらう。

第七章 笈多王朝とプラナ時代 (三百年——七百年)

笈多紀元

四世紀の始めのことである。かつて摩伽陀帝國の首府として、「金銀をもつて裝飾され華麗をきはめた」華子城に、笈多と名乗る有力者が現はれた。彼はやがてみづから己れを藩王と定め、孔雀王朝の後裔と自稱して、附近の地を治めた。この猫額大の一小地域の藩王國が、孔雀王朝以來の第二回目の印度統一といふ大業を成し遂げたのは、それから尙三代目の繼承者であつたチャンドラ・グプター一世以後の諸王による努力と建設とであつた。

西曆三二〇年に王位についたチャンドラ・グプター一世は、かの孔雀王朝の創始者の名前を僭稱して、貴族政治と、婆羅門教の蘇生とをはかつた。彼はあきらかに孔雀王朝の模倣を志してゐた。彼が吠舍離の王女クマールデーヴィと結婚したのも、唐達羅笈多のセレウスカの女を娶つた故知にならつたのである。この姻戚關係は、笈多王朝の勢威をたしかに飛躍させるに役立つた。始めは華子城

一城の主よるびに過ぎなかつたチャンドラグプタ一世は、やがて、附近の酋長を傘下に収めた。彼の王國は恒河に沿ふて健實に發展して行つた。そして彼の晩年には、アラハバード地方までを含む大きな地域が、彼の統治の下にあつた。彼の王としての才能は、その當初は模倣から出發したにせよ、後にはまつたく身についた王威を示すことができたのである。

彼の即位の年をもつて第一年とする笈多紀元は、かうして生れた。

サムドラ・グプタと超日王

チャンドラ・グプタ一世の逝去（三四〇年）はその子サムドラ・グプタを王位に送ることとなつた。笈多王朝の飛躍的な發展が企圖され、全印統一としての國家體が約束されたのは彼の治下であつた。

サムドラ・グプタは武人としては英雄であり、文人としては學者、詩人、音楽家であつた。一人にして、まさに文武兩道に達した人物であつたと言はれてゐる。彼の統治はあくまで武人としての征服であつた。彼はその若い頃に上部印度の征服を志した。ベンガル、アッサム、ネパールの小君主國は擧げて彼の版圖に繰り入れられた。次に彼が立つたのは遠くアフガニスタンやグジュエラート

地方にその時もなほ根を下してゐた貴霜王朝クイシャナの後裔や、バルチアや塞種セキの部族政體に對してであつた。これは彼の父祖からの宿題であつた。彼の父祖以來といふよりも、印度人の誇と血が行はしめた征討行であつたと言ふ方がむしろ正しいであらう。長い外敵の侵寇にちつと怵へてゐた民族精神の激發であつた。鬱血のほとばしりでもあつた。そして、彼の征服は成つた。サムドラ・グプタの名の下に、國境はまた靜かな土地となることができた。

この征服が完了した時、彼は三度び軍を南に進めた。オリッサの曠野を横ぎつてカリンガを屏息させ、ゴダヴァリ河を渡つて東海岸を疾驅して、半島南端コモリン岬に達した。この破竹の勢ひは印度洋上の島々をも震駭させ、その凡ては笈多王朝に朝貢することを誓つた。彼の南方征服も成功した。が、彼は南の土地を永久の領土とはしなかつた。笈多王朝の屬國として朝貢することを約させることによつて彼は満足した。

とはいへ彼の戦利品は莫大な黄金であつた。彼は華子城パトリプットに凱旋すると、獨り王中の王のみに許された馬祠祭を盛大に執り行つた。彼の領土は、東はフーグリ河からストレジ河に及び、西はチャンバルに達し、北は大ヒマラヤ山系の傾斜地から、南方はナルバダ河に至る豊穰無比の大版圖となつた。セイロン島を始めとする多くの屬國からの來貢は、彼の國富を増した。この大覇業を成しとげ

た君主が優雅な印度琵琶をしらべる時をもつたといふことは、笈多王朝の黄金時代が到来したことを教へてゐるのである。それは一介の武辨でないことを知らすと同時に、彼の心の廣さ豊かさをも見せるのである。彼は婆羅門教を信じ、サンスクリット語の再興を計つたが、またセイロン島王の依頼によつて、佛陀迦耶へ佛教寺院を建立する寛容さをも有してゐた。

サムドラ・グプタの後はその子チャンドラ・グプタ二世が繼いだ。彼は父の遺業をうけつぐに相應しい武勇と聰明さを持つてゐた。そして父子二代に亘る帝國の建設が行はれるのである。

チャンドラ・グプタ二世が何よりも着手しなければならなかつたのは、シンド地方からマルワにまで及ぶ塞種の西部サットラプの勢威を挫くことであつた。そこで彼は、西北印度へ遠征軍を送つた。辛うじて住居の地を守つてゐた塞種は、昇天の勢ひにある笈多の兵に抗すべくもなかつた。笈多王朝はまたその版圖を擴張した。その昔、中印度の文化の中心として榮えたウジャインも再び印度人の手にもどることになつた。恐らく、これが笈多朝の最盛時であり、印度の二回目の統一國家の頂點であつた。王はこの大きな領土を記念するために首都をアヨドヤに遷した。

人々はチャンドラ・グプタ二世を超日王と呼んで、一世を風靡した威徳をあがめた。王は仁政を布き、文化に心を致した。婆羅門教徒であつた王の治下に、佛教の一分派の創立者である

世親がゐた。また支那僧法顯が來印したのも超日王治世の時であつた。そのやうに宗教は自由に認められてゐた。のみならず、王はしばしば佛教の教理に耳を傾けたといふ。

「九寶」と呼ばれた九人の學者や詩人や哲學者が超日王の宮廷にゐて、王の常住の友人であつた。サンスクリット文學はこの王朝下に美しい印度を歌ひ、物語つた。サムドラ・グプタから超日王までの笈多王朝の黄金時代は、これをまさに文藝復興期と呼ぶに相應しい文化の精華があらゆる部門で實を結んだ時代であつた。

文藝復興期

印度古典文學の寶玉篇「シャクンタラ姫」の作者であるカリダーサが、超日王の所謂「九寶」の中にゐたかどうか、種々の異説があるが、とまれカリダーサが創作活動を行つてゐたのは西暦五世紀にあたることは確かである。

カリダーサは詩人にして非凡な劇作家であつた。一年の流涕をラーマギリに詫び住ふヤクシャが雨期ともなれば天を蔽ひ流れ去る黒雲を見て、戀々の情を雲に託して、カイラーサ山頂クペーラ天の神都に、夫を想つて憔悴する愛妻を慰めるといふ一篇の抒情詩「雲の使者」が、印度の情操を傳

へる傑作ならば、英雄ラーマ王子を描いた「ラギーの部族」やシーヴァ天と神妃ウマとの神婚を謳つた「クマールサンバヴァ」は叙事詩の形式をもつて印度神話の精髓を寫した名什として詩聖カリダーサの名は不朽である。

若しそれゲーテの「御身は人生に於ける青年の花、老年の果實なりき。すべての心と靈魂を喜びしめ樂します。御身は美の中に天地を綜合す。噫、シャクンタラよ。われは御身を指して然りといふ」といふ讚頌にある戯曲「シャクンタラ姫」の哀愁悲曲を印度古典梵劇の隨一篇とするならば、劇聖カリダーサの名は、こゝにもまた不朽のものがある。

ブル王統のヅシャンタ王は狩獵の途次森の中の一婆羅門の隱栖で、婢娟たる美少女シャクンタラを知つた。王は都へ歸る時に自ら指輪を與へて、愛情の印とした。シャクンタラは背の君を慕つて都へ上るが、たまたま一婆羅門の呪咀によつて指輪を失ふ。このためにヅシャンタ王の記憶もかきけされ、シャクンタラ姫は王と對面しながら、かたりのものとして引き退らなければならなかつた。そして彼女は幽栖のうちに一子を生んだ。悲痛と辛酸の歲月の後に、指輪は漁師の手によつて見出され、呪ひも解けて、姫は王の正妃となる。

これが七幕の戯曲「シャクンタラ姫」のごく大づかみな梗概である。まことにカリダーサは燦然

と輝く印度文學の寶石であつた。彼は詩の美しさを教へ、劇の地位を高めた天才であつた。その餘の詩人や散文に於ける作家を語るには、この場所は狭くそして適當ではないやうである。

笈多朝の美術の示すところは、繪畫にあれ、彫刻・建築にあれ、波斯や希臘から傳へられた西歐風の手法をまつたく消化して、印度古來の藝術に復古しようとする動きと試みである。即ち、そこにはルネッサンスの精神が澎湃として湧き上つた全印度的藝術の昇華があつた。

そのもつとも著しい例は、これを佛像に見ることが出来る。前期の犍陀羅佛像のもつ異國的（希臘）な彫像は、到底かれらに満足を與へるものではなかつた。これに代るものとして、製作されたのが笈多朝の彫刻である。この時期の彫像はごく薄い衣を全身に蔽つてゐるが、衣が身體に密着してゐるのでさながら裸體そのまゝのやうな繊細な線を描く。相貌は圓く優しく慈眼衆生を視るその表情は美しい。光背には鮮麗な蓮華や草花紋様を浮彫にする。それは施無畏印の立像佛に見る、力と美と莊長さと脱俗の趣きとが正しく印度的な理想を實現した佛像として顯現されたのであつた。

アジャンターの壁畫では第十六、十七、十九洞等の第二期に屬するものが、この時代の筆である。ことに第十七洞前廊壁畫である奏樂圖の如きは、飛雲に乗つた菩薩をとりまいて大勢の樂人が思ひ思ひの樂器を手にして、奏でてゐる構圖であるが、人體描寫の進歩は肉體の線を描くのに、あくま

で寫實的な筆致と氣力とをもつてしてゐる。これはあきらかに前期末の、情趣にのみおぼれた典麗さに對する反抗であつた。セイロン島シーギリヤ壁畫の大膽きはまる筆遣ひも、笈多期の繪畫としては忘れられないものであらう。

建築としては佛陀迦耶の大塔をはじめ、エローラの窟院、カナーラク寺院等の輪奐の美をきはめたものが残つてゐるが、不幸にしてそのもつとも重要と思はれる多くの建築物が、十一世紀をもつて始まる回教徒の侵入によつてまつたく破壊しつくされたことである。

古代の科學

印度では科學の發達は宗教のお蔭であつた。殆んどあらゆる科學的萌芽が吠陀の附録の如くに研究されてゐた。

一番はじめに發達したのは天文學であつた。それは獻供の時間をきめなければならぬことによつて、必然的に天文の觀測を刺戟したのである。祭司は日夜天空を觀察した。晝、彼は太陽の南北に循環するのを知つた。夜、彼は月の星宿の圏内を通りすぎるのを見た。かくて一年を十二ヶ月に分つことをさとり、太陰曆と太陽曆とを調和させるために毎五年に閏を置いた。月が徧歴する二十

八宿にはそれぞれ名稱がつけられた。また太陽の赤道通過を觀察して、至點の位置を明かした。これらは既に吠陀時代に行はれた天文學であつた。ある學者は至點の觀測は西曆前一八一年に行はれた、と算出した。佛陀時代にはペラサラヤガルガをはじめとして、十八種の「天文の著述」があつた、と傳へられてゐる。スリアの「シグンタ」は、遊星の位置、月及び太陽の運行、天文觀測の機械、時間計算の方法など十四章から成り、その科學性は著しく強化されてゐた。笈多朝ともなれば天文學の發達は世界に冠たるものがある。それはアリアバッタとヴァラハミヒラといふ二人の天才が現れたからであつた。

アリアバッタは四七六年華子城に生れ、六世紀の初葉には、地球の軸の廻轉を主張した、彼の著述「アリアバチャ」によれば「人若し船にのりて前進するに、不動の對象は背進するを見るべし。星辰は動かざるも、その日々動くが如く見ゆるはこれによるのみ」とある。また彼は日蝕、月蝕の理も説いたと傳へられる。

ヴァラハミヒラは五〇五年ウジャインに生れ、「プリハト・サンヒタ」といふ包括的な大著述を遺してゐる。その書は太陽、月、地球、遊星などの天體現象のみならず、偶像、殿堂、動植物、礦物（寶石）などについても言及してゐる。

天體の観測はまた必然に數學を生んだ。印度記號法としての十進法が、今日全世界に行はれてゐることは周知の通りである。十進法は零といふ記號によつて成立するものであつて、零の發見こそは印度が誇る科學性であつた。かくて、印度數學はアラビヤを経て世界に廣く行はれるやうになつた。七世紀初葉に在世した數學者ブラアマグブタは、如何なる數に零を乗じても結果は常に零であること、また如何なる數に零を加減してもその數の値は變化しない、といふことを「ブラーマスブタ・シダンタ」といふ著述の中で書いてゐる。

幾何學の發達も亦祭祀の一種として自然に行はれた。夜柔吠陀には祭壇の形をあげ、その面積を示してゐるが、祭壇の形は車形、圓形、瓶形、方形、龜甲形など十六種にのぼつてゐる。しかも、その面積は一定であるので、これらの祭壇の構造には勢ひ幾何學的な知識が要求された。文法や言語學の發達も同じやうに吠陀に聯關してゐると言へる。それは讚頌や祭詞の一字をも誤讀すれば神怒をまねくとせられた吠陀尊崇から發し、正格な文法と音韻とが絶對のものとなつたのである。もつとも古くなほ現存する梵文典は、犍陀羅地方から出たバーニーニの經典で、吠陀の正確なる教育を目的としたものである。彼の在世した時代は西暦前五六世紀であつて、すくなくとも佛陀時代以前ではないやうに思はれる。

醫學の起原も、これを求むれば阿闍婆吠陀の藥草や呪ひなどの記載にあると言ふこともできる。西暦前四世紀の頃、來印した希臘人ネアルコスネアルコスの、希臘の醫師は毒蛇にかまれたものを癒す術を知らぬが、印度の醫師はこれを治す、といつたいふと言説が傳はつてゐる。しかし印度醫學はチャラカとススルタの時代にその確立を見た。

チャラカの著述は八篇から成り、藥劑、疾病、疫病、靈魂の性質、官能、吐劑、下劑、解毒劑など主として藥劑について説いてゐる。彼は貴霜王朝の迦膩色迦王時代の人で王の知遇を得てゐた。ススルタの書は六篇にわかれ、主として外科的の方面を記述し、外科術、疾病の徵候、肉體の構造、青春期、負傷、潰瘍、折骨、産科、解毒などを論じてゐる。

熱帯の國、印度は殆んど無限の植物をもつてゐる。これが多くの藥草の發見となつたのである。さらに古代醫學は進んで藥劑に金屬を用ひてゐたことが、上記の二著によつて知られる。「彼等は既に酸化銅(銅・鐵・錫・鉛)、硫化物(鐵・銅・アンチモニー・水銀・砒石)、硫酸鹽類(銅・亞鉛・鐵)及び鐵や鉛の炭酸鹽類の知識を有してゐた(ロイル氏)」として印度醫學の卓越性を確認する説もあるのである。

佛教の勃興以來婆羅門教は大いにその勢ひをそがれたとはいへ、なほ一般に弘く行はれてゐた。信教の自由は孔雀王朝から笈多王朝にいたるまで維持されて、佛教と婆羅門教とは互に併存してゐたものと考へられる。そして佛教の流通は、バクトリヤを最初として一連の異民族侵入者を佛教徒としたことによつて、概ね全印度に廣く行き互つてゐた。失地の回復と古代印度の復歸を目指した笈多王朝の確立せられるや、アリヤン系の諸部族は、外敵の奉じた佛教に反對して、アリヤン古來の婆羅門教に歸らうとする要求はますます熾烈なものとなつた。加ふるに笈多王朝は始祖以來の婆羅門崇拜である。こゝに婆羅門教復活の情勢がまつたく成されたものと言つてもよい。

しかし一度び佛教の洗禮をうけた宗教界は舊態そのまゝの婆羅門教を再現させることはあり得なかつた。こゝに新らしく粧つた婆羅門教即ち後期婆羅門教としての復活と、或ひは考へ方によつてはまつたく新しい宗教としてのヒンヅー教（印度教）の誕生が見られるのである。そして新しく生れたヒンヅー教は必然多くの影響を佛教からうけた。

ヒンヅー教はまづ信仰の形式に佛教徒の聖地巡禮と偶像崇拜とを採り入れた。曾ては祭壇に聖火

を灯し供犠をさゝげた素朴な信仰にとつて代つたものは宏壯なる殿堂建築であつた。ヒンヅー教の寺院は各地に競つて建立され、恒河は聖河としてその水に浴することが身心の汚穢を流拭すると信ぜられるに至つた。偶像崇拜は寺院殿堂にヒンヅーの神々をまつり、これに禮拜する風を生じた。

ヒンヅー教はまた信仰の對象に於ても佛教の影響をうけた。それは神格の變遷であつた。曾て吠陀時代の神々としてのインドラ・アグニ・スールヤなどの自然神は漸くその位置を讓つて、佛教の三寶（佛・法・僧）に倣ひ、ブラーマ（梵天または婆羅摩）・ヴィシュヌ（毘濕拏）・シヴァ（濕婆）の三神を立て、最高原理としてブラーマは世界を創造し、ヴィシュヌはこれを保持し、シヴァはこれを破壊するといふ三神一體説をなすに至つた。即ち創造神としてのブラーマ、守成神としてのヴィシュヌ、破壊神としてのシヴァは最高神の位置につき、火の神アグニヤ、空の神ヴァルナ、太陽の神スーリヤ、風の神ヴァユなどは小神とされたのである。次の神話は以上の關係を物語るであらう。

アグニ、ヴァルナ、スーリヤ、ヴァユの諸神は、魔神アストラ（阿修羅）のために幸福な天上の樂園を追はれたので、大神ブラーマに救を求めた。しかし、ブラーマは己れの創造物の一を助けるために他を亡ぼすのを欲しなかつた。彼は言つた。「アストラを亡ぼすものはシヴァの子のみである」

と。

シヴァはまだ獨身であつた。彼はヒマラヤ山中にあつて沈思黙考にふけてゐた。彼の傍には山の娘ウマがはべつてゐた。諸神はシヴァがウマを愛して、一子をあげることを望んだ。そして愛の神がこのために送られた。

愛の神はシヴァの疲労したときを計つて、愛の矢を放つた。波の靜かな海に月が昇るやうに、愛情はシヴァの胸にわいた。シヴァは目を轉じて熟柿のやうなウマの朱い唇を見た。が、ウマは胸せまり手足おののいて、カダムバスの芽が春の恵みにひらくやうに、シヴァの愛を待つた。

しかしシヴァは抑制した。そして彼の胸にまき起つた妖しい愛の旋風を消した。けれども彼の怒つた目から發する閃光は、愛の神を焼いて死灰と化した。ウマは追放された。

追放されたウマは森中に入つて苦行に従つた。數ヶ月が経つた。一日、一人の隱者が苦行するウマの傍に来て、妙齡の子女の身で苦行することのいきさつを尋ねた。そして彼女の愛するシヴァを嘲笑した。

ウマは憤怒のためにその胸、波をうち、木の皮の衣をはらつて、立ち去らうとすると、かの隱者こそは威あつて猛からざるシヴァその人であつた。彼はウマの誠意に感動し、つひに結婚して一子

をもうけた。この子はカルチケヤと呼ばれ、天國を追はれた諸神を援けて、アストラを破り天上帝國を回復した。

註* この神話から材をとつたものがカリダーサの叙事詩「クマールサンバヴァ」である。右は不手際な梗概として役立てば幸甚である。

三神一體説はやがて唯一神への信仰とならざるを得ない。ブラーマはいつともなくその神格を縮少し、ヒンヅー教はヴィシュヌ派とシヴァ派の二つの大きな潮流となつた。

* ヴィシュヌ派は西暦三、四世紀の頃、北印の殺帝利クシャトリヤが純粹印度文化の擁護と印度人を外來諸族の桎梏から解放しようとした試みた時に、ヴィシュヌの加護を祈つたことからはじまつたと傳へられてゐる。ヴィシュヌは溫和、保育、親愛を表象し、婆伽梵歌バガヴァトギータのクリシュナはヴィシュヌの權化と認められ、長く印度人の精神の糧となるのである。

* シヴァ派は笈多王朝グプタの印度再建がなつたのちに大衆の宗教的要求にそつて一分派を開いたもので苦行・破壊・恐怖などを代表するシヴァの神をあがめるこの宗派に現實否定的な悲觀的教義が行は

れるやうになつたのも自然であつた。シヴァは會ての暴風雨神ルドラのことであつて、居を雪山の上に占め、四面、十臂、三眼、黒頸、額に半月を戴き、虎の皮を纏ひ、神妃ウマとともに白牛に乗り、弓槍斧戟を武器とするといふ神格である。

シヴァのリンガ(男根)崇拜もシヴァ派の特筆すべき一面であらう。リンガ崇拜は豊饒を祈るドラヴィデアン族の民間信仰であつて、この頃に至つてヒンヅー教に攝取されたものと見られる。

註*

ヒンヅー教が佛教の影響をうけたやうに、佛教もヒンヅー教の影響を蒙らざるを得なかつた。それ故、佛教の諸天中には梵天(ブラーマ)大自在天(シヴァ)那羅延天(ナーラーヤナ)即ちヴィシュヌなどが見られ、さらに帝釋(インドラ)などがあることは、この二つの宗教が、對立でなく併立してゐたことを物語つてゐる。

十八のプラナ

ヒンヅー教の新しい創定は、こゝに新しい聖典文學を必要とした。この要望によつて生れたもの

が十八のプラナといはれる神話と系譜の文學であつた。プラナとは「古譚」といふ義であつて、それは婆羅門教の吠陀に對して、「ヒンヅー教の通俗なる吠陀」あるひは「第五の吠陀」と言はれてゐた。

プラナの内容は神の諸題目に對して神話を經とし、傳説を緯とし、或ひは日月兩王統の系譜をのせ、マヌの法典なども密接な關係をもつてゐた。かの「マハーバータ」の附録であるハリヴァンシヤがプラナの一種であることは、今日では疑問をはさむ餘地はない。

十八のプラナの成つた時代は超日王の治下のやうに思はれる。しかし嚴密なる意味での古形を保つプラナは残つてゐない。そしてこの文獻の成つた時代、即ち超日王の西曆五世紀から、回教徒の初期侵入の九世紀までを、ヒンヅー教時代あるひは特にプラナ時代と呼んで、僅かに聖典文學の名を留めることになつたのである。

白匈奴との戦ひ

超日王チャンドラ・グプタ二世は四一三年に歿して、その後をクラーマ・グプタ(鳩摩羅笈多、四一三年—四五五年)が繼いだ。彼の治世は四十餘年に及んだが、彼は寛容な人格者で、世親の

唯識説をきいて以來、深く佛教に心を傾けたと言はれる。彼のうけついで宗教としてはヒンヅー教を擧げなければならぬが、その治世には佛教も多くの信者を集めてゐた。有名な佛教大學であるナランダ寺院は彼の時代に着工されたものと見られる。

しかし彼の治世はその晩年に及んで擾亂されることになつた。その一は白匈奴の侵入であつた。彼等はエプタリトとも呼ばれて、中央亞細亞から來寇した慍悍無比な遊牧民族であつた。その二は部將バトルカが叛旗をひるがへし新に^{グアラビ}（代臘毗）朝をひらいたことであつた。後者には皇太子スカンダ・グプタが大軍を率ゐて鎮定に向つたが邀撃されて兵を歸さざるを得なかつた。

註*

白匈奴は別にエフタル（嚙噠）とも呼ばれ、歐洲を震駭せしめたフン族と區別してゐる。彼等は長驅白哲の土耳古族に屬するやうに思はれるが、彼等が奈邊から起つたものかまだ明かでない。五一九年にその領土を訪れた北魏の僧宋雲の記録に「南は^{暹羅}に至り、北は^{勃勒}を盡す、東は^{干闥}を被ひ、東は波斯に及ぶ、四十余國みな來つて朝賀す」とあつて、南印のチヨラ王國まで包括してゐるが、これは健陀羅あたりまでと見たい。

** この王朝はスラシュトラ及び西部諸州を併せ、七七〇年まで十九代續いて西北印度に君臨し、

宗教文學を保護したと傳へられる。

従つて、四五五年に即位したクマール・グプタの次王スカンダ・グプタ（塞建陀笈多）の治世といふものは、まづたくこの白匈奴との戦ひに終始したものと云へる。彼は貨幣を改鑄して軍資金を得、善戦して匈奴の南下を一時躊躇せしめた。その故に、スカンダ・グプタは彼の國民から祖父チヤンドラ・グプタ二世のやうに、^{ツクワマニヤ}またもや超日王と呼ばれるやうになつた。

この次の王はブラ・グプタ（富爛笈多、四八〇年 四八五年）と呼んで、前王の異母兄であつた。彼の在位は短かかつた。そして彼の後繼者であつたナラジンハグプタ・パーラダイチャも同じやうに白匈奴に憚まされた。彼等は絶えずヒマラヤの峠を越えてインダス河地方へ侵入して來た。そして四九五年には、酋長トラマーナの王國はバンジャブ、ラージプタナ、マルワ地方にまで及んでゐた。トラマーナはよくアリアンの古習を學んで領民を愛したが、五一〇年に歿した。その子ミヒラグラ王位につくや、匈奴特有の殘忍性を發揮して、虐殺相つぎ破壊をもつしなかつたので人心は俄かに彼の王國から離れた。

この時、パーラダイチャ王はマルワの王^{ウーシヤ}その他アリアン諸族を合して、ミヒラグラを破り、カシ

ユミールへ遁走させた。ミヒラグラはそこで再舉を計り、手兵を率ゐて大月氏國の舊都ガンダハーラに殺到し、王族以下老幼婦女の區別なく住民を虐殺し、村落都市を掠劫し、寺院を燒毀して、佛都ガンダハーラを一朝にして廢墟と化してしまつた。しかし、ミヒラグラは猩紅熱のために死んだので（五三〇年）白匈奴の勢力はとみに衰退した。

匈奴の厄をのがれたことは、しかし笈多王朝の一藩侯への轉落でもあつた。往年の勢威を誇るに足る武力も財力もなくなつたその後の笈多一族は、またもとの摩伽陀一國の主となるより仕方がなかつた。

カナウジの戒日王

六世紀の終り近くたつて、ターネスワルに都を定めた大きな勢力があつた。それは笈多王朝がまつたく地方王族となつてから、印度が小さな王侯の部分的な統治にゆだねられた頃のことである。ターネスワル王朝の始祖はシラディチア（尸羅阿迭多）と言ふが、彼が吠舍の出身であること以外にその事蹟は明かでない。その子のブラバーカー・ヴァルダナ（波羅羯羅伐彈那）の時代には西北ではパンジャブを、南印ではマルワ地方を領した。しかし、彼は殘存した匈奴を討たうとして軍を

進めたが、六〇四年陣中で歿した。王子ラージャ・ヴァルダナ（羅闍代彈那）が直ちに王位を繼いだ。だが、彼もまた匈奴の一酋長の奸計に陥つて暗殺された（六一〇年）。そこで、彼の弟ハルシャ・ヴァルダナ（曷利沙伐彈那）は推されて陣中に即位し、兄の仇を討つてマルワに進み、ついで北印一帯を平定した。彼はシラディチア二世と稱した、佛書に言ふ戒日王がこれである。彼は前後六年の征討軍を收めるや、都をターネスワルから恒河河岸のカナウジに遷し、五年の後、南方征服を志して大軍をナルバタ河畔に送つた。しかし南印チャルキヤ國には英王ブラケシェイン二世あつて、ハルシャの兵はもろくも潰えた。爾來彼は南方の攻略を思ひ留り、北印一帯の統治に甘んじた。

ハルシャ王はまた深く佛教に歸依した。支那僧玄奘が渡印したのはこの王の美しい平和な治世の時であつた。玄奘の記録「大唐西域記」によれば、「ハルシャ王は深く民治に意を用ひ、各地を巡歴して、民情を視察し、官吏の非違を匡し、動物の殺生を禁じ、貧困者の救恤につとめ、國庫を開いて施與した」と傳へられてゐる。

王はまた哲學・詩・繪畫を愛好して文人を周圍に集めた。のみならず、ハルシャ王自身も詩を作り、音曲を奏し、「龍の歡喜」「清容婦人」の戲曲の創作したといはれる。また王の宮廷に侍つた詩人バーナは叙事詩「ハルシャ・カリタ」を綴つて王の征討行を謳つた。

たまたま渡來した僧玄奘から唐の隆盛をきいたハルシャ王は、唐朝へ使者を送つて（六四一年）友誼を求めた。唐の太宗また王玄策を派遣したが（六四七年）、その時既にハルシャ王は他界してゐた。しかもハルシャ王のあまりにも佛教に厚い保護を興へたことによつて、國中の婆羅門の反感を買ひ、元老院の一員アルジュナを自立して王位につかせてゐたので、輿論は唐との交通を欲しなかつた。それどころか、印度はまたも混亂状態に入らうとしてゐた。そして、ハルシャ王の歿後、約五世紀の間は、殆んど暗黒時代とも言へる群雄割據と分裂と對立の時代が続くのである。

ラージプト期

ハルシャ王の死を契期として全印分裂の状態となつた約五世紀のあひだをラージプト期といふ。それは回教徒王國の建設せられた十一世紀までの間に廣く印度各地に立つた新興國家が何れもラージプト族であつたからである。

ラージプト族とは異民族の印度化されたものに外ならない。われわれは既にいくつかの外寇を知つたが、これらの外國人は印度婦人と結婚し子孫をあげたのである。二代、三代と経つうちに、侵入者の子孫である混血人はいつのまにかアリアン化されて、種姓さへも興へられるに至つた。外國

種といはず原住民といはず王士には刹帝利を興へ、一般庶民は吠舍か首陀羅か何れかに包括されてヒンヅー教の團の中に入れられてしまつた。希臘、波斯、月氏、塞種、匈奴——かういつた雑多な民族が小王國を形づくつて、或ひは鬭争し、或ひは聯合して、長い歲月を送つてゐた。そのころのラージブタナとは、今日のアグラやオードの一部さへも包含した大きな地域であつた。

その他の地にもいくつかの小王國があつた。ベンガルにはサシャンカ（設賞迦）王の後にゴバラなる英雄が出て、ペーラ王朝を開いた。この末のダルマペーラ（七八〇年——八一五年）は名王の名を残した、アッサムにはカーマルーペ王朝があつた。カシュミールのカルコタ王朝にはラリタディチャ王が古代アリアンの行政を廢して、土耳其の制度を模した中央集權を布いた。カナウジのヨショヴァルマン王は絶世の英雄といはれたが、領土擴張をせつてカシュミール王のために謀殺された。中部印度のジョドプールにはグルジャラ王朝のプラチハーラ族が據頭してゐた。南印度では、戒日王の軍隊を破つたチャルキヤ王國が優勢を謳はれてゐたが、七世紀に入るとチオラ王國に併合されるに至つた。チオラ王國にはラージャラージ王といふ英雄が出て、折からデッカンを根據として猛威をふるつたラーシュートラクータ王朝を破り、これを北に退けたが、この偉大なる個人の才能が陣歿すると同時にチオラ王國の頽勢が始まることになつた。

そして印度には、さらに有力な敵が現はれた。訓練された回教徒であつた。その侵入の前の印度は、北のペーラ王国、中印のブラチハーラ王国（グルジャラ族）、南のラーシユトラクート王国の三大國が、文字通り鼎の輕重を問ふべく、大きな舞臺で争つてゐた。

婆伽梵歌

笈多帝國の古代印度精神復活運動は、ヒンヅー教の創始と共に、哲學の領域にも大きな發達を見せることになつた。ウベニシャット以來、多くの哲學者が相ついで、印度獨得の思考形態をもつて、常に生起される問題を解決しようと努めてゐた。そして、かういふ印度哲學の基本となつたものが、「婆伽梵歌」であつた。

「婆伽梵歌」はマハーペーラタの第六章に挿入されてゐるもので、第二十五節から第四十二節にわたる短篇である。その内容は、ペーランドウの第三王子アルジュナとその參謀クリシュナとの十八の對話篇であつて、天下を二分した戦ひの前夜、「王位、國土、享樂、福利を得んがために、同族の師友と戦ひ、祖父、叔伯、義兄弟等親族の凡てを殺戮するは古來の『不殺生道』に逆く罪人となる」と言つて「道」のために「不戰論」を唱へはじめたアルジュナに對して、クリシュナは「聖戰論」

を主張し、智行思想を鼓吹し、「無執著の作業道」を示して、正義の戦ひに決然として劍をとらせるまでの物語である。

この中には、従つて、殆んどの印度哲學の思潮が包含されてゐて、數論、瑜伽、ヴェダンタ等の諸説をとき、それらを縫つて熱烈な有神觀が吐露されるのである。アルジュナの世俗諦に對してクリシュナの第一義諦を對照させ、前者のともすれば陥入る隱遁主義を止揚して、後者の活動主義となさしめるのである。

「あゝ、ペーラタ族の王子よ、正義の衰へ邪惡の榮ゆる時、隨時、われは起つて、顯現し、人をもつて人を動かし、善人を救ひ、惡人を除きて、廢れる徳をば興すなり」

（第四話・六齣）

と言ふクリシュナの叫びは、爾來、印度人の心に棲んだ。魂は不死であつて、劍もこれを傷つけることはできず、火もこれを焼くことはできない。即ち、殺戮は肉身にのみ留つて、魂を亡ぼすものではなく、肉身を失つた魂は新たな住所を見出す——といふ「アヒサム」の思想は、この婆伽梵歌

から發してゐるのである。

婆伽梵歌の製作年代は、西曆前三世紀から遅くも西曆三世紀までの間と推定されてゐるが、その中に豊富に含まれた數論や瑜伽の思想が、それぞれ獨立して發展し、次に説く印度六派哲學の完成を見るに到るのであつた。

印度六派哲學

一般に印度六派哲學と呼んでゐるのは、數論派、瑜伽派、勝論派、正理派、ミーマンサー派、ヴェダンタ派の六派である。

印度哲學はこれを一言にして言ふならば解脱哲學である。解脱とは何か——解脱の當體、所在、その實現法、これと宇宙との關係——さういつた問題に關聯した實踐哲學であり、宗教哲學であつた。そして、これを宗教思潮から見れば、六派哲學は多少に拘らず吠陀を本源とする婆羅門思想であつた。中でも、ミーマンサー派は吠陀の祭祀を實踐することを目的とし、ヴェダンタ派はウパニシャットから發展した婆羅門思想の哲學的方面を闡明しようとしたもので、共に婆羅門思想の正系と言へる。勝論派は自然哲學を、正理派は論理學を教理として、婆羅門思想の傍系をなしてゐる。

理論を展開する數論派と實踐を主眼とする瑜伽派とは同じ傾向に屬するものと見られ、中でも數論思想はその當初は恐らく明かに非婆羅門思想から出發したものに違ひなかつた。

印度で哲學を意味する原語を直觀と言つてゐるやうに、内觀や禪定による思考が織りなす一聯の哲學體系は、決して西歐風の所謂「哲學」ではないのである。それは飽くまで解脱を理想として教理が樹てられてゐることを知らしめるものである。印度思想の根本に横はつてゐる六派哲學の一端を窺つて、印度的思考を知らうと思ふ。

數論派——開祖カピラ仙の年代（西曆前四世紀頃）から見て、この派の思想が六派哲學中では最も古のものと思はれる。しかも、數論派の主張するところは、現世多苦觀であり、吠陀過失の是認、人類平等主義であるところから考へても、あきらかに非婆羅門思想から發祥したものであつた。

その説くところは自性（物）と神我（心）の二元論で、自性は更に開展して、喜、憂、闇の三性となる。萬有は喜性より生ずる五惟、憂性より發する十三根、闇性の爲す五大——即ち二十三諦からなつてゐる。神我はたゞ見ることに（純主觀）にあつて、心の作用と考へる智情意の作用も變化する限り、物質現象と見なさざるを得ない。

とくに於て神我の獨存が解脱であり、自性が神我を解脱せしめるのであつて、解脱體としての神我と宇宙の本源としての自性と二實有論であるところに特徴があつた。西曆五世紀頃に「數論頌」なる經典がなつて（自在黒派）、今日の體系を整へたものである。

瑜伽派——瑜伽とは心統一である。即ち心作用を減して、外界への染着を離れ、心を平靜集中的に保つ内觀的修業である。その修業の代表的なものを八支といつて、禁制、勸制、座法、調息、制根、總持、禪定、三昧であるとし、特に總持（心を一個所に結合すること）禪定（表象の對象との一致融合）三昧（對象のみ輝き心の空になつた位）を總制といつて、この境地に入れば神通を得、生死の繫縛のない瑜伽の骨子とされてゐる。

これを要するに瑜伽派は數論思想の展開として、その實踐的な方向を特に發展させたものと見ることが出来る。今日傳はつてゐる瑜伽經は開祖バタンジャリの手になつたものと稱されてゐるが、恐らく西紀五、六世紀に完成されたものの如くである。

勝論派——この派の主張するところは、極微の實在を説く自然哲學である。一切萬有は極微から

成つてゐる、極微は無數でかつ常住である、としてさらに萬有の生滅を説明するために、實、徳、業、同、異、和合の六句義を立てた。實とは萬有を觀察して、具體物より性質、運動、狀態等を抽出して、實體又は主體概念に到達したものと云ひ、地、水、火、風、空、時、方、我、意の九實とした。かくして、句義の研究によつて、輪廻の原因を法非法（不可見法則）として、これを滅して「我」が他の一切から離れて獨存に住するのを解脱と呼んでゐるのである。

カーナーダを開祖すると傳へられ、勝論派の經典も、前二世紀頃から製作されはじめ、西曆五、六世紀に到つて今の形に整理されたものであらう。

正理派——本派は論理學を主とする一派で、ニヤイヤとは「主題の奥意を究めること」即ち「分析」である。開祖はゴータマと言ひ、正智（論理）即ち解脱智を求めるところから、特種な論理を發展させたものであつた。

量論（認識論）は自ら知識を得るために幾多の方式を明かにするが、更に論式論によつて他に傳へることができる。本派の立てる論式は五段で、宗、因、喻、合、結がこれである。いま一例をあげれば、

宗 かの山に火あるべし。

因 煙ある故に。

喩 竈の如し、竈に於て煙と火とを見よ。

合 かくの如く、かの山に煙あり。

結 この故にかの山に火あるべし。

この論式中、前の二段乃至は後の二段を省略すれば、まったくアリストテレスの三段論法と相等しいことを知られるであらう。

ミーマンサー派——吠陀ヴェダを天啓とし、祭式萬能を説く開祖ジャイミニは、吠陀の絶対常住を高唱したのであつた。彼は言つてゐる。吠陀は絶対常住で人間の作ではない、この吠陀の啓示を古聖が傳へたものが吠陀であつて、吠陀の示す聲（觀念）の常住から、聲の表す物との關係も常住と説き、進んで「聲常住論」へと發展して行つたのであつた。

これは「聲無常論」と對比されて、印度思想に於ては論争された問題であつたが、「聲常住論」は第一に聲が刹那消滅（無常）であればその意味を傳へることができないこと、第二に聲によつて同

一物が意味されること、第三に聲には數がなく、第四に凡て無常なるものは生滅に支配され、その原因が認められるが聲にはかういふ原因がないこと、第五に吠陀ヴェダには風が聲になると言はれてゐるが、この聲とは異なる、第六に吠陀に「常住なる聲をもつて」とある——といふ理由をあげてゐるが、これを要するに聲を觀念とみるか音聲響と解するかによつて、前者は常住となり、後者は無常となる譯であつた。

ヴェダンタ派——ヴェダンタとは「吠陀の終り」といふ意味であつて、開祖はバーダラーヤナである。もつとも正統的な婆羅門哲學であつて、梵を純精神的實在とし、それが宇宙の生滅の原因であると定義したところから出發するのである。

元來がウパニシャットの思想を統一しようとして起つたこの哲學は、婆伽梵歌などを補助として製作されたものであつた。六派哲學の經典キョウケンは何れも表現が餘りにも簡潔で、省略しすぎてゐるうらみがあるが、ヴェダンタ經（梵經）では特にそれが甚しい。そのためシャンカラ（八世紀）やラーマヌジャ（十一世紀）の註釋書が必要となつて來たのであつた。

シャンカラの説は絶対不二論であつて、最高梵のみを唯一存在とし、それとわれわれの本性であ

る最高我とを同じであるとして、その他の存在は否定するのであつた。

ラーマーマヌヂヤの説は被限定不二論と言はれてゐるが、彼は梵を宇宙の本源としながらも、同時に自在神と見、これに自我と物質の二原理を合せて、三原理を立て、一切は梵の一元に包括されるもの、自我も物質も梵の様相として實在性を保つ、と言ひ、両者は梵を限定するところから、上述のやうに呼ばれたのであつた。

シヤンカラは梵我一如を説き、ラーマーマヌヂヤは有神論を發展させ、ヴェダンタ思想をまつたく一神教たらしめたのである。

第八章 回教徒侵入時代

(七百年—千二百年)

最初の侵入

アラビヤ人は始め水夫や商人として印度といくらかの交渉を持つてゐた。ところがアラビヤ人が波斯に強力な回教^{*}の政府を樹立すると、印度は忽ち彼等の關心を惹いた。波斯や希臘は曾て數回の印度侵入によつて、印度が無限の富をもち、かつ人的資源の寶庫であることを知つてゐたからであつた。そこで印度へ對する最初の遠征が企畫された。

この遠征隊は六千人のアラビヤ回教徒^{*}で、わづか二十歳の青年ムハマッド・ビン・カーシムがその頭目であつた。

註* 回教と書くが、正しくはイスラム教と言ふべきである。アラビヤ語の「アスラーマ」(神に歸依する)からの轉訛である。教祖マホメットはある日神の啓示を得て豫言者となつた。回

教の神はアラブで唯一神教である。彼等は偶像を絶対に認めないし、階級も存在しない。印度へ回教徒が侵入したのは、偶像破壊の聖戦であり、印度に回教徒が増したのも回教には種姓の煩はしさがなかつたからである。回教を教祖の名に因んでマホメット教と呼ぶのは正しくない。

** 回教徒はモスレム、ムスルマンと呼ばれる。またマホメダンとも言ふがこれは上述の通り正しくない。支那で回々といつたのが我國へ傳つて回教、回教徒といふ字をあてるやうになつたのである。

彼等の名目とするところは、アラビヤ海で海賊のために失つたアラビヤ船の損害を請求することにあつた。六千人の回教兵士がシンド地方に侵入したのは七一一年のことである。こんなに僅かな兵力で、シンド地方といつてもその頃はインダス河口からカシュミールまで、八百哩もの地方をその手中に収めたのは、たしかに印度軍の聯絡と組織に大きな缺陷があつたからである。とに角、回教徒の海軍力などはお話にならなかつた。若し大がかりな反撃が行はれたならば、カーシムの軍勢は一とたまりもなかつた筈であつた。

そんなことがなかつたといふのは、たしかにカーシムの政治力が卓越してゐたことを教へるもの

と考へられる。彼は覇權の確定した地域を地方別にして政治の責任者を任用した。その政治はあきらかに前にあつた戦國時代のやうな荒廢と、亂立と、無秩序な政治よりはまさつたものであつた。

「汝の敵が心から従ふやうな親切を示せ、そして彼等を慰めよ」

といふのが、カーシムの信條であつた。彼の部下は忠實にこれを實行した。虐げられた人々、その中で種姓のためにいつも胸一ぱいに空気を呼吸することさへできなかつたやうな首陀羅に屬する大衆は、進んで回教に改宗した。回教の中には種姓のやうな生れ落ちた瞬間から身分を區別するといふ法則はなかつたからである。

カーシムの遠征は、かうして成功裡にいよいよ結實して行きさうに思へた。が、不幸なことに、このやさしい支配者の生命はさう長くは保たなかつた。七一四年——わづか三年の君臨で彼はあまりにも若い生涯を終つた。さうして、回教徒の最初の侵入も挫折した。

ガズニ王朝

回教王國は一人の回教王をいたゞいて、その下に多くの總督を置き、地域別に西南亞細亞一帯の龐大な版圖を經營してゐたのであつた。曾て印度へ最初の足跡を印したムハマッド・カーシムの屬

してゐたダマスカスの回教王の權威は、その後いくばくもなくして衰へて行つた。九世紀には波斯に新しい回教王國(サーマーニ王朝)が現れた。十世紀に入ると、もう王の勢威は辛うじて虚位を擁してゐるのみであつた。その結果、各地に駐屯したスルタンが、既に實質的には王であつたのだが、改めて名實そなはつた王として君臨するやうになつた。

ダンダハールとカプールの間の一部落、ソリイマン山脈の丘陵部に小侯國を起したガスニ家の來歴もさういつた混亂時代の所産であつた。サーマーニ王の下にトルコ系の奴隸として仕へてゐたアルプテキンがその創始者であつた(九六二年)。その後は實子イシャークが繼ぎ、さらにその後を襲つたのは養嗣子のセブクテキン(九七六年—九九七年)であつた。彼も亦その義父と同じくトルコ系の奴隸であつた。ガスニ王家は三代目のセブクテキンによつて、アフガン一帯に名を知られる大勢力となつた。のみならず、彼はベンジャブ地方へ回教勢力を浸潤させたことによつて、ガスニ家の名譽を一層高めたのであつた。そのためには、ガスニ王國と隣接してゐた地方王族であるジャイパール王の領土は侵略の危険にさらされることになつた。

ジャイパール王はガスニ王家の日ましに隆盛となるのに羨望せざるを得なかつた。彼は失地を回復するといふことよりも、ガスニ王朝に一撃を加へたいといふ欲望にかられて、九七七年、大兵を

率ゐてソリイマン山脈に向ひ、カイベル峠を越えて進撃した。

これを邀へ撃つセブクテキンの兵は風土に馴れた精銳であつた。印度軍は峠を越えて一気にカプールまで侵入したものの、退路をすつかり扼されて、進退兩難に落入つた。折から雷鳴とゞろき、高原を吹きすさぶ暴風に印度軍の志氣はみるみる沮喪した。加へて包圍された戦争はその大部分の兵を失ふ不利さへもまねいた。ジャイパール王は和を講ぜざるを得なかつた。

ガスニ王の戦利品は象五十頭と價金百萬デラムと定められて、ジャイパール王は敗殘の兵をまとめて歸路についた。ところが、國へ歸りついで見れば、價金を拂ふといふことが如何にも無駄な業のやうに思はれるのである。しかも王の側近には婆羅門僧がゐて、異教徒に大金を分與することを許す筈もなかつた。そこでジャイパール王は價金を支拂はぬことに決心した。

セブクテキンは遂に遠征軍を送つた。回教軍の恐るべき實力を知つてゐるジャイパール王はカナウジ及びカラシヤールの諸王と聯合して、十萬の同盟軍を組織し、兩軍の主力は激突した(九九一年)。その結果は再び印度軍の敗北であつた。しかも今度は自國の中で……肉食をつねとしてゐる新侵入者は體軀ばかりでなく、戦争そのものにも熟達してゐた。その上、彼等には何よりも宗教的な團結心があつた。これらが勝因として數へられてゐるが、實を言へば爛熟した文化に浴して

暫く外敵を忘れてゐた印度軍の力が豫想外に劣弱であつたからでもあつた。

セブクテキンは長く勝利に酔つてゐるやうな愚なことはしなかつた。彼は豫定の戦利品をうけとると、さつさと兵をひき上げて歸つて行つた。まだこの頃の回教徒の侵入といふのには、毫も領土的な野心が含まれてゐなかつた證據である。

マームツトの來寇

セブクテキンは九九七年に死んだ。その後継者は妾腹の子マームツト(九九八年——一〇三〇年)であつた。彼は父の正妻の弟イズメイルと王位を争つて、遂にこれを獲得したのである。彼の生涯はこの最初の日に行はれたやうに、絶えざる鬭争の連続であつた。この庶子は年齒わづか二十八歳でガズニ王國を背負つて立つた。しかも、彼は始めてスルタンといふ名稱を公式に許された最初の君主であつた。

まことに彼こそ「右手に劍を持ち、左手にコーランを捧げる」に相應しい回教徒の王であつた。彼はその父の時代からの隣國である印度との紛争をよく知つてゐた。そして彼にとつては印度は單なる敵對國ではなかつた。それは「異教徒」の國であつた。それは「偶像」の國であつた。ま

さに印度は宗教の敵であつた。

彼は印度へ侵入するまでに四年間の準備期間をもつた。このあひだに彼は部下を訓練した。そして來るべき戦ひが「神聖な戦争」であることを吹きこんだ。精悍な回教徒兵は、その戦ひが神の戦ひであると言はれて一そう振ひ立つた。一〇〇一年のことである、マームツト王は嚴かに宣誓した。印度に於ける偶像を破壊し、その財寶を失はしめ、異教徒を奴隸とするために、毎年一回は神聖戦争を遂行する——と。この宣誓が終ると、數萬の白衣の騎馬隊は砂塵をあげて出發した。迅速な行動だけが短期間の嵐のやうな却奪に役立つことを知つて彼は主として騎兵を軍團の單位にしたのだ。

註*

コーランは言ふまでもなく回教の聖典である。その内容は神の言葉をマホメツトが傳へ、それをそのまま記録したものと云はれてゐる。全篇百十四章、彪大な聖典といへる。成立年代はマホメツトの死後二十年にして完成したが、これを更に第三世教主オスマーンが用語を統一して今日の形となつた。コーランには種々の名稱があるが、クルアーン・カリーム(高貴なるコーラン)アル・キターブ(唯一の書)などと呼ばれてゐる。なほ、コーランといふ意味はアラビキ語で「讀む」といふ義である。